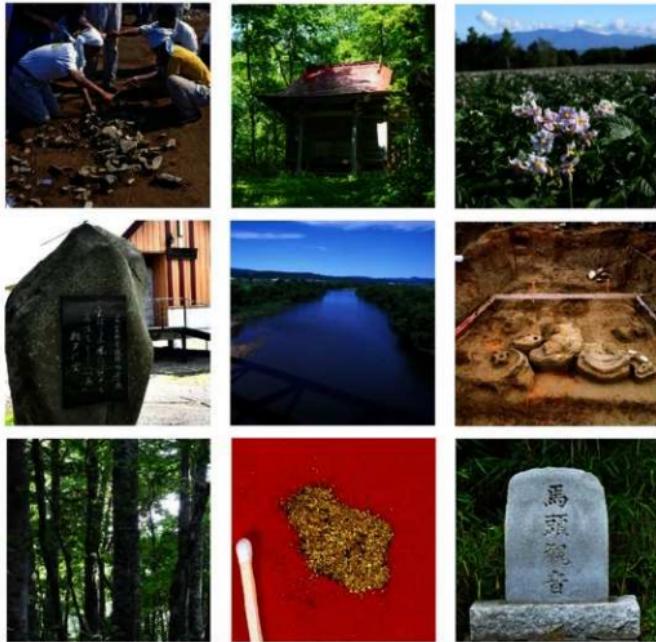


今金町

文化財保存活用地域計画



令和4年7月

北海道今金町

例 言

1. 本計画は、文化財保護法第183条の3に基づく、北海道今金町の文化財の保存・活用に関する総合的な法定計画である。
2. 本計画の作成期間は令和2年度からの2か年で、令和3年度は文化庁の補助金（文化芸術振興費補助金「地域文化財総合活用推進事業」）の補助を受けて作成作業を進めた。
3. 令和4年3月に作成した計画は、同年4月以降に文化庁協議を行い、申請に必要な業務を行い、同年7月22日に文化庁長官の認定を受けた。
4. 計画作成にあたり、今金町文化財保存活用地域計画策定委員会を設置し、計画案の検討を行うとともに、今金町文化財保護委員会において内容を審議し、作成した。作成過程においては、文化庁の指導・助言および北海道教育委員会の助言を受けた。
5. 本計画の編集は、今金町教育委員会事務局社会教育グループが行った。
6. 本書の年代表記は、元号の表記を原則とし、必要に応じて西暦を併記することとする。
7. 本書で用いる時代区分・呼称は次の通りとする。



更新履歴

- ・令和4年9月30日　字句の訂正

目 次

序章	1
第 1 節 作成の背景と目的	1
第 2 節 地域計画の位置付け	1
第 3 節 計画期間	2
第 4 節 計画の目標	2
第 5 節 用語の定義	3
第 6 節 上位計画・関連計画等の概要	5
第 7 節 計画作成の体制と経過	7
 第 1 章 今金町の概要	10
第 1 節 自然的・地理的環境	10
第 2 節 社会的状況	19
第 3 節 歴史的背景	25
 第 2 章 今金町の歴史文化資源の概要と特徴	37
第 1 節 既存の把握調査の概要	37
第 2 節 指定文化財の概要	41
第 3 節 歴史文化資源の概要	45
第 4 節 今金町の歴史文化資源の特徴	46
 第 3 章 今金町の歴史文化の特徴	48
第 1 節 今金町の歴史文化の概要	48
第 2 節 今金町の歴史文化の特徴	49
 第 4 章 歴史文化の保存・活用に関する基本理念・方針	57
第 1 節 歴史文化の保存・活用に関する現状と課題	57
第 2 節 歴史文化の保存・活用に関する基本理念	60
第 3 節 歴史文化の保存・活用に関する方針	60
第 4 節 関連文化財群に関する事項	62

第 5 章 歴史文化の保存・活用に関する措置	74
第 1 節 歴史文化の保存・活用に関する措置の概要	74
第 2 節 歴史文化の保存・活用に関する措置	75
第 3 節 関連文化財群の保存・活用に関する措置	79
第 6 章 歴史文化の保存・活用の推進体制	80
第 1 節 町の推進体制	80
第 2 節 町民・住民団体との連携体制	82
第 3 節 文化財の防災・防犯体制	83
第 4 節 計画の進行管理	85
資料編	86
資料 1 令和 3 年度把握調査の内容一覧	86
資料 2 今金町の歴史文化資源一覧	87
資料 3 今金町文化財保存活用地域計画策定委員会設置要綱	98
資料 4 「課題－方針－措置」対照表	99

表紙写真



序 章

第1節 作成の背景と目的

いまとからちょう
今金町には国指定史跡ビリカ遺跡をはじめ、ビリカカイギュウ化石等の文化財が知られていますが、指定文化財は計9件と多くはありません。

これは決して文化財が少ない地域ということではなく、本来あるはずの文化財をきちんと把握し、それらを専門的な観点から評価、価値付けするという取組が低調であったことの裏返しととらえています。

近年、日本の社会は少子高齢化に加えて人口減少が益々進行し、大切な文化財を未来に引き継ぐことに大きな課題があると指摘されています。この傾向は今金町においても顕著で、今のうちに調査・把握をしておかなければ、貴重な文化財を失ってしまう恐れがあります。

この観点に立ち、未指定の文化財も含め、有形・無形の文化財の把握調査を早めに進め、適切な保存管理体制を検討・構築し、今後の今金町のまちづくりに文化財を活用していく取組を市民とともに展開していくために、地域計画を作成するものです。

第2節 地域計画の位置づけ

今金町では令和2年度（2020）に新しい総合計画が策定され、令和3年度（2021）から12年度（2030）までの10年間の町政の基本構想が示されました。この中には、図0-1のように今回作成する本地域計画がその下位計画として位置付けられ、町が策定する他の関連計画等と連携をとりながら本地域計画を推進することが明記されています。また、北海道文化財保存活用大綱を勘案し、整合性を図ることとしています。

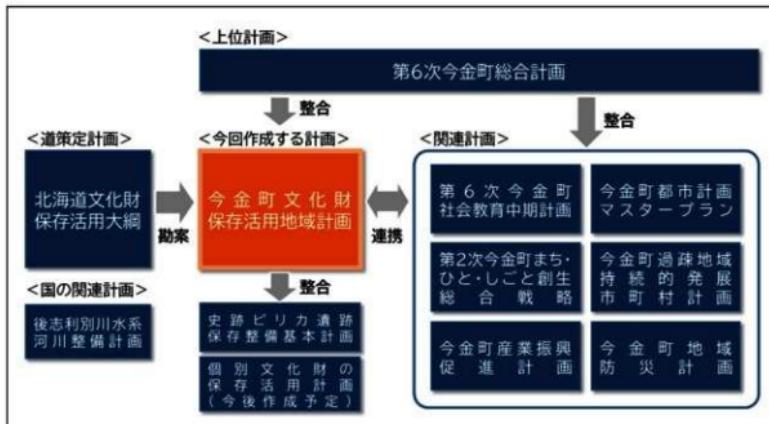


図0-1 今金町文化財保存活用地域計画の位置づけ

第3節 計画期間

本地域計画の計画期間は、上位計画に当たる今金町総合計画の計画期間と歩調を合わせることとし、令和4年度（2022）から12年度（2030）までの9年間とします（図0-2）。

なお、総合計画の前期基本計画最終年度となる令和7年度（2025）に本地域計画の中間評価、後期基本計画最終年度となる令和12年度（2030）に総合評価を行い、それぞれ必要な見直し・修正を加えるものとします。見直し・修正に伴う軽微な変更については、北海道を通じて文化庁に連絡し、大きな変更（計画期間の変更、町内に存する文化財の保存に影響を与える恐れのある変更、本地域計画の実施に支障が生じる恐れのある変更）の場合は、文化庁長官による変更の認定を受けることとします（第6章第4節「計画の進行管理」参照）。

年度(令和)	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
今金町総合計画	第6次（10ヵ年）										
今金町文化財 保存活用地域計画	前期基本計画（5ヵ年）				後期基本計画（5ヵ年）						
作成作業	第1次（9ヵ年） 令和4年～12年度							第2次			

図0-2 今金町文化財保存活用地域計画の計画期間

第4節 計画の目標

本地域計画の目的達成のため設定する目標は、町の総合計画の掲げる将来像や目指す姿と整合性をもつこととします。第6次今金町総合計画が掲げる町の将来像は、次の通り記載されています。

今金町の将来像

みんなで創る 未来を拓く物語

～人と人の想いで紡ぐ、やさしさあふれる町～

本町は、日本を代表する清流である後志利別川と緑豊かな平野と丘陵が広がり、豊かな自然環境とともに先史時代の遺跡をはじめとして先祖から受け継がれてきた歴史や文化があります。
しりべしとしべつがわ

これらの自然や歴史を守り、資源を未来に引き継いで行くためには、自分たちの力で自らのまちをつくるという自立意識と、常に町民と行政が共有し、広い視野でまちづくりを進める必要があります。（以下省略）

「第6次今金町総合計画【基本構想】」23頁

また、総合計画の基本目標 1 の「文化振興」の分野で、その目指す姿が次の通り示されています。

文化振興

町民が文化に親しみ文化活動に参加できる環境づくりや文化・芸術の担い手を育成するとともに、本町や我が国にとってかけがえのない文化財を保護し、基礎的な調査・研究に取り組み、身近にある文化財の価値を磨き上げ、その価値を学ぶ機会を設けることにより、郷土に誇りを持てる人材を育成するまちづくりを目指します。

〔第 6 次今金町総合計画〔前期基本計画〕〕20 頁

上記のように、総合計画が示す目指す姿は、調査・研究や学習機会の設定といった手法を通して文化財の理解者を増やすことから着手し、そして郷土に誇りを持てる人材育成を目指すことを掲げています。

以上のこととふまえ、本地域計画の目的達成のために設定する目標を「文化財を守り、調べ、磨き上げ、郷土に誇りを持てる人を育てる」と定めます。そして、その基本理念と方針、具体的なアクションプランを示す役割を本地域計画が担います。

《計画の目標》

文化財を守り、調べ、磨き上げ、郷土に誇りを持てる人を育てる

第 5 節 用語の定義

「文化財」とは、文化財保護法第 2 条の定義に基づき、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群の 6 類型を指しています。それらのうち、一定の基準を満たしたものが、所定の手続きを経て指定・登録文化財となり、これらを「指定等文化財」と呼びます。指定には国、北海道、町によるものがあり、それぞれ文化財保護法、北海道文化財保護条例、今金町文化財保護条例の規定によって行なわれます。また、文化財保護法では上記の 6 類型に加え、埋蔵文化財および文化財の保存技術についても保護の対象としています。

本地域計画では、法律や条例等で規定されない未指定文化財のほか、今金町の歴史や文化、自然等の特徴を物語る様々な要素も対象にすることとします。それは、従来の法律の規定ではとらえきれないもので、今金町の歴史的・文化的文脈の中でとらえられるものを「歴史文化資源」と呼ぶこととします。「歴史文化資源」は、指定文化財や未指定文化財を包括し、今金町の歴史的・文化的脈絡の中でとらえられるすべてのものを対象とします（図 0-3）。

無数にある「歴史文化資源」の中でも、今金町民に大切にされている「もの」や「こと」、今金町に根差し、今金町の特徴を表すものについては「いまかね遺産」と呼ぶこととし、「いまかね遺産」の選定は、町民等からなる選定会議の審議を経て決定します（図0-3・第6章第2節参照）。

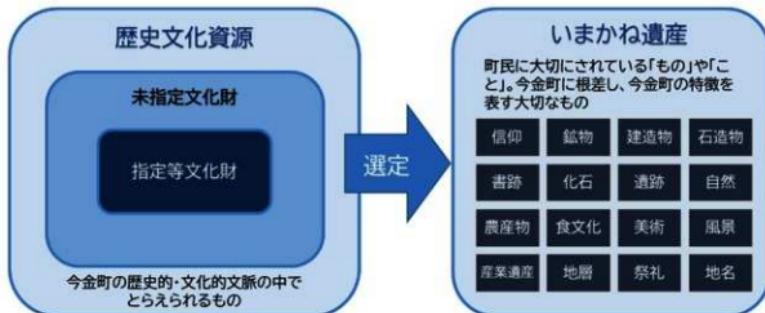


図0-3 「歴史文化資源」と「いまかね遺産」の概念図

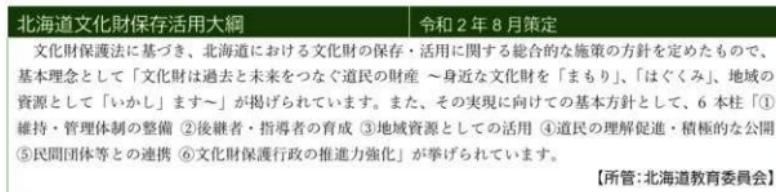
このように多様な「歴史文化資源」を総体的に把握し、相互に結びつけて考え、また独自に価値付けすることによって、それまでは見えづらかった様々な資源や人々の活動がより身近に、かつ豊かに認識できるようになります。そして、多くの町民が自分たちの住む町の歴史や文化、自然等に愛着や誇りを持つきっかけになることを期待します。

第6節 上位計画・関連計画等の概要

○上位計画



○道策定計画



○関連計画

第2次今金町まち・ひと・しごと創生総合戦略	計画期間:令和2年度～令和6年度
国の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づき、当町の人口減少対策と地方創生に特化した目標や施策の基本方向をまとめたものです。	
文化財保護分野に関しては、「基本目標2 今金町へ新しい人の流れをつくる」の具体的な施策として「観光資源の発掘と地域特産品の活性化」や「地域の再生を加速化させる」の取組が、また「基本目標4 地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに地域と地域を連携する」の具体的な施策として「独自の自然・歴史資源の発信による地域の魅力向上」の取組が掲げられています。(令和元年12月策定)	【所管:まちづくり推進課】
第6次今金町社会教育中期計画	
第6次今金町総合計画の社会教育分野の5項目（「人の育成」・「社会教育」・「スポーツ振興」・「文化振興」）を抽出・集約し、各細別項目についての具体的な取組内容を記したものです。	計画期間:令和3年度～令和7年度
文化財保護の分野に関しては、本地域計画の作成によってより具体的・計画的に取組を進めることとしています。(令和3年2月策定)	【所管:教育委員会事務局】
今金町都市計画マスタープラン	
都市計画法に規定される市町村の都市計画に関する基本的な方針で、市町村が住民の意見を反映させて、都市づくりの将来ビジョンを確立し、地域別の整備課題に応じた整備方針や地域別の諸施設の計画等を総合的に定めたものです。	計画期間:平成27年～令和4年度
平成14年度に策定後、平成27年度に見直しが行われ、計画期間は令和4年度までです。計画対象区域は市街地一帯（約440ha）を基本としています。将来都市像として「みんなで拓く豊かな地域資源を活かした住み良い住環境都市」が掲げられています。	【所管:市長室】
文化財保護の分野については、基本目標「(1) 地域資源を活かしたまちづくり」の中で、「これらの美しい自然、その自然が育んだ特産品、そしてビリカ遺跡に見られるように先達たちが築いた歴史による優れた文化財といった地域資源をより一層活かすまちづくりを町民一人ひとりが知恵をしぼりながら進めていく」ことが掲げられています。(平成27年3月策定)	【所管:公営施設課】
今金町過疎地域持続的発展市町村計画	
令和3年3月に新たに過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法が施行されたことを受け、北海道過疎地域持続的発展方針を勘案し、各市町村がその持続的発展を図ることを目的に総合的かつ計画的な対策を定めたものです。	計画期間:令和3年度～令和7年度
文化財保護の分野に関しては、「10 地域文化の振興等」の中で「文化財の保存と継承・活用事業」と題し、「史跡ビリカ遺跡の保存、整備活用施設を充実させ、町内の文化財の保存と継承・活用を図ることなどが掲げられています。(令和3年9月策定)	【所管:まちづくり推進課】
今金町地域防災計画	
災害対策基本法および今金町防災会議条例に基づき、今金町の防災に関して今金町防災会議が作成する総合的な計画です。	令和2年3月策定以降、随時更新
文化財保護分野に関しては、「第5章第16節 文教対策計画」の「第7項 文化財保全対策」の中で、「災害が発生したときは、文化財の所有者及び管理者は、常に当該指定物件の保全保護にあたるものとする。また撤出可能な文化財については性質、保全の知識を有する搬出責任者を定め災害時にあたっての保安に努める」と定められています。	【所管:まちづくり推進課】

今金町産業振興促進計画	計画期間：令和元年度～令和5年度
半島振興法に基づき、基幹産業の農林業振興策や観光振興、定住促進のための支援策の充実等の事業展開に当たっての諸施策を定めたものです。	
文化財保護に関連した観光振興の分野については、「観光関連施設の整備充実を図り、自然豊かな空間を最大限活用した観光レクリエーション・体験型観光の推進とともに、魅力ある特産品の提供に努め、観光イベントを推進し、広域観光ルートの整備促進を図り、交流人口の拡大や地域経済の活性化を図るため観光産業を推進する。」と定められています。（平成31年3月策定）	【所管：まちづくり推進課】
史跡ビリカ遺跡保存整備基本計画	
平成3年にビリカ遺跡出土品が国の重要文化財に指定され、その後ビリカ遺跡全体の国史跡指定を目指し、また併行して進められていた「今金町博物館（仮称）および今金町ビリカ旧石器の森（仮称）基本構想」の策定を受け、ビリカ遺跡の保存整備についての具体的方針を定めたものです。	
【所管：教育委員会事務局】	

第7節 計画作成の体制と経過

今金町は、平成30年度（2018）の文化財保護法改正後、同年秋から文化財保存活用地域計画の作成に向けた検討を開始しました。

令和元年度（2019）12月から翌年度の2か年かけて行われた第6次今金町総合計画策定審議の中で、当地域計画の作成を想定した検討・協議を行い、総合計画の中での本地域計画の位置付けや、地域計画の目指す目標を立てました。これと並行し、基礎的な文献調査や町内文化財の網羅的な把握調査を実施しました。

令和3年度（2021）4月、「今金町文化財保存活用地域計画策定委員会」を設置し、表0-1に示す構成員により組織し、計画案の検討を行いました。オブザーバーとして文化庁の岡本公秀調査官、北海道文化財・博物館課の鶴田純子主査に参加いただきました。また、地方文化財保護審議会に相当する今金町文化財保護委員会（表0-2）の定例会議で、本地域計画の内容についても議題に加え、意見交換を重ねました。

令和3年度の審議・作成経過は表0-3の通りです。

表0-1 今金町文化財保存活用地域計画策定委員会

区分	氏名	所属・役職等	備考
委員	長沼 孝	北海道理藏文化財センター理事長	委員長
	紀藤 典夫	北海道教育大学函館校国際地学科教授	
	能條 歩	北海道教育大学岩見沢校教授	
	山田 大隆	北海道産業遺産学会会長	
	宮塚 義人	宮塚文化財研究所所長	
	千葉 里美	札幌国際大学観光学部教授	
	小林 孝二	NPO 法人歴史的地域資産研究機構技術専門員	
	仁木 明	今金町農業協同組合専務理事	
	多田 佳正	今金町観光協会会长	
	小田島輝志	今金町文化財保護委員会委員長 ビリカ遺跡ボランティアの会会長	副委員長
オブザーバー	勝山 英敏	今金町町内会自治会連合会理事	
	酒井 豊志	今金町校長会会长	
事務局	岡本 公秀	文化庁地域文化創生本部文化財調査官	
	鶴田 純子	北海道教育庁文化財・博物館課主査	
連携課	住吉 淳	今金町教育委員会事務局長	
	早坂 靖	今金町教育委員会事務次長	
	宮本 雅通	今金町教育委員会事務局主幹・学芸員	
	樋口 喬士	今金町教育委員会事務局社会教育主事	
	山田 薫	今金町役場まちづくり推進課長	
	寺崎 康史	今金町役場まちづくり推進課参事	
	柳原 愛歌	今金町役場まちづくり推進課地域おこし協力隊	

※役職は令和3年（2021）年現在

表0-2 今金町文化財保護委員会

区分	氏名	所属・役職等	備考
委員	小田島輝志	ビリカ遺跡ボランティアの会会長	委員長
	神野 正博	保安・警備会社所長	副委員長
	久保田幸子	今金町文化協会会长	
	秋山 道子	大型紙芝居じゃがいもの花代表	
	千葉 勝一	今金町歴史をたどる会会員	
	小西 義行	観光施設支配人	

※役職は令和3年（2021）年現在

表0-3 審議・作成経過

年月日	内容
令和3年度	4月 22日 第1回今金町文化財保護委員会の開催
	5月 13日 第1回今金町文化財保存活用地域計画策定委員会の開催、策定委員会へ諮詢
	9月 6日 第2回今金町文化財保護委員会の開催
	10月 19日 今金町文化財保存活用地域計画作成に向けた文化庁意見照会
	10月 22日 第2回今金町文化財保存活用地域計画策定委員会の開催
	12月 10日 今金町文化財保存活用地域計画に関する文化庁派遣アドバイザー指導
	12月 11日 今金町文化財保存活用地域計画推進フォーラムの開催
	1月 14日 第3回今金町文化財保存活用地域計画策定委員会の開催

	1月18日	今金町文化財保存活用地域計画作成に向けた文化庁意見照会
	3月1日	第3回今金町文化財保護委員会の開催
	3月7日	今金町文化財保存活用地域計画作成に向けた文化庁意見照会
	3月15日	第4回今金町文化財保存活用地域計画策定委員会の開催
	3月18~28日	今金町文化財保存活用地域計画（案）パブリックコメントの実施
	3月31日	策定委員会から町長へ計画案の答申

第1章 今金町の概要

第1節 自然的・地理的環境

○地形の概況

今金町は北海道南西部、渡島半島の付け根に位置し、日本海側の檜山振興局管内北端に当たります。西はせたな町、南は八雲町、東は長万部町、北は島牧村の4町に接し、渡島半島では珍しく海岸をもたない自治体です。町域面積は 568.25 km²で、この町域は明治 30 年（1897）に、西隣の瀬棚村から分村した時点（当時は利別村）から変わることなく、現在に至っています。

町の北には標高 1,000m 級の山々（メップ岳、カニカン岳、長万部岳等）が、南には 1,200m 級の遊楽部岳とそれに連なる山々がそびえ、町域は南と北の高い山々に囲



図1-1 檜山振興局と今金町の位置



図1-2 今金町とその周辺の地形(地理院地図を改変)

まれた地形となっています（図1-2）。

町の北東端にある長万部岳に源を発して町の中心を西へ流れる後志利別川は、流路延長80.1kmで、渡島半島唯一の一級河川です。それに沿うように低地には水田・台地・段丘上には畑・牧草地等が拓け、それらを取り囲むように森林が広がっています。町域面積の約8割を森林が占め、緑豊かな地域とも言えます（表1-1）。

表1-1 今金町の森林面積(単位:ha)

町域面積	森林面積 () は全体に占める割合		
	国有林	民有林	計
56,825ha	26,924ha (47%)	18,600ha (33%)	45,524ha (80%)

区域面積は「令和3年北海道統計書」、森林面積は「令和元年度北海道林業統計」による

後志利別川は、町の豊かな自然環境の源泉と言えるものですが、多くの支流が流れ込むことから、かつて大洪水を頻繁に繰り返す「道南一の暴れ川」と呼ばれていました。その反面、流域沿いの土地を肥沃なものにし、農業に適した地域にしたとも言えます。この後志利別川中流域から下流域一帯に広がる平野は瀬棚平野と呼ばれ、渡島半島最大の穀倉地帯として知られています。

度重なる洪水被害をなくすため、昭和期に河川改修が進められ、平成期のダム建設によって洪水被害は大幅に減りました。一方、東部の上流域は硬い岩盤に遮られ、流路が大きく屈曲する特徴をもっています（図1-4）。

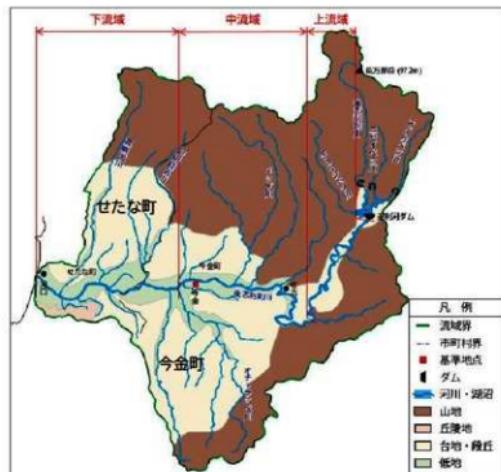


図1-3 後志利別川の水系図（「後志利別川水系河川整備計画」より）



図1-4 後志利別川の河道変遷図（「後志利別川水系河川整備計画」より）

後志利別川は、国土交通省が全国の一級河川を対象に行う水質ランキングで毎年のように全国一になっている水質の良い川として知られ、令和3年（2021）現在で通算20回の日本一は全国の最多回数で、名実ともに「清流日本一」を誇る川です。



○植物・動物

後志利別川

町の北東部一帯には天然ブナ林が良好に残っており、ブナ、ミズナラ、イタヤカエデ、シナノキ、ハルニレ等を構成種とする冷温帶広葉樹林が広がっています。おおむね、本州東北地方のブナ林の延長線上にあり、落葉性広葉樹のミズナラ、シナノキ、ウダイカンバ、ヤチダモ等や常緑性針葉樹のトドマツがモザイク的に混交する針広混交林帯とよばれる植生域に属しています（図1-5）。

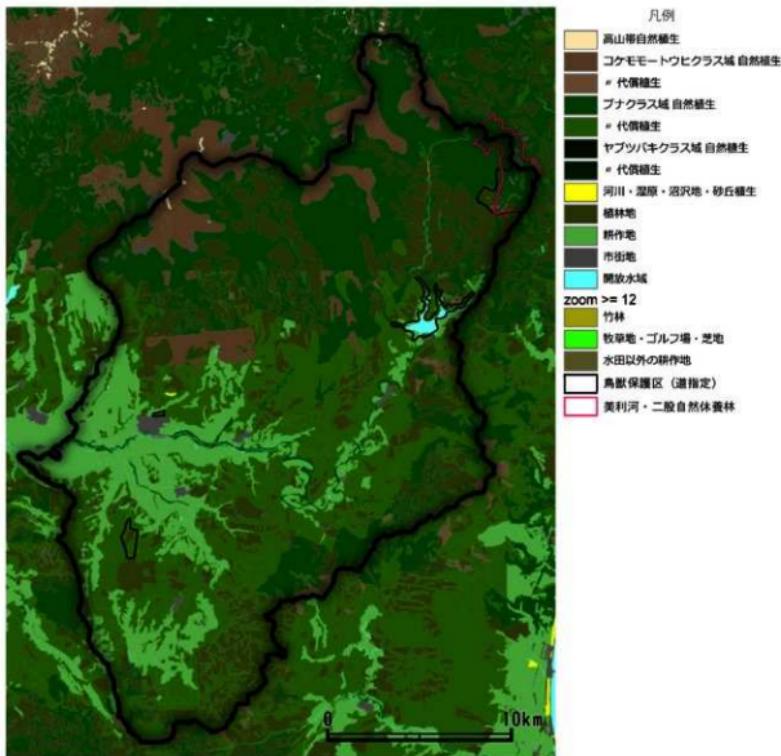


図1-5 今金町域の植生図（環境省自然環境保全基礎調査－第5回植生調査より）

後志利別川流域は北海道の中でも最も植物種の多い地域とされ、植物の地理的分布境界線の一つ「黒松内低地帯」の南側に位置し、ブナ林の北限地域として多様な生物のすみかとなっています。特に上流域の天然ブナ林「美利河・二股自然休養林」は、森林浴や鑑賞に適しているとされ、林野庁の「日本美しの森お薦め国有林」に選定されています（現在は土砂災害警戒区域に指定され、入林できません）。



美利河・二股自然休養林の天然ブナ林

鳥獣保護区は、野生の鳥類・哺乳類の生息地を守る必要があると認められた地区のことを指し、区内での狩猟行為が禁止されています。当町には北海道指定の鳥獣保護区が4カ所あり、「美利河・二股自然休養林」の天然ブナ林をはじめ、今金地区、八束地区の計1,043haを有しています。今市街地に位置する今金地区的指定区域は25haと小面積ながら、身近に天然ブナ林と触れられる憩いの場として、広く町民に親しまれています。

は乳類では、ヒグマ、キタキツネ、エゾユキウサギ、エゾリス、エゾクロテン、エゾタヌキ、ホンドイタチの生息が確認されており、おおむね北海道共通の特徴を示しています。

鳥類は近年の国土交通省による「河川水辺の国勢調査」で10目82種が確認され、種類数としてはスズメ目が全体の約半数を占め、水田の多い地域性が反映しています。国指定天然記念物のオジロワシ、クマゲラも確認されています。

魚類は16種が確認され、ウグイ類が全体の約半数を占め、次いでヤマメ、アユ、サケ、マスが見られます。後志利別川はサケ・マスの増殖河川として毎年稚魚が放流されており、道南日本海側で随一の資源量を誇っています。カワヤツメとアユは内水面共同漁業権が設定され、河川資源が良好に維持されています。特にアユは本州方面から多くのファンが訪れ、夏の友釣り大会は一大風物詩となっています。

両生類では、北海道固有種のエゾサンショウウオ（環境省レッドリスト DD）の生息が確認されています。



後志利別川でのアユ釣り大会

○地質

本町には2~3億年前の古い時代から数千年までの比較的新しい時代にまたがり、様々な地層が見られます（図1-6・図1-7）。古いものでは、ジュラ系の堆積岩類と白亜系花崗岩類を基盤としてその上に新第三紀層と第四紀層の堆積層が広く分布しています。また当地域は北海道におけるグリーンタフ地域の標準層序の模式地の一つとされ、標準層序として現在も使用されています。グリーンタフとは緑色凝灰岩の地層を指し、山陰地方から東北地方、北海道南西部にかけての日本海側に広く見られる地層で、当時日本海で活発な火山活動が起きていたことを示しています。



訓練層(グリーンタフ)標準露頭
(長万部町国縫地区)

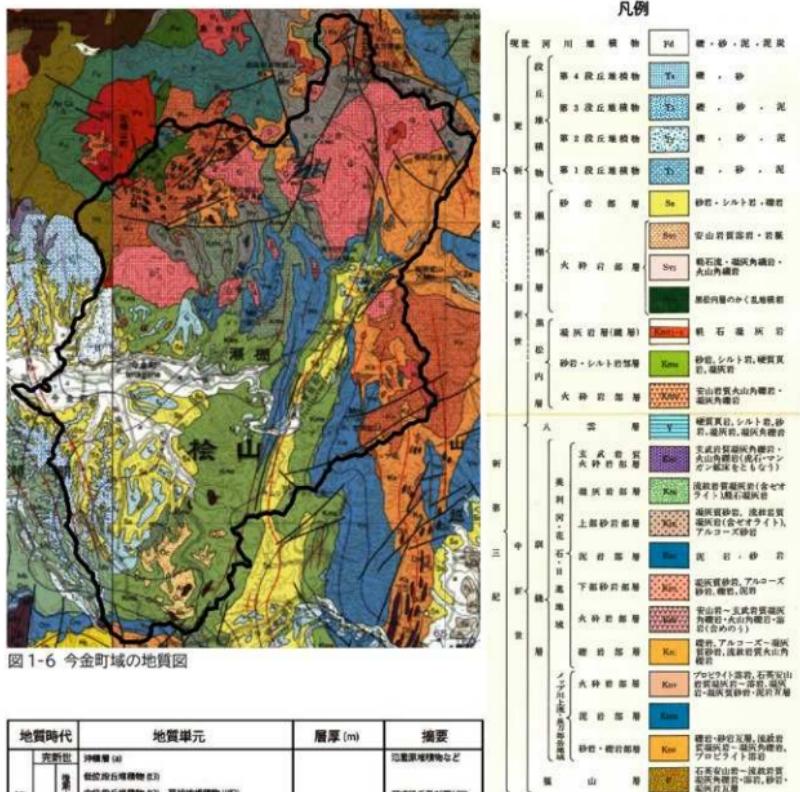


図 1-6 今金町域の地質図

地質時代	地質單元	層厚 (m)	摘要
第四紀 氷河期	沖積帶 (A)		氾濫原地帶など
	低地丘陵帶 (B1)		河成丘及び扇状地
	中高丘陵帶 (B2) 墓狀地帶複合 (B2)		
	高高丘陵帶 (B3) 墓狀地帶複合 (B1)		
	自然植被带 (S1)		寒帯針葉林
	苔類帶 (S2) 雨の沢苔類複合 (S2)	200 SI 50	寒帯苔原 寒帯蘚苔原 CN13b
	苔石帶 (S3)	29-200	
	寒河帶 (K0)	60-100	N. Kamtschatica 等 S. Sphaerophylax 等
	サハラルバツ地帶複合 (K0, K0a)	Kss 250	
	苔沼シルト苔原帶 (K0a)	Ksp, Ksa < 800+	S. acutiflorum 等
第三紀 山脈	メップ火成岩帶 (Knp, Kma)	800+	Lbarbutis 等
	火成岩帶 (Dc)	110 1300+	
	主部 (東北正断丘系) (Ym) 兵庫縣地帶 (Ym)	Kp 10-100 Ks800 Ky1000-	門の沢地帶
	夷隅河谷苔原帶 (Kc)		
	ICVカムツノ苔原帶複合 (Kt)		
	カシクフナノ火成岩複合 (Ky)		
	今花園苔原帶 (G)		
	本部 (野村苔原帶複合) (Mdt)		白堊火成地帶
	チャート (Ch)		河床帶の形成
	石灰岩 (L)		異地性伴生組成
白堊紀			
ジュラ紀			
三葉紀 ペルム紀 石炭紀			

図 1-7 今金町域の地質縦括図

グリーンタフ地域には豊富に金属鉱物資源が埋蔵されていることが多く、今金町では金、銀、銅、鉛、亜鉛、マンガン等の鉱床がみられます。

従って、当町は鉱物資源が豊富な地域で、今金町とその北隣・東隣にかける一帯は古くから金、銀、銅、鉛、亜鉛、マンガンの産地として、またメノウやゼオライト（沸石）の産地として知られています。

今金町と北隣の島牧村との境界付近の山地に花崗岩類が広く分布し、これらの岩体の中に金を含んだ石英分に富む岩脈が無数に入り込み、多くの支流がカニカン岳等の山肌を刻むことから、後志利別川上流域一帯では江戸時代前期に大規模な砂金採掘および金山開発が行われました。先述のように川が激しく屈曲する地形は砂礫が堆積しやすく、砂金採掘に最適な地形でもあり、流域沿いには砂金採掘跡が隨所に見られます。その規模は延長約10kmにもわたって広がっており、当時としては全国最大規模のゴールドラッシュの様相を呈しています。

その他、マンガン、メノウ、石灰石（大理石）、ゼオライト（沸石）、花崗岩・真砂土、砂岩等が採鉱・採石され、各種鉱山が営まれました（表1-2・図1-8）。特にメノウはその質の良さから、明治期から昭和前期まで町の特産品の一つとして盛んに採掘、加工販売されました。

町北東部には、「底なしの湯壺」と呼ばれる美利河温泉鍾乳洞があります。これは温水によってできた鍾乳洞（カルスト地形）で、国内初の発見とされています（危険なため入洞できません）。

本町は化石の多産地域としてもよく知られ、中新世後期にあたる八雲層からはマキヤマチタニイ（*Makiyama chitani*）や軟体動物（貝類）等が豊富に産出し、川沿いの露頭に大量の貝化石が露出しており、学校授業で化石発掘が継続して行われています。

また、第四紀更新世の海成砂層からは豊富な貝化石等が産出する「瀬棚動物群」が知られ、極海系大型海牛（*Hydrodamaris sp.*）ビリカカイギュウが発見されています。瀬棚動物群は今から120万年前ごろの北海道周辺の代表的な化石動物群集です。



後志利別川上流域で産出する砂金



美利河地区で産出するマンガン鉱石



花石地区で産出するメノウ



美利河温泉鍾乳洞



美利河地区で産出する貝化石

表1-2 今金町内の鉱山一覧

No.	名称	鉱種	所在地、稼働時期等
A	忠志別鉱山	金・銀	カニカン岳西麓。不明～昭和4年（1929）頃まで。
B	山宝鉱山	マンガン	メッツ岳東麓。昭和31年（1956）以後、まもなく廃山。
C	今金鉱山	鉛・亜鉛・マンガン	メッツ岳南西麓の目名川上流付近。昭和16年（1941）～昭和29年（1954）まで。
D	種川鉱山	金・銀	メッツ川支流金山川上流。昭和7年（1932）～昭和27年（1952）まで。
E	中種川鉱山	銅	メッツ川上流。若干の坑道探査が行われた。詳細不明。
F	加藤鉱山	銅	メッツ川中流。本格的な稼働実績なし。
G	メッツ鉱山	マンガン	下ハカイメッツ川西岸からメッツ川。明治30年代後半（1902）～昭和20年代（1945）まで。途中休業期あり。
H	美利河鉱山（元山）	マンガン	ニセイベツ川下流。明治25年（1892）～昭和42年（1967）まで。町内のマンガン鉱山では最古・最大規模。
I	美利河鉱山（新山）	マンガン	チュウシベツ川下流東岸側。明治25年（1892）年～昭和30年代（1955）まで。
J	稲穂鉱山	マンガン	美利河畔付近。明治30年代（1890）～昭和27年（1952）頃まで。終戦後に一時休業期あり。
K	太黒鉱山	マンガン	クアプラザビリカ西側。明治30年代（1890）～昭和30年代（1955）まで。
L	宝岡鉱山	マンガン	ホンシブンナイ川上流。詳細不明。

メノウ、大理石、ゼオライト（沸石）、花崗岩・真砂土、砂岩については、採石場として稼働した、ないし稼働中のもので、鉱山としての名称はありません。



図1-8 今金町内の鉱山・採石場位置図(地理院地図を改変)

○今金町の地区名とアイヌ語地名

今金町の地区名^{あざき}(字名)は、図1-9のように21あり、昭和8年(1933)に制定され、現在に至っています。これらの地区名は、開拓者の名前やその出身地に由来するもの、その地域のアイヌ語地名を当て字としたものなど、様々です。なお、図1-9で地名のないところは、国有林等となっており、それぞれ所管官庁が管理しています。

北海道の地名はアイヌ語に由来するものが多く、当町にも多くのアイヌ語地名があります（図1-10・表1-3）。

アイヌ語地名は、その土地の地形的特徴を表したものや、アイヌ民族の暮らしに関する特徴があり、例えば、後志利別川については、諸説ありますが、利別は「蛇川」もしくは「纏川」と訳され、激しく屈曲する河川の様子を良く表しています。後志は明治30年(1897)までこの地域一帯が後志國に含まれていたことに由来し、十勝地域の利別川と区別するため、この冠が付されています。

このようにアイヌ語地名が多く確認できるのは、幕末に北海道（当時は蝦夷地）へ何度も訪れ、内陸部までくまなく調査した松浦武四郎の功績が大きく影響しています。

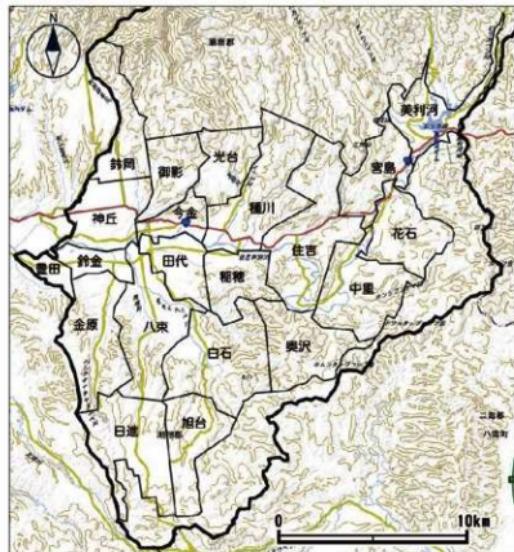


図 1-9 今金町内の地区区分図

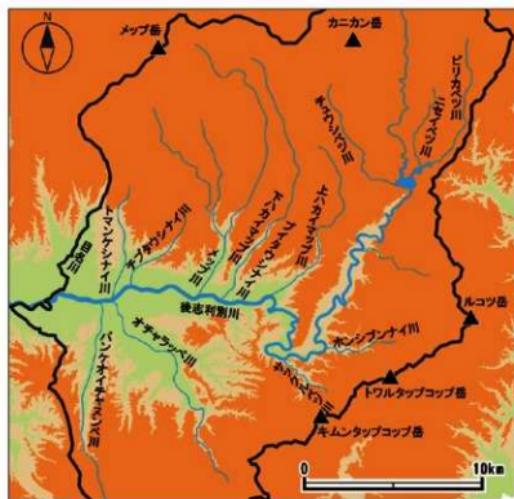


図 1-10 今金町内のアイヌ語地名(地理院地図の表記に基づく)

表1-3 今金町およびその周辺の主なアイヌ語地名

地理院地図の表記	語義 ※諸説ある場合は、代表的なものを記す
後志利別川	後志はシリ・ペツで、山の川。利別はトシュ・ペツで、蛇あるいは繩の川
ビリカベツ川	ビリカ・ペツで、美しい川
ニセイベツ川	ニセイ・ペツで、峡谷の川
チュウシベツ川	チュウ・ウシ・ペツで、急流のある川
ホンシブンナイ川	ホン・シブン・ナイで、多くウグイのいる沢
サックルベツ川	サク・ル・ペツで、夏の道の川。夏に山越えする川
ハカイマップ川	ハカエ・オ・マブで、鮭を二つ割りにしたものを蓄える納屋
ブイタウシナイ川	ブイ・タ・ウシ・ナイで、エゾノリュウキンカの根をいつも掘る沢
メッブ川	メッブ・ナイで、寒い沢あるいは湧水のある池（沢）
チブタウシナイ川	チブ・タ・ウシ・ナイで、舟をいつも彫る（作る）沢
トマンケシナイ川	トマム・ケシ・ナイで、泥炭地の末端の沢
オチャラッペ川	ベンケ・オ・イチャン・ウン・ベの転訛で、川上の鮭の産卵場がある（川）
パンケオイチャスンベ川	パンケ・オ・イチャン・ウン・ベで、川下の鮭の産卵場がある（川）
目名川	目名はメムで、清水が湧き出る池または沼
カニカン岳	カネ・カル・ヌブリで、金を取る山
ルコツ岳	ル・コッちで、沢の道
トワルタップコップ岳	トワル・タップコップで、なまぬるいこぶ山
キムンタップコップ岳	キムン・タップコップで、山奥にあるこぶ山
遊楽部岳	ユ・ラップで、温泉が下る（山）
太櫻岳	ビッ・オロで、小石のある（山）
狩場山	カリンバ・ウシ・スブリで、接が群生する山
長万部	オ・サマンベで、カレイのたくさんとれる河口
国縫川	クンネ・ナイで、黒い沢
島牧	スマ・オマ・イで、石のある所
瀬棚	セタ・ルベシベ・ナイを略してセタ・ナイ。犬の路の川

北海道環境生活局アイヌ政策課ホームページ「アイヌ語地名リスト」をもとに作成

松浦は安政4年（1857）にこの後志利別川流域にも訪れました。この地に住んでいたアイヌ民族と寝食を共にし、5日間かけて膨大な数のアイヌ語地名や人々の暮らしぶりなど、目にしたありとあらゆるものを見記録しました。本流域では少なくとも200カ所の地名のほか、川底に転がるメノウやマンガン鉱といった岩石・鉱物、地上に残る砂金採掘跡にも注意を払っています。地層から顔を出す大量の貝化石や、透明度の高い川の水質についても驚きをもって記録しています。また、本流域には産卵場や魚の名等、魚に関する地名が他の道内の河川と比べて非常に多い傾向があり、当時から水産資源が豊かな川だったことがわかります。幕末に書かれた松浦の史料からも、本地域の地勢をうかがい知ることができます。

○気候

今金町の気候は日本海を北上する対馬暖流の影響で、過去10年の年間平均気温は9.7°Cと北海道内でも温暖な地域です。冬は季節風の影響で雪が多く、内陸部のため1月の平均気温は-3.9°Cと低いものの、夏は風が弱く、8月の平均気温は21.7°Cと高い傾向があります（図

1-11)。ときおり、内浦湾から冷たい東風(ヤマセ)が吹くと、夏でも気温が急に下がり、低温と日照不足から農作物に被害を及ぼすことがあります。当地域は、昼夜の寒暖差が比較的大きい内陸性気候が特徴です。年間降雪量は毎年200cmを超え、特別豪雪地帯に指定されています。特に山沿いで降雪量が多く、美利河地区には道南地域を代表するスキー場「ビリカスキー場」があります。

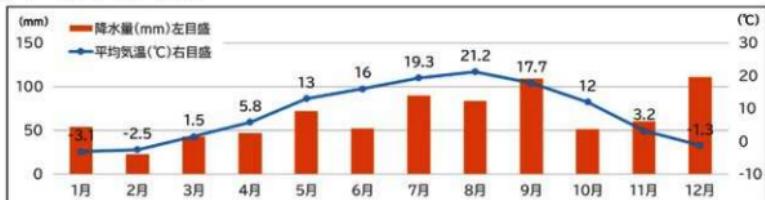


図 1-11 今金町の月別平均気温・降水量の推移(令和元年度)

第2節 社会的状況

○交通・流通

今金町は経済的につながりの強い道南圏の中核都市・函館市まで118km、道央複合都市圏の札幌市へは184kmの距離があり、両都市間のほぼ中間的な位置にあります。かつては国鉄瀬棚線が人の往来や鉱物資源、農産物、木材の流通に大きな役割を果たしていましたが、昭和62年に廃線となって以降、国道230号を基軸とした交通網体系となっています。

日本海側と太平洋側を最短距離で結ぶ渡島半島横断道路は交流促進型の広域道路として、将来的には北海道縦貫自動車道と直結し、生活圏、経済圏を拡大する上からも重要な役割を担っています。今後、今金町・せたな町間の整備について現道の整備を含め、時代に即応した高速交通体系の整備促進が望まれています。

○人口

今金町の人口は令和3年(2021)10月時点では4,971人を数え、ピーク時の昭和35年(1960)の12,439人との比較では40%まで減少しています(表1-4)。年々、高齢化は進行し、65歳以上の高齢者の比率は、平成12年度(2000)で25.5%、平成27年度(2015)で37.3%、令和2年度(2020)に41.2%と上昇しており、今後もこの傾向は続くものと予想されています。

表1-4 今金町の人口の推移(国勢調査に基づく) 単位:人

区分	昭和35年 1960年	昭和55年 1980年	平成12年 2000年	平成27年 2015年	令和2年 2020年
年齢層	総数	12,439	9,241	6,906	5,628
	0歳～14歳	4,292	2,110	920	566
	15歳～64歳	7,510	6,103	4,225	2,965
	65歳以上	637	1,028	1,761	2,097
	高齢化率(%)	5.1	11.1	25.5	41.2

人口減少の主な理由としては、農家の離農、他都市への進学率の向上、若年労働者の流出、就労環境が整っていないこと等が大きな要因と考えられています。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、令和 42 年（2060）には 2,013 人まで減少すると推計されています。第 2 次今金町まち・ひと・しごと総合戦略では、今後人口減少対策に取り組み、人口規模 3,600 人の維持を目指すこととしています（図 1-12）。

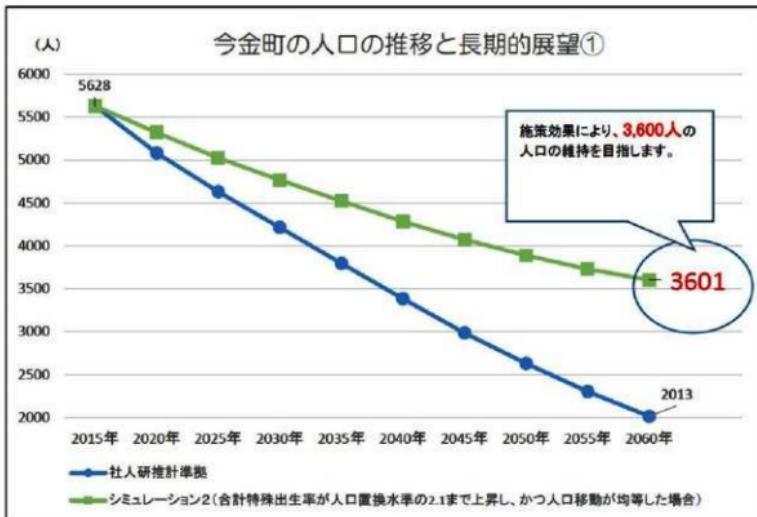


図 1-12 今金町の人口の推移と長期的展望（第 2 次今金町まち・ひと・しごと創生総合戦略）

○産業

昭和 35 年（1960）の国勢調査時では、第一次産業就業者が 61.8%（うち農業 91.6%）と典型的な農村地帯でしたが、その後、離農者の増加や社会情勢の変化により、平成 28 年度（2016）の調査時では第三次産業従事者が最も多くなっています（図 1-13）。

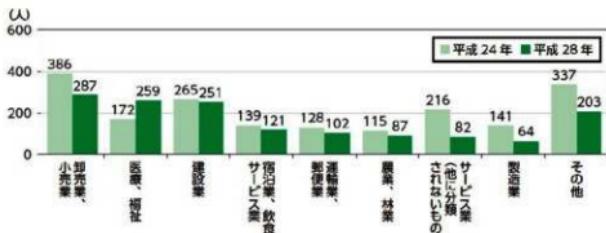


図 1-13 今金町の産業大分類別従業者数（総務省・経済産業省「経済センサス-活動調査」を再編加工）

今金町は道南一の穀倉地帯であり、約 250 戸の農家が約 5,500ha の農地で生産を行い、近年は生産額 50 億円以上の農畜産物を全国の市場に供給しています。適地・適作として稲作、畑作、酪農・畜産の 3 本柱を主軸とし、特に水田経営規模の大きさを活かした良質、良食味米の生産と、全国ブランド「今金男しゃく」の産地としての馬鈴薯の生産が古くから盛んに取り組まれています。

米と馬鈴薯の二品目が農業生産の中核を担っていますが、特産品としては「今金男しゃく」が著名で、その品質の高さから青果市場関係者から品質、食味ともにトップクラスの評価を受け、他産地の男爵品種に比べて 2 割以上高値で取引されています。

農業産出額は各品目で増えており、近年では肉用牛の伸びが高くなっています（図 1-14）。



図 1-14 今金町の農業産出額の推移(農林水産省「市町村別農業産出額(推計)」より)

令和元年(2019)、「今金男しゃく」が農林水産省の実施する地理的表示保護制度(GI 認証)の登録を受け、町全体が祝賀ムードに包まれたのは記憶に新しいところです。

高品位な農産物を生産する今金町ですが、将来を担う若年労働者が流出し、人口減少に加え、高齢化の急激な進行は、地域社会の活力低下につながる極めて重大な問題です。地域に残る文化財の保護や管理・活用についても、今後適切な諸施策を講じることが迫られています。



今金男しゃくの GI 登録記念(令和元年)

○イベント・祭り

当町で開催されている主なイベント・祭りは表 1-5 の通りです。多くの場合、各関係団体の連携・協力体制のもと、地域の若い人材が中心的な役割を担い、自ら手作りで運営しているところが特徴と言えます。当町最大のイベントは 9 月 19・20 日に開催される今金八幡宮例大祭(いまかね秋祭り)で、7~8 千人の観客が集まります。

なお、北海道観光入込客数調査によると、令和元年度(2019)の今金町の入込客数は計 11 万 6 千人で、各種イベント参加を目的とするものほか、豊かな自然でのキャンプや釣りなども人気があります。

表1-5 今金町の主なイベント・祭り

イベント名	時期	主な内容
春らんまん花いいっぱい	5月	苗の販売や各種イベントで、花のある美しいまちづくりを目指すイベント
今金町畜産共進会	7月	今金家畜診療所裏を会場とする肉牛・乳用牛の品評会
ビリカまつり	7月	クアブラザビリカ、美利河ダム湖周辺を会場とする湖水と緑に親しむイベント
ビリカ遺跡まつり	7月	史跡ビリカ遺跡を会場とする歴史文化体験イベント
ビリカふれあいマラソン大会	7月	美利河ダム堤体およびダム湖周辺を会場とするマラソン大会
全日本アユ釣り選手権大会	7月	後志利別川を会場とするアユ友釣りの北海道地区予選
24HR キャンプライブ	7月	神丘地区の愛指令ランドを会場とするライブイベント
JA 夏まつり	8月	農協駐車場周辺を会場に地場産品をPRする飲食イベント
今金いいとこ祭り	8月	旧今金駅跡周辺を会場に地域の魅力をPRする飲食イベント
今金八幡宮例大祭	9月	町内最大のお祭りで、ケンカ太鼓は観光名物。この時期各地域神社でも例大祭が開催される
今金男しゃくマラニック	10月	河川流域を会場に、各所で特産品を提供し、地域の魅力を満喫するスポーツイベント
今金町総合文化祭	11月	道南最大規模を誇る文化団体の作品展示会、芸能まつり
ビリカふれあい歩くスキーカンペーン	2月	史跡ビリカ遺跡の丘陵地周辺を会場とするクロスカントリースキー大会。道南地域で唯一の大会
ビリカスノーフェスティバル	2月	ビリカスキー場を会場とする雪に親しむ体验イベント



今金いいとこ祭り



今金町畜産共進会



ビリカ遺跡まつり



ビリカふれあいマラソン大会



今金八幡宮例大祭太鼓合戦



ビリカふれあい歩くスキー大会

○文化財施設および関連施設

当町の文化財施設としては下表の通り、史跡ビリカ遺跡ガイダンス施設「ビリカ旧石器文化館」とそれに隣接した文化財収蔵庫「文化財保管・活用庫」の2施設があり、関連施設としては4施設があります。

図1-15の通り、東部の美利河地区に文化財施設が設置されたのは、平成3年（1991）策定の第3次今金町総合計画の中で町立博物館建設計画が進められていたことが背景にあります。これは、史跡ビリカ遺跡やビリカカイギュウ化石を生涯学習・社会教育で活用するとともに、

文化財施設

ビリカ旧石器文化館 びりかきゅうせっきてんかかん

設置目的	国指定史跡ビリカ遺跡の保存と保護意識高揚のため体験学習の場を設定し、文化財に対する正しい理解と知識を広め貴重な文化遺産として後世に伝える。（博物館類似施設）		
根拠法令	ビリカ旧石器文化館・石器製作跡の設置及び管理に関する条例		
設立年	平成15年（2003）専用施設として新設		
延べ床面積	365 m ²	構造	鉄筋コンクリート造
所蔵資料	国指定重要文化財 163点	町指定文化財	コンテナ約130箱
	未指定文化財 25点	その他	
職員数	1名（会計年度任用職員）	防犯設備	機械警備あり
支援団体	ビリカ遺跡ボランティアの会		



文化財保管・活用庫 ぶんかさいほかん・かつようこ

設置目的	町内の文化財を一括管理するための収蔵施設。美利河マンガン鉱山から移設された関連資料等の収蔵展示。		
根拠法令	なし		
設立年	平成18年（2005）専用施設として新設		
延べ床面積	383.2 m ²	構造	木造2階建て
所蔵資料	町指定文化財 76点	未指定文化財	約400点、コンテナ130箱
職員数	0名（ビリカ旧石器文化館職員兼務）	防犯設備	なし
支援団体	ビリカ遺跡ボランティアの会・今金町歴史をたどる会		



関連施設

施設名称	所蔵資料
文書管理センター	役場公文書、町史編纂資料、発掘調査報告書等。
今金町民センター図書室	今金町出身者の著書、官公庁発行物、地域資料。
今金町立今金中学校	空き教室に赤川黙版画作品 238 点。廊下に版画、石版、用具 20 点程度を展示。
今金町立種川小学校	郷土資料室に種川地区採集の考古資料、地域資料を収蔵展示。

美利河ダム周辺のスキー場や温泉等の観光施設（美利河ダム周辺環境整備計画）と連携し、観光への寄与を構想するものでした。その後、平成 8 年（1996）に博物館建設設計画が大きく見直され、史跡ビリカ遺跡整備事業のみが平成 12 年度（2000）より進められ、現在に至っています。

文化財保管・活用庫は、多量にある埋蔵文化財出土品やマンガン鉱山跡から移設された大型機械類、町民から寄贈された多くの民俗文化財の保管場所として、それまで町内各地の廃校校舎等に分散して保管していたものを一括管理・収蔵するため設置したものです。また、当初博物館建設を想定して制作された実物大のビリカカイギュウ骨格復元模型や各種化石標本、岩石標本、剥製資料等を収蔵しています。当施設をビリカ旧石器文化館に隣接して設置したのは、施設機能の相乗効果や施設利用者の利便性向上等、多目的な活用を想定したことによる理由があり、施設名称にもそれが表れています。

関連施設としては、町史編纂関連資料や役場公文書等の文書を一括管理する文書管理センター、平成 14 年度（2002）に今金町出身の版画刷り師・赤川 黙氏より町に寄贈された多数の石版画およびその関連資料を収蔵・展示する今金中学校等があります。



図 1-15 今金町内の文化財施設・関連施設の位置図

第3節 歴史的背景

○先史時代（旧石器時代から縄文時代まで）

今金町は旧石器時代的一大石器製作拠点・ビリカ遺跡のある町として知られています。ビリカ遺跡は後志利別川上流域の美利河地区にあり、細石刃や槍先形尖頭器等、大型動物の狩りに用いられた狩猟具等が多数出土する遺跡で、およそ2万数千年前から1万5千年前まで、氷河期最寒冷期から縄文時代初頭までの長い期間にわたって旧石器人の生活跡が発見されています。



ビリカ遺跡の発掘調査(平成12年)

中流域の神丘2遺跡では、特徴的なナイフ形石器の石器群が出土しています。これらはビリカ遺跡よりも年代的に古く、北海道の旧石器時代遺跡の中でも比較的古い段階に位置付けられています。



ビリカ遺跡出土の細石刃・細石刃核
(写真撮影:小川忠博)

本町の旧石器時代の遺跡は、河川上流域から中流域に多く分布し、本流域は旧石器時代の長い期間にわたって人々の暮らしの舞台だったことがわかります(図1-16)。



神丘2遺跡出土のナイフ形石器

氷河期が終わり温暖な後氷期になると、中・下流域を中心に縄文時代の遺跡が濃密に分布するようになります。これまでに確認された縄文時代の遺跡は計40カ所あり、縄文時代中期から後期を中心として、早期から晩期まではぼ途切れることなく発見されています。ただし、これらの遺跡は畑等での採集品で確認された場合がほとんどで、発掘調査が行われたのは神丘2遺跡の1カ所に過ぎず、詳しい内容はわかつていません。



図1-16 今金町の旧石器時代・縄文時代遺跡の分布

統繩文時代から擦文時代までの間、当町域では人々の生活痕跡は確認されていません。生活領域がより下流域や海岸付近（せたな町側）へ移ったものと思われます。

○江戸時代

アイヌ文化期の遺跡も現時点で確実なものはありませんが、先述のように当町内にアイヌ語地名が数多く残されていることから、古くからアイヌの人々が暮らした地であったことは明らかです。

当町に関する文書記録が最初に現れるのは、寛文9年（1669）に起きたアイヌ民族と和人との戦争「シャクシャインの戦い」に関するものです。この戦争は日高地方のアイヌ民族の指導者シャクシャインが同志を糾合し、^{まつまさほん}松前藩に對決を挑んだものでした。

松前藩はシャクシャインの南下をクンヌイ（現在の長万部町国縫）で阻止するため、現在の國縫川に布陣します。この時、松前藩側の正規軍の中に「金掘」と表現された技術者が161名含まれていたという記録があります。当時、後志利別川上流域の砂金採掘地は「クンヌイ砂金山」と呼ばれ、まだかなりの生産量があったようで、現在も流域沿いの地表面には延長10kmにもわたって砂金採掘跡を観察することができます。

砂金を取るには水が必要で、より上流から導水路を設けて水を供給した構造も確認されています。こうした様子から、砂金採掘の現場では相当の人員が組織的にしかも統制のとれた集団によって行われていたようです。先述の技術者「金掘」一人が多くの作業員を使役していたとすると、数百から数千人規模の人が砂金採掘に従事していたと推定されます。また、さらに上流のカニカン岳中腹には金を含んだ鉱石をすりつぶす鉱山臼が散乱していることが確認されており、河川での砂金採掘とおよそ同時期に金山経営も行われていました。

シャクシャインの蜂起を鎮圧した松前藩は、その後領内での砂金採掘を固く禁じたため、この地のゴールドラッシュは突然終息しました*。



シャクシャイン像(新ひだか町)



砂金採掘跡(美利河地区)



カニカン岳金山跡中腹に残る鉱山臼

*注 シャクシャインの戦いが発生した背景には、アイヌ民族の間に松前藩に対する不満や怒りがありました。松前藩が交易の交換比率を一方的に下げたことや、松前藩にとって大きな収入源だった鷹狩りや砂金採掘も、アイヌ民族にとっては暮らしを苦しめるものでした。砂金採掘によって川の水が汚れ、彼らの主な生業の一つである鮭漁の妨げにもなっていました。戦いの前半はアイヌ勢が優勢に進みましたが、松前藩が反撃し、激戦地となった国縫で形勢が逆転、シャクシャインは日高地方へ退き、その後討ち取られました。この戦いの結果、交易の交換比率が多少改善し、砂金採掘は禁じられるなど、アイヌ民族にとって有利な面もありましたが、松前藩に従うという誓約を立てさせられ、松前藩の優位が確立しました。

再びこの地で砂金採掘が試みられたのはその約 200 年後の幕末期、箱館奉行によるものです。箱館奉行は安政 7 年（1860）から 3 年間、佐渡（現在の新潟県佐渡市）の西三川砂金山の技術者 5 名を招聘し、彼らの技術指導を受け試験的な砂金採掘を行いました。この招聘に関する文書史料や絵図（「金子家文書」）が佐渡の旧家で昭和 50 年代に発見され、その詳しいいきさつを知ることができます。この絵図には現在の美利河地区の河川合流部が描かれており、砂金採掘場をはじめ役所や米蔵、捌き所等の各種施設、役人の名簿等が記されています。これらは当時の様子を伝える第一級史料です。



佐渡で発見された絵図
(新潟県佐渡市笠川区有文書)

○明治時代

A. 上流域の鉱山開発

明治 19 年（1886）、東京の実業家・雨宮敬次郎が山形県の砂金採掘の熟練者を中心とする「雨宮砂金採取団」を派遣したことから、再びこの地で砂金熱が高まりました。すでに江戸時代に採掘された場所でしたが、彼らの技術は極めて巧みで、明治 20 年代に産金量のピークを迎きました。

砂金採掘と並行し、花石地区や美利河地区ではメノウやマンガン鉱の採掘事業に着手する者が現れました。明治 13 年（1880）、瀬棚村の大島勘左衛門らはその事業化を試みたものの、販路の確保に難航し同 19 年に廃止。明治 27 年（1894）には国縫村の福田重平がマンガン採掘事業に着手し、国縫までの簡易的な馬車軌道を開削して経営が本格化しました。

マンガン鉱は、日露戦争で軍事兵器の需要が高まることを受け、鉄の硬化材としてのマンガン鉱の需要が急激に高まり、全国各地にマンガン鉱山が乱立しました。その中でもこの美利河産マンガンは良質で採掘しやすいことで注目され、明治 40 年（1907）には美利河地区だけで 4 カ所の鉱山ができ、年産約 1 万トンを記録するなど最盛期を迎えました。全国各地から仕事を求めて多くの人が入り、人口約 1,000 人を数え、茶屋や郵便局、製材所ができるなど、大いに賑わいました。

このように上流域では、中・下流域での本格的な開拓に先行し、太平洋岸経由の人や物資の往来が盛んとなり、独特の鉱山文化が盛りました。しかし、終戦後の需要低迷と単価の安い海外産に押され、いずれの鉱山も昭和 40 年代初め（1965）までに閉山しました。



美利河マンガン鉱山選鉱場(明治 39 年頃)



美利河マンガン鉱山での露天掘り

イ. 中・下流域での本格的な開拓

当町における本格的な開拓は明治 24 年（1891）、下流域（現在の神丘地区）に入ったキリスト教徒による団体入植が最初です。同志社大学出身の志方之善は、その同志・丸山要次郎とともにキリスト教の理想郷建設の夢を抱き、当時開拓移民を募集していた政治家・犬養毅に請願して土地の貸下げを受け入植しました^{*}。その後これに賛同する入植者と協力し開拓を進めました。志方は日本初の女医・荻野吟子の夫としても知られています。彼らはこの地を聖書に由来する「インマヌエル（神われらとともにいます）」と名付け、キリスト教徒による集落をつくりました。



丸山要次郎



志方之善



田沼恒三郎



丸山要次郎

なお、道内のキリスト教徒による開拓移住団体としては他に、浦河・赤心社、浦臼・聖園牧場、北見・北光社、遠軽・北海道同志教育会が知られていますが、このインマヌエル団体は、①会社組織ではないゆるやかな共同体であったこと、②キリスト教徒のみによる理想郷建設を目指したこと、③異なる二つの教派が協働して集落をつくり、開拓に当たったことの三点で異彩を放っています。

しかし、まったく未開の原野を切り開く作業は困難を極め、犬養との開墾契約で定められた成功期限を守ることができず、明治 28 年（1895）に道庁から未開地の返還を命ぜられました。明治 30 年（1897）にはその地が一般移住者に開放されたことから、純粋なキリスト教村という理想は実現しませんでしたが、キリスト教徒による理想郷建設という共通目標を精神的エネルギーとした民主的で倫理的な共同体が生まれ、明治 30 年代以降になると、開拓は軌道に乗りはじめました。

神丘の開拓に遅れること 2 年、中流域の各地には次々と開拓移民が入植しました。その代表が現在の今金市街地の基礎を築いた今村藤次郎と金森石郎です。早稲田大学出身の今村は同志の金森とともに犬養から土地の貸下げを受け、チブタウシナイ（現在の今金地区）に入植し、多くの困難を乗り越え、現在の今金町市街地の原型を作りました。二人はこの地を自分たちの苗字の頭文字からなる「今金」と名付けました。



今村藤次郎(左)と金森石郎(右)

*注 明治 19 年（1886）に発足した北海道庁は、それまでの開拓使時代の反省に立ち、農業に適する土地を実地調査した上で移民を入れるようにしました。後志利別川流域一帯は明治 22 年、道庁技師・内田源（きよし）を主任とする踏査班が調査し、その報告書「利別原野の復命書」で、内田は農地としてこの地域の将来性を高く評価しました。明治 24 年（1891）3 月、立憲改進党の犬養毅他 8 名は北海道庁に対し「後志国漸棚郡利別原野」の貸付を出願しました。彼らがこの地を得ようとした背景には、当時北海道を日本の食糧基地にしようという大農論が議論されていたことや、政党政治の勃興期にあたり、党資金の確保が企てられていましたなどが指摘されています。犬養の移民募集にいち早く反応したのが、志方之善や今村藤次郎でした。

表 1-6 は開拓期の主な農場と入植者の出身地を表したものです。いずれの地区も巨木がうっそうと茂る原生林の中、慣れない開墾作業に疲労困憊し、また慢性的な食糧不足と厳しい冬の寒さに絶望し、やむなく帰還する者が後を絶ちませんでした。

表 1-6 開拓期の主な農場とその入植者の主な出身地(創立年順)

農場名	地区名	創立年	管理人	入植者の主な出身地
丸山農場	神丘	M24(1891)	丸山要次郎	兵庫、埼玉、富山等
今金農場	今金	M26(1893)	今村藤次郎	愛媛、岐阜、福井等
加藤農場	種川	M26(1893)	加藤助治・角田真平等	埼玉、岩手等
東條農場	花石	M28(1895)	東條九郎太	山形、新潟、宮城等
金原農場	金原	M29(1896)	鈴木幾太郎	愛知、三重、静岡等
利別(鈴木)農場	八束	M29(1896)	樺村清徳	福井、宮城等
白石農場	白石	M30(1897)	今村藤次郎・野本矩正	福井、岐阜等
青木農場	八束	M31(1898)	丸山正高	宮城、福井等
美濃団体	中里	M32(1899)	吉田庄五郎等	岐阜、新潟等
宮崎農場	田代	M32(1899)	宮崎常蔵	石川、宮城、福井等
西高津農場	豊田	M34(1901)	西田元吉・津田惣三郎等	徳島、岐阜、福井等

ウ.“道南一の暴れ川” 後志利別川の大洪水

入植者を最も苦しめたのが後志利別川の大洪水です。表 1-7 の通り、毎年のように襲い来る大洪水は、入植者の心胆を碎く無慈悲極まりない災害で、今金町の開拓史は後志利別川との闘いの歴史と言い換えることができます。

明治 32 年洪水

「毎年のように水に襲われ、1年に 6、7 度ということもあった。ある時などは物置小屋の天井に 2、3 日も避難していたことがあった。水が引いて一安心と思うと、作物が台無いで、菜種が大木の中段にかかっているという有様だった。」

御影地区の長谷川吉太郎氏談

「後志利別川治水史」より



昭和 4 年洪水で壊れた利別橋
(現在の美利河ダム付近)

表 1-7 今金町域における主な洪水被害記録

年月	被害の概要
M26(1893).9	利別原野を貫流、浸水家屋多数
M31(1898).6	利別原野ほぼ浸水、家屋流失、全住民避難
M32(1899).7	利別原野ほぼ浸水、8 月にも発生
M33(1900).9	2 回にわたる大洪水で原野平地が冠水
M42(1909).7	流域一帯の全住民避難
M43(1910).1	住民大いなる困難に遭遇
M44(1911).8	枕木 6 万本流失、人家浸水、農産物被害甚大
T5(1916).5	各河川一斉洪水、冠水面積 2,200ha
S4(1929).8	死者 12 名、家屋流失 70 戸、橋梁流失 42 橋
S7(1932).8	道路決壊 3 カ所、橋梁流失 9 橋
S28(1953).7	道路決壊 3 カ所、橋梁流失 9 橋
S29(1954).2	家屋流失 66 戸、橋梁流失 7 橋
S33(1958).10	河川決壊 5 カ所、橋梁流失 6 橋
S36(1962).7	死傷者 6 名、橋梁流失 1 橋
S36(1963).10	国鉄美利河・花石間不通、橋梁流失 2 橋
S37(1964).7	国鉄花石・北住吉間不通、橋梁流失 13 橋
S42(1967).2	流失家屋 1 戸、橋梁流失 4 橋
S43(1968).8	河川決壊 31 カ所、橋梁流失 1 橋
S49(1974).8	河川決壊 4 カ所、橋梁流失 2 橋
S52(1977).8	河川決壊 13 カ所、橋梁流失 2 橋
S56(1981).9	被害家屋 77 戸
S60(1985).9	床上床下浸水 59 棟
H10(1998).5	内水被害家屋 23 戸、氾濫面積 282ha
H11(1999).7	被害家屋 28 戸、氾濫面積 115ha

大洪水被害－河岸の沃野一面の浸水－

「渡島半島の宝庫と称せらるる利別川の流域は、沃野十数里に亘り雜穀と澱粉のみにても年々六〇万円を産出しつつあるが、去る二日の出水にて空前の被害を呈せり今其の情況を報ぜんに、同日払暁より吹き荒みたる東風は多大の雨量をもたらし、夜の一時まで降り続けたれば、俄かに出土氾濫しみるる数千町歩の青園は海と化し…」(以下略)

北海タイムズ紙（大正5年7月13日）より

このように開拓の道のりは極めて厳しいものでしたが、成果は着実に表れ、年々入植者は増加しました。明治30年（1897）、西隣の瀬棚村（現在のせたな町瀬棚区・北檜山区）から分村し、今金町の前身となる利別村が開村しました。開村当時は218世帯、人口700人余りでしたが、これ以降急激に増加し、明治40年には1,533世帯、人口8,778人と、10年間で10倍以上となり、村のほぼ全域で開拓が急速に進みました。明治36年（1903）の主要農産物生産高は表1-8の通りです。当時は水田ができる環境にありませんでしたが、すでに米作りを試みる者が現れはじめました。

表1-8 利別村の主要農産物生産高
(明治36年)

作物名	生産高 (石)	移出先
馬鈴薯	3,825	自家
菜種	3,548	越後
大麦	873	自家
ヒエ	255	自家
トウモロコシ	132	自家
大豆	97	函館
キビ	78	自家
アワ	58	自家
小麦	48	瀬棚

○大正時代

今金町を現在のような道南一の穀倉地帯に変えた最も大きな転機は、大正11年（1922）に敷設された農業用水路の完成です。

この広い瀬棚平野で「水田を作りたい」、「米が食べたい」という村民の機運が高まり、今金地区の浅田武三郎と稲穂地区的藤倉久三郎が中心となり、南利別土工組合（現在の狩場利別土地改良区）が発足し、大正10年（1921）から2年かけ農業用水路の建設工事が行われました。

後志利別川中流域の住吉頭首工から取水し、水路を河川南岸沿いに造成し、隣町の東瀬棚村（現在のせたな町北檜山区）まで総延長25kmの用水路です。これにより付近一帯の約1,000haに水が供給されたことから、現在の米作りの発展に大きく貢献しました。初代の住吉頭首工は老朽化により付け替えられましたが、現在も当時の用水路の大半が現役で利用されています。

なお、本用水路は北海道で最初に造られた農業用水路とされ、北海道産業史においても貴重な存在とされています。



農業用水路放水門（昭和初期）



初代住吉頭首工取水門の現況（大正11年建造）

また、このような寒冷地でも育つ稻の品種改良も同時に進められました。田代地区の佐藤万太郎は8年にわたる研究の末、大正10年（1921）に新品種「万太郎米」の開発に成功し、この地域の水田稻作の基礎を築きました。

○昭和時代

ア. 国鉄瀬棚線の開通

開拓の苦労が実り、各地の農家では年々作物の収穫量が増えました。しかしこれらの農産物は鉄道が開設されるまでは、整備不十分な悪路を馬で運搬するほかありませんでした。

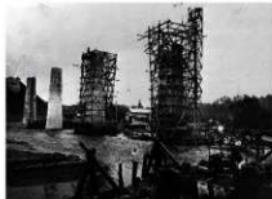
美利河地区や種川地区ではマンガン鉱を馬で国縫まで運んで移出し、また種川地区では木材を切り出し、瀬棚港まで川に流して送っていました。

こうした運輸・流通面の課題を解消すべく、鉄道敷設の請願運動は早くからあり、明治42年（1909）に期成会による道庁へ請願文が、翌年には国会へ請願文が提出されました。しかし、国ではすでに八雲から大間、日進、金原、神丘、瀬棚という南北の路線案が決められていました。村にとって瀬棚線の開通は、後志利別川流域の豊かな木材やマンガン、農作物の輸送と開発が目的だったため、どうしても後志利別川に沿った鉄道でなければなりませんでした。種川地区の加藤勘助、金原地区的鈴木幾太郎、今金地区的今村藤次郎らが中心となり、20年にわたる懸命の陳情が続けられた結果、国は村の資源の豊かさを評価して計画を変更し、国縫・瀬棚間のルートを決定しました。工事は大正15年（1926）に着工、昭和7年（1932）に全線開通しました。

渡島半島を東西に横断する全長約48kmの瀬棚線が開業したことにより、人々の往来をはじめ農産物や鉱物、木材の輸送が格段に効率化し、村が大きく発展する転機となりました。表1-9は主要取扱商品を国鉄開業の前後で比較したもので、その効果がわかります。他の統計資料によると、村内全鉱山のマンガン鉱産出量は昭和8年（1933）で計1,348トンを記録しています。



瀬棚線の建設工事(昭和初期)



瀬棚線の建設工事(昭和初期)



種川地区を走行する機関車



気動車導入に湧く今金駅(昭和31年)

表1-9 利別村の主要取扱商品

種目	昭和5年	昭和7年
馬鈴薯	3,500袋	18,500袋
木炭	16,640袋	18,400袋
大豆	28,000袋	12,500袋
セメント	2,500袋	9,000袋
果実	4,200箇	6,200箇
米	5,600袋	3,600袋
菓子	2,640箇	2,700箇
石油	1,620箇	2,000箇

国鉄瀬棚線敷設運動

「瀬棚線は函館本線国境より分岐して瀬棚港に至る鉄道にて、すでに昨年今金駅迄開通するに至り、今秋更に所定の目的地たる今金・丹羽間七キロ一、丹羽・瀬棚間一〇キロ六の完通を見る事に予定されている同線の経済的価値は、本道新線としては稀に見る有望であって、彼の大平原利別原野が生む農産物、鉱産物等悉く豊富で事業家のひとしく注目する處である。」

函館新聞(昭和6年6月15日)より

昭和30年代後半(1960)、造田が盛んになるにつれ、春の田植え期の労務者不足が深刻化しました。農協や役場職員、自衛隊の応援でも補い切れなくなったため、昭和41年(1966)から約5年間、瀬棚線に全国初の「田植え列車」が運行されました。道内外へ田植え労務者を広く要請し、その人員の移送に鉄道が大きな役割を果たしました。

瀬棚線はその後、社会情勢の変化により昭和62年(1987)に廃線となり、部分開業から数えて58年の歴史に幕を閉じました(表1-10)。現在、旧今金駅周辺は中央緑地公園として整備され、保存された線路や各駅の駅名標等で当時の面影を偲ぶことができます。

表1-10 国鉄瀬棚線の沿革

年	月日	主なできごと
大正15年(1926)	6月6日	工事着工(国縫・茶屋川間)
昭和4年(1929)	12月13日	国縫・花石間開通
昭和5年(1930)	10月30日	花石・今金間開通
昭和7年(1932)	11月1日	今金・瀬棚間開通(全線開通)
昭和49年(1974)	6月30日	SL運転廃止
昭和58年(1983)	8月31日	貨物列車運転廃止
昭和62年(1987)	3月15日	瀬棚線廃止



今金駅を降りる田植え労務者(昭和42年)
北海道新聞社編『写真集・国鉄北海道
ローカル線』より



今金駅改築落成記念式(昭和42年)

イ. 林業の発達

鉄道開通による効果として林業の発展にも目覚ましいものがありました。

当町の林業は明治27年(1894)の鉄道枕木造材事業に始まります。当時、種川地区に入植したばかりの埼玉团体(加藤政之助ほか)が組織する北海道拓殖組合が運営したもので、後志利別川流域のブナ、カバ等を大量に伐採し、イカダに組んで日本海側の瀬棚へ流送するという方法がとられていました。しかし、こうした大木の大量流送は、屈曲の激しい後志利別川では流木が詰まりやすく、洪水被害を甚大化させる要因として、毎年多大な経費をかけて浚渫作業をしなければなりませんでした。

昭和7年(1932)の鉄道開通を機に木材の搬出が本格化すると、木材工業(柾・製炭・材木等)もあわせて発展し、



瀬棚港の貯木場(明治時代後期)



種川ベニヤ工場(昭和18年)

種川駅は全国一の薪炭出荷地となり、鉄道大臣の表彰を受けました。

昭和 10 年代（1935）、戦時色が強くなると、造材の植夫が各地から集まり、地元の林業専業者も昭和 14 年（1939）は 159 世帯を数えるまで増えました。しかしその後は、乱伐による原本不足で廃業が相次ぎました。種川地区では現在も木工所が営業稼働中で、当時の林業を伝える資料としては、木挽き鋸、バチ櫛、刃広、トンビ、各種馬具等が収蔵・保管されており、天然林に恵まれた当町の特徴をうかがうことができます。

開拓が軌道に乗り、人口が 1 万人を超えた昭和 22 年（1947）、自治制施行 50 年の節目に当たるのを機に、村政から町政へ施行することを決め、利別村から今金町に改称しました。町名は開拓功労者の今村・金森両氏の功勞を称えるとともに、すでに今金地区が村の中心地として広く知れ渡っていたことも大きな要因でした。

ウ. 開拓を支えた馬

農耕や運搬の動力源としての馬の導入も早くから進められました。明治 31 年（1898）以降、道産子（ドサンコ）を移入する農家が増え、開拓の原動力として馬が大いに利用されました。農耕だけでなく、明治 40 年

（1907）には金原地区の神社境内に 1 周 1,200m の競馬場が整備され、毎年 1 回ドサンコによる草競馬が行われた記録があります。大正 2 年（1913）には飼育 1,000 頭を超えるまで普及し、昭和 6 年（1931）には八東地区的青木農場で地方競馬大会が開催されました。

昭和 10 年代には軍馬の供給地としても注目されるようになり、昭和 13 年（1938）に満州へ 24 頭を輸送した記録があります。これは当時この地が馬産地としても有力視されていたことを示しています。

輶馬大会も盛んで、昭和 5 年（1930）から昭和 61 年（1986）まで、最盛期には町内 7 地区で開催されていました。どの地区にも計 100 頭以上が集まり、他に娯楽がない時代だったため人出も 400 から 500 人と盛況を極めました。昭和 26 年（1951）には室蘭市で開かれた全道大会で優勝する馬も現れました。

昭和 40 年代（1965）以降、農業の機械化の波が押し寄せてると、馬の販路は急激に縮小し、馬を飼養する農家も減少の一途をたどりました。



バチ櫛で木材を運ぶ馬
(美利河地区 昭和 22 年頃)



ブラウを曳く馬(神丘地区 明治 45 年)



軍馬輸送経路図(昭和 13 年)
標茶町図書館所蔵



出征する軍馬(今金地区 昭和 13 年)



輶馬大会(今金地区 昭和 30 年代)

工. 酪農の発達

開拓が進むにつれ、これまでの収奪的な焼畑農法では安定した経営は難しいことから、酪農が重視されるようになりました。明治 40 年代（1907）以降、各地区で乳牛の移入・飼養が本格化しました。大正 2 年（1913）には計 90 頭を超え、翌 3 年には金原地区でバター製造が始まり、この地の製品は道南都市をはじめ、東京の市場まで「鈴金バター」の銘柄で進出しました。その後も牧場経営は順調に発展し、札幌の宇都宮牧場（日本近代酪農発祥の地）と並ぶ規模となったことが知られています。



金原農場(大正 3 年)

昭和 5 年（1930）に今金市街地で牛乳の各戸配達が始まり、1 日 200~250 本（1 瓶 180cc）の配達量が記録されています。各地区に集乳所が設けられ、今金、神丘、八束、種川、花石、白石、日進、美利河の順に建設が進み、昭和 16 年（1941）には北海道興農公社ができ、この時すでに 1,200 頭を超える乳牛が飼養されるほどになっていました。



牛乳の運搬(昭和 30 年代)

昭和 40 年代（1965）、町は酪農振興計画を立て、酪農経営の合理化と所得拡大を図るため、南部の日進地区に共同利用牧場「日進模範牧場」を設置しました。これは、農家の非生産部門である育成部門を切り離し、優良牛を一括飼育し、育成後に農家に配布するというものです。こうして約 330ha という広大な高原にサイロが建ち並ぶ独特の牧場風景が形成されました。設立当時の高さ 20m の巨大サイロはすでに解体され、見ることはできませんが、現在も今金町農協により、牧場経営が続けられています。



日進模範牧場(昭和 40 年代)

才. 全国一のブランド「今金男しゃく」の誕生

馬鈴薯は明治の開拓期から自家食糧用として栽培されていました。その後、昭和 7 年（1932）に国鉄瀬棚線が全線開通すると、生産・出荷が本格化するようになり、すでに檜山管内で最大の耕作面積、生産量を占めるようになっていました。翌 8 年頃には道内で男爵、紅丸、メークイン、蝦夷錦の 4 品種が限定栽培され始めました。昭和 12 年（1937）に当時の今金町農協が男爵の試験栽培を試み、本州向けに移出したところ好評を得、手応えを得ました。



曾我井定一組合長

昭和 28 年（1953）、農協組合長の曾我井定一はこれから町の畑作農業の将来を見据え、男爵の一品種に特化し、純良な種薯の生産をはじめとした徹底した管理体制をとることを決

めました。男爵とした理由は、他品種に比べて甘みがあり、料理に適すること、栽培期間が短く、早い時期に収穫できることなどから選ばれました。

昭和30年（1955）にはブランド「今金男しゃく」を打ち出し、今金地区の集出荷施設で共同選別し、極めて厳しい品質管理体制を敷くことにより、安定した生産体制を作り上げました。農協が発行したパンフレットには、今金男しゃくの特性が次のとおり記されています。

今金町男爵薯の特性

- ・採種体系を確立し、純系男爵薯を栽培していること
- ・男爵種子薯の専門栽培であり、他の品種の耕作をしていないため、異品種の混入しないこと
- ・馬鈴薯生産栽培の発祥地であり、農家が永年の経験と技術を有していること
- ・徹底した防疫体制により、無病薯の生産をしており、過去の防疫検査による合格率は全道首位の成績を保持していること
- ・機械化による耕土改良をなしているため、塊茎の肥大と成熟早く、かつ表皮がなめらかであり、品種特有の品格を有していること
- ・内地府県との最短距離にあるため、輸送に便利であり、かつ輸送上品傷がないこと
- ・選別技術が向上しているため、粒形が統一していること
- ・北海道でも特に馬鈴薯生育のために恵まれた自然環境の處で生産が行われていること

今金町農協 昭和31年発行「種子用男爵 今金特産 馬鈴薯」より

当時、道外の市場に出荷した際、腐食や傷で苦情があると、他の農協では出荷し直していたものを、曾我井組合長はどこへでも直接現地に出向いて確認し、品質管理の改善に取り組むようにしたところ、今金男しゃくは市場で最も高い値が付くようになりました。

こうした品質管理に向けた不断の努力の結果、令和元年（2019）に「今金男しゃく」が道内で3件目となる地理的表示保護制度のGI認証を取得しました。

現在見られる広大で美しい田園風景は、こうした多くの先人たちの血のにじむような努力を下地として形作られたことがわかるでしょう。



ブロウを曳く馬



今金町特産「今金男しゃく」



神丘地区的今金男しゃくの畑



牧草畑が広がる光台地区(写真撮影:小寺卓矢)

表 1-11 今金町の沿革(町制施行まで)

時代	年代	主な出来事
旧石器	-約120万年前	付近は浅い海で、カイギュウがすんでいた
	-約2万年前	ビリカ遺跡で盛んに石器がつくられる
縄文	-約1.5万年前	土器が使われはじめる 竪穴式住居がつくられ、定住がはじまる
	-8世紀頃	
統繩文 擦文	-14世紀頃	
	-17世紀中～後半	後志利別川上流でさかんに砂金が採掘される カニカン岳金山跡で金山が経営される
アイヌ文化期	-1669年	シャクシャインの戦いを機に後志利別川での砂金採掘がとだえる
	-1857年	松浦武四郎が後志利別川を探検する
明治時代	-1860～62年	箱館奉行が美利河で砂金採取をはじめる
	-1880年(M13)	大島勘左衛門ら後志利別川上流でメノウとマンガンを発見 兩宮砂金採取団が後志利別川上流で砂金採取を行う
大正時代	-1886年(M19)	志方之善ら神辻に移住し、開拓の先駆けとなる
	-1891年(M24)	今村藤次郎・金森石郎ら今金に移住し開拓をはじめる 瀬棚から国縫までの道路が開通する
昭和時代	-1893年(M26)	加藤政之助・勘助ら種川に移住し開拓をはじめる 今金、花石に駅舎所が開設される
	-1896年(M29)	金原明善・鈴木幾太郎が共同で金原・鈴岡の開拓をはじめる 鈴木義宗ら八東に移住し開拓をはじめる 今金八幡宮ができる
大正時代	-1897年(M30)	瀬棚村から分村し利別村（現在の今金町）となる 美利河マンガンの採掘が盛んとなり最盛期を迎える
	-1903年(M36)	豊田・住吉・白石の開拓がはじまり各地区への道路工事がすすむ 神丘・八東・稻穂で米づくりが試みられる
昭和時代	-1908年(M41)	メノウ採掘の最盛期を迎へ、全国産出額の約97%を占める
	-1909年(M42)	水田稲作が成功する
昭和時代	-1910年(M43)	白石の上田甚作、上田式豆まき器を発明。その後全道に普及する 乗合馬車、国縫・瀬棚間走る
	-1913年(T2)	利別消防組が設置される 石塚弥太郎・メップマンガン鉱山を発見する
昭和時代	-1916年(T5)	八雲・今金間に定期馬車走る
	-1919年(T8)	八東で本格的水田耕作始まる 今金市街に電気が通る
昭和時代	-1922年(T11)	延長25kmの農業用水路が完成し、平野部で稲作の基礎ができる 今金市街に電話が開設される
	-1923年(T12)	田代の佐藤万太郎、万太郎米を育成し表彰される
昭和時代	-1925年(T14)	国縫・花石間の鉄道が開通する
	-1929年(S4)	花石・今金間の鉄道が開通する
昭和時代	-1930年(S5)	今金集乳所ができる
	-1932年(S7)	国鉄瀬棚線が全線開通する
昭和時代	-1937年(S12)	種子用馬鈴薯がつくられる（本州へ移送）
	-1945年(S20)	終戦
昭和時代	-1947年(S22)	利別村が今金町に改称、町制を施行する

第2章 今金町の歴史文化資源の概要と特徴

第1節 既存の把握調査の概要

○既存の把握調査

本町では、昭和53年（1978）年のビリカカイギュウ化石の発見や、昭和58・59年（1983・84）に行われたビリカ遺跡の発掘調査で大きな成果があったことを受け、学芸員を配置するとともに、昭和61年（1986）施行の今金町文化財保護条例に基づき、文化財保護法に定める文化財のほか、町にとって重要なものについて、継続的に資料収集、調査研究、保存・活用を行っています。

地質や鉱物、化石等に関する把握調査については、平成7年（1995）から5か年発行された「今金地域研究」にその成果が収録されています。

砂金採掘跡および金山に関しては、美利河ダムの開発で水没する区域に対する埋蔵文化財調査のほか、平成7年（1995）に専門的な現地調査が行われ、その成果が「美利河・花石の砂金採掘跡」にまとめられています。

昭和初期の国鉄瀬棚線敷設工事に伴う殉難者に関する調査が昭和50年代に行われました。いわゆる「タコ部屋労働」被害者の実態調査で、遺骨発掘や遺族への聞き取りが地元の有志団体によって行われ、報告書が平成27年（2015）に発行されました。

建造物に関しては、平成7年（1995）に地元青年団体による茅葺き家屋の分布調査が行われました。当時、計18棟の茅葺き家屋を確認し、うち2軒は平面図が記録されました。専門家によるものではありませんが、貴重な調査記録と言えます。ただし、その後建物は老朽化で失われ、令和3年時点で確認できるのは1軒です。

天然記念物の分野は、国土交通省によって一級河川を対象とする生物調査が行われており、「河川水辺の国勢調査」の成果が毎年公表されています。後志利別川流域に生息する鳥類、両生類、爬虫類、ほ乳類、陸上昆虫、魚介類、底生動物の分布傾向や経年の動向をこれにより把握することができます。

これまでの主な把握調査および文化財調査・施設整備を整理したものが表2-1・表2-2です。



後志利別川で発見されたスッポン化石



カニヤン岳金山路7合目の坑道跡



タコ部屋労働被害者の遺骨調査



茅葺き家屋の分布調査

表2-1 これまでの把握調査とその出版物(発行年順)

書名	著者・発行者	発行年
今金町史	今金町	1958年
開拓回想録－今金町開基70周年記念－	今金町	1967年
今金町の地質	今金町	1981年
黄金郷への旅	矢野牧夫	1982年
神社・仏閣・頌徳碑・記念碑写真集	今金町史編纂室	1987年
今金町の遺跡 今金町文化財報告1	今金町教育委員会	1989年
いまかね文化財マップ	今金町教育委員会	1990年
改訂今金町史(上・下巻)	今金町	1991年
今金の歴史 インマヌエルの丘	びりか塾	1994年
史跡ビリカ遺跡	今金町教育委員会	1994年
茅葺き家屋を探せ	今金町青年団体連絡協議会	1996年
美利河・花石の砂金採掘跡	日本ナショナルトラスト編	1996年
清流のふるさと 後志利別川治水史	後志利別川治水史編纂委員会	1996年
太古からの使者 ビリカカイギュウ	今金町教育委員会	1998年
創立50年記念誌 拓魂	今金町農業協同組合	1999年
北海道檜山北部 地域の自然と歴史・文化	北海道檜山北高校編	1999年
改訂版 道南の自然を歩く	地学団体研究会道南班編	2002年
いまかね文化財マップ(改訂版)	今金町教育委員会	2011年
この碑の向こうに－国鉄瀬棚線タコ部屋労働の実態－	「この碑の向こうに」編集委員会	2015年
いまかねの軌跡	今金町	2017年
2018 北海道の巨樹・名木150選	北海道森と緑の会	2018年
いまかね学検定公式問題集	今金町歴史をたどる会	2018年
ビリカ旧石器文化館展示ガイドブック	今金町教育委員会	2019年

表2-2 今金町における主な文化財調査と施設整備(実施年順)

主な調査と施設整備	調査主体	実施年
一般分布調査(埋蔵文化財包蔵地調査)	北海道教育委員会	1973～
地下資源・地質調査	北海道立地下資源調査所	1974～76
国鉄瀬棚線敷設工事に伴う殉難者調査	今金町歴史を探る会	1975～
美利河砂金採掘跡所在確認調査	北海道開拓記念館学芸員	1975～78
美利河砂金採掘跡所在確認調査	北海道理蔵文化財センター	1979
美利河1遺跡所在確認調査	北海道理蔵文化財センター	1981
美利河2砂金採掘跡発掘調査	北海道理蔵文化財センター	1981
美利河マンガン鉱山関連資料の移設、仮保護措置	今金町教育委員会	1981
所在確認調査	北海道教育委員会	1983
美利河2遺跡範囲確認調査	北海道教育委員会	1983
美利河1遺跡発掘調査(A・B地区)	北海道理蔵文化財センター	1983～84
ビリカカイギュウ化石発掘調査	美利河海牛化石調査研究会	1984
改訂今金町史編纂事業(網羅的把握調査)	今金町	1984～91
町内分布調査、美利河1遺跡範囲確認調査	今金町教育委員会	1987～88
美利河1砂金採掘跡発掘調査	北海道理蔵文化財センター	1988

神丘 2 遺跡発掘調査	今金町教育委員会	1988~89
美利河 3 砂金採掘跡調査	今金町教育委員会	1989
美利河 1 遺跡発掘調査（C 地点）	今金町教育委員会	1981
地質調査（地層・岩石・化石等）	今金町教育委員会	1993~98
砂金採掘跡・カニカン岳金山跡調査	日本ナショナルトラスト	1995
町内萱葺屋根住宅所在確認調査	今金町青年会議	1995
美利河 1 遺跡の発掘調査（K 地点）	國學院大學考古学研究室	1996~06
ピリカ遺跡発掘調査（D・E 地点）*史跡整備事業	今金町教育委員会	2000~02
版画刷り師赤川黙氏より石版画 238 点寄贈受ける		2002
史跡ピリカ遺跡ガイダンス施設整備・開館	今金町教育委員会	2003
美利河 3 遺跡・美利河 4 遺跡発掘調査（試掘）	國學院大學考古学研究室	2004~06
民俗調査（古老聞き取り、資料収集）	今金町歴史をたどる会	2004~
文化財保管・活用庫の新設整備、民俗資料の一元管理	今金町教育委員会	2006
宮島 1 砂金採掘跡発掘調査	今金町教育委員会	2009
赤川版画作品の学校施設への移転・収蔵品目録発行	今金町教育委員会	2013~14
史跡ピリカ遺跡ガイダンス施設展示改修	今金町教育委員会	2016~17
文化財把握調査（石碑、文献資料等）	今金町教育委員会	2021
文化財把握調査（建造物、産業遺産、重要遺跡他）	今金町教育委員会	2022

埋蔵文化財調査は全 16 件中、14 件が東部地域の美利河地区で行われ、当地区に多種多様な文化財が集中する様子がうかがわれます。

周知の埋蔵文化財包蔵地は令和 3 年度現在で 59 カ所ありますが、今後の開発行為に伴い増加する可能性があります。これ以外に、未登載の包蔵地や可能性地がすでに数か所把握されており、町教委が重要遺跡と位置付ける箇所については詳細な調査が待たれます。

以上のように、当町の文化財の把握調査は、町史編纂事業や民間団体の調査に注目すべき成果はありますが、埋蔵文化財調査や史跡整備事業に偏重してきた傾向が強く、調査が行き届いていない分野が多くあると言えます。特に本格的な開拓前に発生した大規模な砂金採掘や金山経営については、その全容把握が難しく、マンガン鉱山関連資料や農業用水路などの産業遺産については歴史的観点からの価値付けが不十分です（歴史分野）。また、町内各地に伝わる民俗芸能（民俗分野）、寺社や家屋等の歴史的建造物（建造物分野）については未着手で、集落移転に伴い廃絶された神社や民俗芸能等、すでに調査が困難なものも発生しています。他にも、渡島半島北部特有の植生・動物相等の自然環境（天然記念物分野）に関する調査は未着手に近い状態にあり、今後計画的に調査を進めていく必要があります。

○網羅的把握調査

こうした課題認識のもと、町教委では令和 2 年度（2020）から把握が不十分な分野を中心に調査に着手し、石碑や寺社の概要については、その成果をデジタル版文化財マップ「南北海道の文化財」に登載し、整備しました（<http://donan-museums.jp/>）（図 2-1）。これは道南プロック博物館施設等連絡協議会が公立はこだて未来大学と連携し運営するもので、令和 3 年（2021）10 月時点で 109 件を公開しています。今後さらに追加登載を進めます。

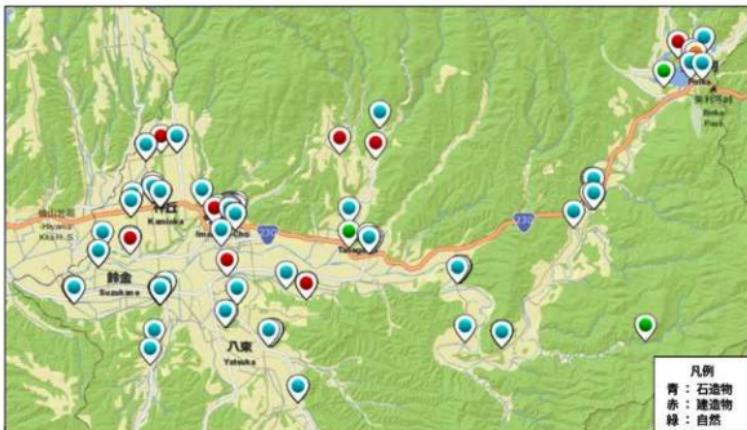


図 2-1 町内文化財のマッピング状況

道南ブロック博物館施設等連絡協議会「南北海道の文化財」より転載

令和 3 年度（2021）は本地域計画作成作業に合わせ、各分野の専門家を招聘しての網羅的な把握調査を実施しました。主として、これまで専門的な調査がなされていなかったマンガン鉱山関連資料や農業用水路などのいわゆる産業遺産をはじめ、アイヌ文化期の遺跡（チャシ跡）の探査、カニカン岳金山跡の現況把握調査、その他所在確認や内容把握が不十分な埋蔵文化財包蔵地、町内各地の歴史的建造物等について現地踏査を行いました。また、町内回覧等を利用し、全町民を対象とした聞き取り調査や資料の掘り起こしを実施しました（図 2-2）。

令和 3 年度の調査概要は表 2-3 の通りで、その主要内容は資料編で掲載しています（資料編 86 頁）。今回調査対象にできなかった分野の調査については、計画的に進める必要があります。



図 2-2 町民対象の資料掘り起こし事業

表 2-3 令和 3 年度に実施した網羅的把握調査

種別	主な調査対象	実施期間・回数
重要遺跡	ビリカ遺跡（史跡整備の現況）、美利河砂金採掘跡、カニカン岳金山跡、チャシ跡可能性地、鈴岡洞窟遺跡	4~11月・計4回
産業遺産	マンガン鉱山跡、旧メノウ加工販売施設、農業用水路、鉄道跡等	5~7月・計2回
建造物	歴史的建造物（公共建築、宗教建築、民家、畜舎、倉庫等）	6~10月・計3回
地質・化石	黒松内層標式露頭、ビリカカイギュウ化石、貝化石産出地等	10月・計1回
住民悉皆調査	歴史的建造物、巨木、鉄道、岩石・化石、考古資料ほか	5~10月・計3回

第2節 指定文化財の概要

今金町には令和4年3月現在、国指定3件、町指定6件の計9件の指定文化財があります（表2-4・表2-5）。北海道指定文化財、登録文化財はありません。

指定文化財やその他の選定文化財については、次頁以降でその概要を記載しています。

今後の把握調査の進行とともに、指定案件を検討し、所定の手続きを経て順次指定・登録件数が増加することが望れます。

表2-4 今金町の指定文化財一覧（令和4年3月現在）

指定区分		国	道	町	計
有形文化財	考古資料	1	0	2	3
	歴史資料	0	0	1	1
民俗文化財	無形民俗文化財	1	0	0	1
	有形民俗文化財	0	0	1	1
記念物	遺跡（史跡）	1	0	1	2
	天然記念物（化石）	0	0	1	1
計		3	0	6	9

表2-5 今金町の指定文化財一覧（令和4年3月現在）

国指定文化財

	名称	員数	種別	指定年月日
1	ビリカ遺跡出土品	163点	有形文化財	考古資料 平成3年6月21日
2	ビリカ遺跡		記念物	史跡 平成6年4月26日
3	松前神楽		無形文化財	重要無形文化財 平成30年3月8日

町指定文化財

	名称	員数	種別	指定年月日
1	ビリカ遺跡出土品 (国指定物件以外のすべて)	約11万点	有形文化財	考古資料 平成3年5月9日
2	ビリカカイギュウ化石	33点	記念物	天然記念物 平成6年12月14日
3	上田式豆まき器	10点	民俗文化財	有形民俗文化財 平成27年2月17日
4	美利河砂金採掘跡		記念物	史跡 令和4年1月26日
5	美利河マンガン鉱山関連資料	30点	有形文化財	歴史資料 令和4年1月26日
6	カニカン岳金山跡鉱山臼	3点	有形文化財	考古資料 令和4年1月26日

国指定文化財

名称	区分	概要	
ビリカ遺跡	史跡	<p>昭和 53 年（1978）、美利河ダムの建設工事に伴う地質調査の際に発見された旧石器時代の遺跡。その後の発掘調査で、大規模な後期旧石器時代の遺跡であることや、旧石器人の生活痕跡が多く見つかり、またその出土品の希少性・重要性などにより、遺跡は現状保存されることとなった。</p> <p>日本の旧石器時代から縄文時代初頭にかけての歴史を理解する上で重要であるとして、遺跡の西側半分の 99,090 m²が国史跡に指定された。</p> <p>史跡指定区域内で町教委が整備した展示施設「石器製作跡」は、発掘した 40 m²の区域をそのまま露し保護展示するもので、臨場感ある石器の出土状況を見学できる。</p>	 
ビリカ遺跡出土品	重要文化財 (考古資料)	<p>昭和 58・59 年（1983・84）年の調査で出土した石器のうち、各時期の文化層から出土した代表的な石器器種のほか、旧石器時代人の極めて高度な石器製作技術を示す槍形尖頭器、国内最古の装飾品とされる石製小玉、丹念な復元作業によって新たに見出された美利河技法接合資料・石刃接合資料など計 163 点が、当時の歴史を理解する上で重要であるとして国指定重要文化財に指定された。</p> <p>平成 15 年（2003）にオープンしたビリカ旧石器文化館の重要な文化財展示室で、全点の実物資料を一堂に展示している。</p>	 <p style="text-align: right;">写真撮影:小川忠博</p>
まつまえかぐら 松前神楽	重要無形文化財	<p>北海道南部で神職を中心に伝承する江戸時代以来の神楽で、松前神楽北海道連合保存会によって伝承されている。演目や芸態などに本州東北地方の諸神楽との関連があるがわかるが、北海道特有の神楽として特に重要とされ、平成 30 年（2018）に国の重要無形文化財に指定された。</p> <p>今金町では毎年 9 月 20 日の今金八幡宮例大祭で、多くの観客の集まる中で演じられている。せたな町在住の神職が指導的役割を担い、祭りの時期が近づくと今金町内で地元の子どもたちも稽古に加わり、熱心な伝承活動が続いている。</p>	 <p style="text-align: right;">写真撮影:千葉勝一</p>  <p style="text-align: right;">写真撮影:千葉勝一</p>

町指定文化財

名称	区分	概要	
ピリカ遺跡出土品	有形文化財(考古資料)	<p>昭和 58・59 年 (1983・84) 年の発掘調査で出土した石器のうち、国指定 163 点を除いた約 11 万点を町指定とする。</p> <p>ピリカ旧石器文化館常設展示室で代表的な石器 10 器種を展示し、それ以外の石器についてはピリカ旧石器文化館収蔵庫で保管している。</p>	
ピリカカイギュウ化石	天然記念物(化石)	<p>昭和 58 年 (1983)、美利河ダムの工事中に偶然発見された海生哺乳類化石で、現生動物の中ではジュゴンの仲間に当たる。</p> <p>翌年、町民発掘調査団が組織され、多くのボランティアの協力により化石が掘り出された。その後の研究で、今から約 120 万年前のもので、体長 8m に及び、世界最大級のカイギュウ化石であることがわかった。平成 10 年 (1998) に実物大の復元骨格模型が制作され、文化財保管・活用庫で収蔵展示している。発掘当時の注目度から、町のカントリーサインに採用され、広く親しまれている。</p>	 
うえだしき 上田式豆まさき器	有形民俗文化財	<p>明治 42 年 (1909)、白石地区の上田甚作考案の点播豆まさき器。当時の豆まさき作業は手作業で苦労が多く、その効率化を図るために考案された。直立姿勢のまま種まきできる点が斬新で、効率が良いと評判になり全道各地に普及した。特許取得後、同地区の専用木工所で量産体制が敷かれ、大正末期までに約 1 万 7 千台が販売された。</p> <p>昭和 30 年代 (1955) までの約半世紀間使われ続け、今金町発祥の農機具が北海道の畑作農業にも大きく貢献した。文化財保管・活用庫で 10 点を所蔵する。</p>	
ピリカさまん 美利河砂金山 さいくつあと 採掘跡	史跡	<p>後志利別川上流域の河岸段丘上には、人頭大程度の礫が石垣状に積み上げられた水路状造構やすり鉢状にくぼんだ地形、石積みなど、砂金採掘に関わる造構が地表面に露出した状態で連続し残っている。これらは江戸時代前期に稼働した「クンヌイ砂金山」関連造構と考えられており、美利河ダム周辺の指定区域はその中心部に当たる。当時の砂金採掘技術や金山経営の実態を知る上で重要である。指定面積は 33,839 m²。</p>	

名称	区分	概要	
びりか 美利河マンガン こうざんかんれんじょう 鉱山関連資料	有形文化財 (歴史資料)	<p>美利河マンガン鉱山は美利河地区で明治25年(1892)から昭和42年(1967)まで稼働した鉱山群で、明治30年(1897)に最盛期を迎えた。当鉱山は砂金山を除く坑内掘り金属鉱山としては北海道最古の鉱山で、明治から昭和初期では北海道最大のマンガン鉱山とされている。</p> <p>廃鉱後、関連資料一式(焼玉エンジン、排水用ポンプ、発電機、採鉱・選鉱用具、測量機器、写真機等)が移設され、文化財保管・活用庫で所蔵する。これら一連の資料は当時の鉱山文化を示すものとして貴重である。指定資料は30点一式。</p>	
カニカン岳 さんざんあとううざんす 金山跡鉱山臼	有形文化財 (考古資料)	<p>カニカン岳中腹には、金鉱坑道跡や露頭掘り跡が多数確認されており、また江戸時代の文書記録等から、江戸時代前期に稼働した金山と考えられている。</p> <p>山麓から回収された鉱山臼は、当時の金山経営の一端を示すものとして貴重なだけでなく、その年代の位置づけや技術の伝播系統を知る上でも重要である。指定資料は3点。</p>	

その他、選定文化財等

名称	区分	概要	
たこよ・まつ 常代の松	新・北海道 名木百選 北海道の 巨木・名木 150選	<p>種川地区の国道230号沿いにあるイチイの大木で、今金町開拓記念樹として古くから町民に親しまれている。高さは約13m、周囲は約4mあり、樹齢は1000年余りと推定されている。幹が分かれ目の穴に「ヌシ」が住んでいるとも言われている。</p> <p>昭和52年(1977)の町開基80周年記念事業で町木の募集が行われた際、町民の誰もが知る常代の松にちなんでイチイが選ばれ、現在に至っている。</p>	
びりか・みたまた 美利河・二股 しづえきさうようさん 自然休養林	日本美しの 森お薦め 国有林 (林野庁)	<p>美利河地区の北東部に所在し、面積709.87haにわたって広がる落葉広葉樹の天然林。</p> <p>ブナを主体に構成されており、渓流などの織り成す景観が美しく、植物の観察、観賞に適しているとして選定されている。</p> <p>ただし、令和3年現在、付近が土砂災害警戒区域に指定されており入林できない。</p>	

第3節 歴史文化資源の概要

当町では、文化財保存活用地域計画の作成に先立ち、令和2年度（2020）から文化財の網羅的把握調査を実施しました。

調査対象は、既知の文化財の現況調査を主としながら、それ以外にも今金町の地域性や特徴を示す歴史文化資源を調査対象とし、把握に努めました。

全分野を網羅したものではないものの、既存の把握調査分を含め、指定等文化財を除き、476件の歴史文化資源を確認しています（表2-6・資料編）。今後の把握調査でさらに増加することが予想されます。

また、これらの中で、一定程度の把握調査が進行したものは、今後専門家による調査や価値付けを行い、順次指定等を行うとともに、「いまかね遺産選定会議」の審議を経て「いまかね遺産」への選定を進めます（第6章第2節参照）。

表2-6 今金町の歴史文化資源一覧(指定等文化財を除く)

令和4年3月現在

種別		件数	備考
有形文化財	建造物	寺院	7
		神社	19
		教会	6
		茅葺き家屋	1
		近代化遺産	5
	彫刻	石造物、木碑等	71 記念碑、供養碑等
	絵画	石版画・銅版画	238 赤川熱版画作品
	典籍	歴史資料	6 開拓期史料
	考古資料	考古資料	11 未指定資料および表面採集資料
	民俗文化財	有形民俗文化財	10 賦物採取、農機具、生活用具等
記念物	無形民俗文化財	無形民俗文化財	7
	天然記念物	天然記念物	16 化石、地層、樹木等
文化的景観	文化的景観	文化的景観	4
埋蔵文化財包蔵地		59	
文化財類型には該当しないが地域にとって重要なもの			16 記憶遺産、地名、食文化等
合計			476

第4節 今金町の歴史文化資源の特徴

これまで見てきたように、当町には歴史の歩みや生業形態が地域ごとで大きく異なっていることがわかります（図2-2）。

町の東側にあたる山間地には、化石や岩石、貴重鉱物といった自然資源や鉱物資源が豊富にあることを背景に、カイギュウ化石や貝化石をはじめ、旧石器時代のビリカ遺跡、江戸時代の大規模な砂金採掘跡・カニカン岳金山跡、明治時代に最盛期を迎えたマンガン鉱山、メノウ採石場など、多種多様な歴史文化資源が分布しています。

また、町の西側にあたる中・下流域の平野部は、食糧基地としての可能性が早くから注目され、明治中期以降入植者が相次ぎました。キリスト教徒の団体入植で知られる神丘地区をはじめ、全国各地から入植者が入り、度重なる大洪水に見舞われながらも懸命に開拓が進められ、現在平野一帯は見事なジャガイモ畑や水田が広がっています。そうした各地区的要所には、地域住民の心の絆を象徴するキリスト教会や神社等の歴史的建造物が建っています。

大正期、後志利別川から取水し河川南岸に沿って開通した農業用水路は、本地域での大規模な水田開発を可能にし、また平成初期に完成した美利河ダムは、洪水被害を大幅に減らし、安定した農業生産体制を築きました。これらも町の歴史文化資源と言えるでしょう。

町全域に共通する産業としては豊富な森林資源を背景とした林業があり、盛んな木材工業や薪炭出荷地の名残を示す歴史文化資源があります。昭和初期、後志利別川に沿って渡島半島を横断して開業した国鉄瀬棚線は、林業・鉱業・農業という町の基幹産業の発展に大きく貢献しました。線路跡が保存される中央緑地公園など、現存する瀬棚線関連遺構も今金町の歴史文化資源と言えます。また、それら各産業の発展を下支えしたのが馬です。入植初期から急速に導入が進み、交通の足としてだけでなく、開墾や運搬、治水など、馬は正に開拓の原動力でした。町内の広い範囲に数多く見られる馬頭観音碑はそれをよく表しています。

南部の高原地域には、冷涼な気候を生かした一大酪農地帯が形成されています。かつてあった巨大サイロ群はこの地域のランドマークでしたが、現在も高原一帯に広々とした牧場風景が広がり、美しい景観を望むことができます。

このように、特徴的な歴史文化資源の分布が地域ごとに大きく異なる点が当町の特徴といえるでしょう。主な歴史文化資源や産業を東部・西部・南部の3つの地域で整理したものが表2-7で、それらの分布を示したものが図2-2です。

表2-7 地域単位で整理した主な歴史文化資源

地域	地形的特徴	主な歴史文化資源、産業等	
東部	後志利別川上流域／山間地	化石、旧石器遺跡、鉱業（金属・鉱物）、治水施設（ダム）	林業、馬、鉄道
西部	後志利別川中・下流域／平野	稲作、畑作（ジャガイモ）、利水施設（農業用水路）	
南部	高原地域	酪農、林業、馬	



図 2-2 今金町の歴史文化資源分布図

第3章 今金町の歴史文化の特徴

第1節 今金町の歴史文化の概要

歴史文化とは、地域固有の風土のもと、先人によって生み育まれ、時には変容しながら現代まで伝えられてきた知恵・経験・活動等の成果およびそれが存在する環境を総体的に把握した概念で、その特徴は地域らしさ、地域の特徴を表すものです。

前章でみてきた今金町の歴史文化資源をこの歴史文化の概念で整理すると、以下の8件を抽出することができます（表3-1）。次節でそれぞれの歴史文化の特徴を説明します。

表3-1 今金町の歴史文化の特徴

	今金町の歴史文化の特徴	具体的な内容
1	大型カイギュウがくらした地	世界最大級カイギュウ化石、化石の宝庫
2	石器石材に恵まれた地	旧石器時代の一大石器製作拠点・ビリカ遺跡
3	砂金採掘でにぎわった地	江戸時代のゴールドラッシュ
4	マンガンとメノウの产地	良質なマンガン鉱、国内最大の産出額を誇ったメノウ
5	キリスト教団体が入植した地	開拓の嚆矢・インマヌエル教会
6	道南一の穀倉地帯を支えた馬の产地	各地に祀られる多数の馬頭観音
7	清流・後志利別川に育まれた地	壮麗な治水史と日本一の美利河ダム
8	日本一「今金男しゃく」の地	特有の地形と大地の職人が生んだ特産品

第2節 今金町の歴史文化の特徴

1. 大型カイギュウがくらした地～世界最大級カイギュウ化石、化石の宝庫～

今金町は多数の貝化石が採取できる地域としてもよく知られています。幕末にこの流域を探検した松浦武四郎も、崖面に見える無数の貝化石に注目し、手に取ってスケッチを残しました。

貝化石が採集できる場所は町内各地にあり、毎年学校理科の授業で化石探掘体験を実施していますが、これらの貝はすべて海にすむ貝に属します。つまりこの地域一帯はかつて海だったことを示しています。

美利河ダムの工事現場で発見されたビリカカイギュウ化石はおよそ120万年前のもので、この地域が現在よりも寒冷な浅い海だったことがわかっています。

その後、この地域一帯で地殻の隆起がはじまり、40万年前頃には陸域化しました。ビリカカイギュウ化石が発見された地点は現在標高120mで、それだけ地殻が隆起したことを表しています。渡島半島横断道路の中で最も高い地点に、海でくらした動物化石が発見されたことから、壮大な地殻変動のはたらきを感じられる化石とも言えるでしょう。

ビリカカイギュウはジュゴンの仲間で、海にすむ草食哺乳類の一種です。ビリカカイギュウの骨格には、約500万年前のタキカワカイギュウ（道指定天然記念物）と18世紀まで生息していたステラーカイギュウとの中間的な特徴があり、年代的にもタキカワカイギュウの子孫、ステラーカイギュウの祖先に当たると考えられています。

ビリカカイギュウは推定体長8mと、復元された標本では世界最大級のカイギュウ化石であることがわかりました。頭骨を含む上半身の良好な個体標本として高い評価が与えられています。

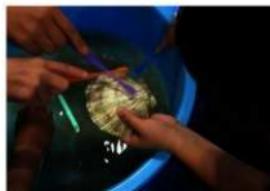
当時の今金町付近は海藻が繁茂する浅く冷たい海で、カイギュウが群れをなしてゆったりと暮らしていたようです。



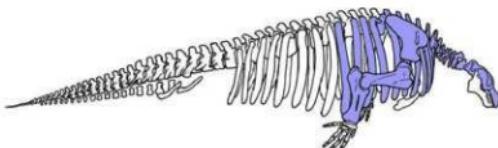
松浦武四郎が書いた貝化石のスケッチ



小学校6年理科での貝化石探掘体験



小学校6年理科での貝化石探掘体験



ビリカカイギュウの復元骨格図(着色部が産出部位)

2. 石器石材に恵まれた地～旧石器時代の一大石器製作拠点・ビリカ遺跡～

ビリカ遺跡は昭和 53 年（1978）、美利河ダムの建設工事がきっかけで発見されました。昭和 58・59 年（1983・84）の調査で、1,585 m² の範囲から約 11 万点もの大量の石器が出土し、この中には旧石器時代の人々が使った狩猟具のほか、装飾品も見つかり、大きな話題となりました。発見の重要性から工事計画は変更され、遺跡は現状保存されることになりました。

石器の特徴等から、ビリカ遺跡は今からおよそ 2 万年前から 1 万 5 千年前の旧石器時代後半期の長い期間にわたり、繰り返し営まれたことがわかりました。その後の調査を加えると、当遺跡から回収された石器の数は総計で約 20 万点、総重量は約 250kg に及びます。

これらの石器は、堆積岩の一種の頁岩が 8 割、メノウが 2 割と、近辺で採集できる石材がほとんどを占めています。旧石器時代の一大石器製作拠点・ビリカ遺跡が生まれた背景には、本遺跡が本州東北地方から北海道南西部にかけて広がるグリーンタフ地域に立地し、良質な石器用石材が地表面近くで採集しやすいという地質的・地形的環境に恵まれていたことが大きな要因と考えられています。

当時の旧石器人は、付近で石器用の原石を採集してはこの丘陵地で石器づくりを行い、そのことが非常に長い期間にわたって繰り返された結果、膨大な出土点数として私たちの目の前に現れていると考えられます。

これまでに発掘調査した面積は遺跡全体のわずか 1% にすぎず、いまだ大量の石器が良好に保存されています。今後の調査研究に大きな期待がかかる遺跡です。



ビリカ遺跡の調査(平成 12 年)



石器の出土状況(平成 10 年)



槍先形尖頭器(国指定重要文化財)
*左:メノウ製、右:頁岩製 長さ 33cm



石製小玉(国指定重要文化財)
*右端直径 9mm 写真撮影:小川忠博



美利河技法標式資料(国指定重要文化財)
*右端横幅 19cm 写真撮影:小川忠博

3. 砂金採掘でにぎわった地～江戸時代のゴールドラッシュ～

後志利別川上流域の台地上には、江戸時代前期の松前藩による砂金採掘跡が延長約10kmにわたり広がっています。現地を訪れ、これらの遺構を目撃した幕末の松浦武四郎、明治初期の外国人技術者、明治中期の雨宮砂金採取団の団員らは、異口同音にその規模の大きさに驚愕しています。当時としては国内最大規模とされ、それだけ多くの人がこの地に一攫千金を求めてやってきたことを示しています。採掘場の中心は現在の美利河ダム周辺にあり、現在も地表面に石垣状の遺構（包蔵地名「美利河2砂金採掘跡」）を観察することができます。

その上流に当たるカニカン岳中腹では、金鉱坑道跡や水路跡等の金山跡が確認されており、いまだ詳細は不明ながら、およそ同時期に川での砂金採掘とは別に、金山経営も行われていました。

明治中期に山形県から入った砂金採取団は、この地で北海道的な採取法をしっかりと身に付け、日高や空知等他の有望地へと活躍の場を移し、そして明治32年

(1899) の北見枝幸の大ゴールドラッシュへと発展しました。このことから、北海道の砂金採取史における後志利別川砂金の位置付けは極めて大きく、重要な位置を占めています。

このように本地域では、水気のない台地上の「柴金」、山中の「山金」、河床に広がる「砂金」の3種の金の採掘が行われています。この3種が同一地域に見られるのも全国的に極めて珍しいこととされています。

なお、この地での砂金採掘はその後も細々と続けられ、昭和30年代まで河床での砂金採掘を生業とする人もいました。この昭和期の採取用具一式は町に寄贈され、文化財保管・活用庫で収蔵展示しています。

今金町は「今でも金がとれる町」。正しい町名の由来は開拓功労者の今村・金森の両氏の冠字によりますが、今でも少量ながら天然の砂金が採取できるため、町教委では社会教育の一環として砂金採掘の体験学習も要請に応じて行っており、歴史的背景の説明や採取技術の指導等も行っています。



美利河砂金採掘跡



後志利別川での砂金掘り(昭和期)



砂金採取用具「ユリイタ」



砂金採取の体験のようす(花石地区)

4. マンガンとメノウの産地 ~良質なマンガン鉱、国内最大の産出額を誇ったメノウ~

美利河マンガン鉱山は、砂金山を除く坑内掘り金属鉱山としては北海道最古の鉱山で、明治から昭和初期では北海道最大のマンガン鉱山でした。これほどに発展したのは、この地域が貴重鉱物を豊富に含むグリーンタフ地域の直上に立地し、地表面近くに良好な鉱脈があり、採掘しやすい環境にあったことが要因と言われています。

ここで採掘されたマンガン鉱は国境へ運ばれた後、海上輸送で函館へ移送され各地に流通しました。明治40年代にイギリスのハウル社が経営権をもち、海外にも輸出されました。大正2年(1913)、鉱石の値下がりで一時経営不振となり、ハウル社は権利を杉林鉱山に売却しました。その後、非常に安価な輸入マンガンの影響で、昭和42年(1967)に閉山しました。当時使用された各種機械・採掘用具は文化財保管・活用庫へ移設され、収蔵展示されています。当時の活気を物語る貴重な資料です。

愛石家の間で今金町はメノウの産地として著名で、明治から昭和前期にかけて盛んに採掘され、特産品の一つとなりました。メノウは玉髓の一種で、色や透明度の異なるしま模様を示すのが特徴の鉱物です。断面が美しく、置物や装飾品に加工されました。

採石場は花石地区と美利河地区にあり、手作業による露頭掘りのみで、人力による運搬に拠っていました。最盛期の明治30年代には、花石メノウが全国産出額の97%を占めたと言われています。当地域のメノウの特徴は品質の良さと硬さにあり、それだけ加工が難しいと言われています。

当初は地元に加工技術がなく、すべて福井県若狭へ移送され加工販売されたことから、産地は花石でも「若狭メノウ」として流通しました。その後、昭和40年代に花石で加工・販売を行う職人が増え、「花石メノウ」として知られることになりました。

昭和61年(1986)、花石地区にメノウの加工販売を専門に行う施設「地域特産品生産センター」が開設され、専用の加工機械や染色用具が完備、加工職人も常勤し、加工販売が展開されました。しかし、職人の高齢化が進行し、平成18年(2006)から加工業が途絶えています。後継者の継続を図る取組も行われましたが、現在施設は閉鎖しています。



排水用機械作動のようす(昭和10年代)



マンガン鉱山の坑道前(昭和36年頃)



若狭瑪瑙会社花石事務所(昭和初期か)



生産センター内の専用工具とメノウ原石

5. キリスト教団体が入植した地 ～開拓の嚆矢・インマヌエル教会～

神丘地区は今金町開拓発祥の地であり、またキリスト教徒の集団移住で拓けたところとして知られています。

キリスト教の理想郷建設の夢を抱く志方^{しかかわ}之善^{よし}らは明治24年（1891）、この地に最初の鍬を下ろしました。その後、この趣旨に賛同する信者が家族を伴い入植しましたが、大洪水に見舞われて作物が全滅、霜被害にもあい、自然の厳しさと先の見えない暮らしに絶望し、約半数が故郷へ帰ったと言われています。その頃、彼らはこの地を「インマヌエル」と命名しました。聖書に由来する地名として国内でも大変珍しい地名と言えます。

その後、主導者的一人の志方がこの地を去り、未開地の返還を命ぜられる等、多くの苦難がありましたが、残された信者は理想郷建設の目標をもって開拓に励みました。この地には各宗派の信仰に従い、明治29年（1896）に聖公会利別教会、明治31年（1898）に組合教会インマヌエル教会（翌年に今金へ移転）が建ち、当時としては進んだ信仰活動が行われていました。現在この神丘の地に建つ教会は3代目に当たり、イギリス国教会系聖公会に属し、現在も定期的な集会等で利用されています。

神丘墓地は、キリスト教式と仏式の墓標が混在する珍しい墓地として知られ、他宗教の入植者とも協力して開拓した様子が伝わります。

6月中旬、この神丘の地から北を望むと、狩場山の南麓に雪渓が十字架状に残る「十字架雪渓」を見ることがあります。偶然の自然現象ではありますが、信者たちの信仰の励みになっていると言われています。

また、明治28年（1895）に北海道庁が発行した土地区画図には、一辺が約3kmもの長大な防風林が十字架形に設定されていたことが確認できます。これもこの地の信者による信仰心の表れと言われています。東西方向の防風林はすでに農地に変えられて失われ、南北方向のみが残されていますが、これも当時の歴史を伝えるものと言えるでしょう。



今金インマヌエル教会



神丘墓地



狩場山に現れる十字架雪渓



後志国瀬棚郡利別原野区画図(明治28年)

6. 道南一の穀倉地帯を支えた馬の産地 ～各地に祀られる多数の馬頭観音～

開拓早期の明治 31 年（1898）に初めて馬が導入され以降、その 15 年後にはすでに飼育 1,000 頭を記録しています。それだけ馬が開拓の動力源として活躍しました。農耕だけでなく、人や農産物、材木、治水工事等、あらゆる物資の運搬に力を発揮し、当時の人々にとって馬はなくてはならない貴重な存在でした。人々の娛樂として輶馬大会が盛んに開催されたほか、戦時中は軍馬としても戦地へ送られました。

それだけに主人は愛情を込めて育て、苦楽を共にして働いた馬には感謝の気持ちも強く、かつては馬頭観音供養祭も地区ごとに定期的に行われていました。近年の道路拡幅工事等で撤去されてしまったものもありますが、現在、馬頭観音碑（相馬神社の石碑を含む）は 18 か所、牛頭碑を含めると 20 か所が確認されています（下図）。数が多いだけでなく、広範囲に面的に分布する点が特徴と言えます。これは町内全域にわたり馬が数多く飼養され、活躍していたことを表しています。これらの碑には、愛馬への感謝と供養の思いが伝わるとともに、かつて盛んだった馬文化の面影がしげのばれます。

馬文化に関する当時の資料としては、馬橋やバチ橋、荷馬車、保道車、馬用かんじき、馬具一式等を文化財保管・活用庫で保存しています。



農地に客土を運ぶ馬（昭和 30 年代）



農作物を運ぶ馬



7. 清流・後志利別川に育まれた地 ～壮絶な治水史と日本一の美利河ダム～

後志利別川上流域の奥美利河地区には、ブナ原生林「美利河・二股自然休養林」が広がっています。国指定天然記念物の黒松内町歌オブナ林に近く、北限の冷温帯広葉樹林の一つとして貴重な存在とされています。森の浄化作用は、流域の水質を維持する機能をもつと同時に、数多くの魚類や生物のすみかを提供し、多くの釣り客でにぎわう名所となっています。

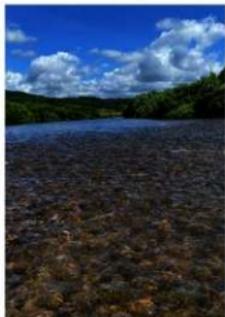
後志利別川は今でこそ穏やかに流れていますが、かつては「道南一の暴れ川」として恐れられ、農地のすべてが水没するほどの大災害が繰り返されました。

昭和9年（1934）以降、治水事業として河川直線化・堤防造成工事が本格化しました。しかし戦時に中断があり、その間もたびたび水害に見舞われました。戦後も予算不足と資材不足から思うように工事は進まず、川岸に繁茂する柳を活用した工法も採用されました。

治水工事は昭和30年代以降進展しましたが、昭和37年（1962）に再び大氾濫が発生したことから、治水計画の大幅な見直しに迫られ、より上流域にダムを建設すべきとの結論が出されました。こうした背景から、複数の支流が合流し比較的狭小な地形の美利河地区がダム用地として選ばれました。

美利河ダムは昭和54年（1979）に工事着工、平成3年（1991）に完成し、以後洪水被害は大幅に減り、農業地帯としての基礎ができました。ダム工事用地は軟弱地盤だったことなどから、工事には地形や地質の特徴に応じた様々な新技術が駆使されました。ダム型式は重力式コンクリートダムとロックフィルダムとの複合式が採用され、またダムの長さは1,480mと河川を横断して建設されたダムとしては日本一の長さです。この美利河ダムは画期的な土木事業としての評価が高く、平成4年（1992）に日本土木学会技術賞を北海道開発局として初めて受賞しました。

清流日本一を守ろうと、平成14年（2002）に地元有志からなるNPO後志利別川清流保護の会が発足し、河川の清掃や意識啓発活動を展開しています。



後志利別川



堤防造成工事のようす（昭和14年頃）
後志利別川治水史より



美利河ダム



清流保護の会による河川清掃

8. 日本一「今金男しゃく」の地 ～特有の地形と大地の職人が生んだ特産品～

今金町はジャガイモの最高級ブランド「今金男しゃく」の産地として著名です。昭和28年（1953）に農協が栽培品種を男爵に限定し、共同選別で品質の安定化を図り、種子生産農家と食用生産農家を区別するなど、徹底した品質管理体制をしいて以降、次第にその品質の良さが評判となり、町を代表する特産品になりました。この特産品も、地域の地形や地質の特徴と深く関係しています。

当町は南と北に高い山々があることから、風が抜けやすい地形をなしており、時折ヤマセが吹き、暖気を一気に冷やすなど、昼夜の気温差が大きい気候が特徴です。これはジャガイモの生産に最も適した気候条件とされています。また、昔から大洪水を繰り返した後志利別川は、火山灰質の台地一帯に水はけのよい肥沃な土壌をもたらしました。

一方、生産者は農協の指導により、種イモの毎年更新、空洞検査、徹底した風乾貯蔵、厳格な選別、でんぶん量の基準値設定など、妥協を許さない生産体系をとっています。良いジャガイモを作ろうという意識が高く、「大地の職人」とも呼ばれています。

令和元年（2019）、伝統的な生産方法や気候・風土・土壤などの生産地等の特性が品質等の特性に結びついているとして、「今金男しゃく」が農林水産省地理的表示（GI）保護制度に登録されました。近年は有名メーカーがボテチップスとして商品化したことで全国的に知られるようになりました。令和3年（2021）、農協女性部が「今金男しゃくレシピブック」を発行しました。これにはこの地域で食べられていた郷土料理等をはじめ、全32メニューが掲載されています。

「今金男しゃく」の生産に関わる建物としては農協倉庫群があります。現存する最古の昭和27年（1952）築の倉庫をはじめ、市街地には巨大な倉庫群が建ち並んでいます。これらは町の基幹産業を象徴する建造物群と言えるでしょう。



収穫された今金男しゃく



レシピブック掲載の郷土料理



馬鈴薯センター（昭和51年築以降増築）



購買部倉庫（昭和38年築）

第4章 歴史文化の保存・活用に関する基本理念・方針

第1節 歴史文化の保存・活用に関する現状と課題

これまで見てきたように、今金町の多様な歴史文化資源は相互に関連し合い、独特的歴史文化を形作っています。これらは、世代が変わっても次の世代へと確実に受け継がれるべきものであります。

本地域計画の目的達成のため設定した目標「文化財を守り、調べ、磨き上げ、郷土に誇りを持てる人を育てる」ことを見据え、現在の取組状況（現状）と浮かび上がる課題を整理します。表4-1は前章で示した8つの歴史文化の特徴ごとに抽出したもので、目標との関わりを明確化するため、「守る」、「調べる」、「磨き上げる」、「育てる」の4分野を付記しています。表4-2は町全体で見た場合の現状と課題について、目標の4分野ごとに抽出しました。

表4-1 歴史文化の特徴別にみた現状と課題

1. 大型カイギュウが暮らした地～大型カイギュウ化石、化石の宝庫～		目標
現状	頭骨を含む化石標本を良好な状態で保存しており、一定の調査研究環境が整っている。	守る
	実大模型を展示し、簡易の解説板を付して学校教育・社会教育で教育普及している。	育てる
	化石採掘や標本作り教室等を通して、ビリカカイギュウ化石の教育普及に努めている。	育てる
課題	ビリカカイギュウは固有種か現生種かが不明な状態であり、専門的研究の進展が必要。	調べる
	実大模型を展示する施設は狭く、大人数を収容できないため、展示方法の検討が必要。	磨き上げる
	発掘地點の記念碑は解説板の内容が古く、更新が必要となっている。	磨き上げる
2. 石器石材に恵まれた地～旧石器時代の大石器製作拠点・ビリカ遺跡～		目標
現状	史跡の保存整備基本計画に基づき、学校教育・社会教育両面で教育普及に努めている。	育てる
	遺跡にちなんだ体験機会を設定し、旧石器文化を学習できるプログラムを提供している。	育てる
	ボランティア団体と共催してイベントを運営することで、人材育成を図っている。	育てる
課題	遺跡の丘をイベント会場や冬季のクロスカントリースキーコースとして活用している。	磨き上げる
	調査報告書の既刊分にも未整理資料があり、学術的に重要なものは再整理・調査が必要。	調べる
	発掘調査後の未整理資料（C地点・K地点）の中に学術的価値の高いものもあるとの指摘があり、報告書刊行が要望される課題となっている。	調べる
現状	価値付けにつながる整理や調査を進めるためには、専門の学芸員の安定的な配置が必要。	磨き上げる
	史跡の保存整備基本計画は策定から28年が経過しており、計画の更新が必要。	磨き上げる
	館報等の刊行物を発行していないため、蓄積された研究成果を発信できていない。	磨き上げる
課題	周辺の多様な文化財や観光スポットを結びつけ、周遊できる仕組みづくりが不十分。	磨き上げる
3. 砂金採掘でにぎわった地～江戸時代のゴールドラッシュ～		目標
現状	美利河砂金採掘跡を町指定史跡とし、所有者とともに保存管理体制をとっている。	守る
	昭和期の砂金採取用具一式を収蔵展示し、学校教育・社会教育両面で活用している。	育てる
	民間の観光事業者が後志利別川で砂金採掘体験を事業化している。	磨き上げる
課題	社会科読本等に説明はあるが、地元の子どもたちが現地で体験して学ぶ機会は少ない。	育てる
	上流域に点在する砂金採掘跡やカニカン岳金山跡は、いまだ全容把握ができていない。	調べる
	後志利別川砂金の行き先等、歴史的観点からの具体的な価値付けができていない。	調べる
現状	美利河砂金採掘跡の教育利用、観光活用を想定し、段差解消等の周辺環境の安全確保や、当時の採取方法がわかる解説案内板等の設置が必要。	磨き上げる
	民間業者が行う体験事業に歴史を学ぶ要素を取り入れる等、業者との連携強化が必要。	磨き上げる

4. マンガンとメノウの産地 ～良質なマンガン鉱、国内最大の產出額を誇ったメノウ～		目標
現状	元鉱山関係者、加工職人への聞き取り調査や、関連資料（年表、図面、古写真等）の収集・保存作業は可能な限り実施した。	調べる 守る
	鉱山関連資料を町指定して保存対象とし、町内で産する各種岩石標本も保存している。	守る
	岩石標本を商品化しガイダンス施設で販売するなど、観光土産として活用している。	磨き上げる
課題	鉱山跡や関連資料の調査が不十分なため、専門家や製造会社から情報提供を得るなど記録化を進め、公開・活用に活かす必要がある。	調べる
	メノウの専門加工場は廃止されて久しく、後継者が不在で、専用の加工機械類等が活用されないままとなっている。	守る
	専門家の指導助言をいただき、貴重な資料群の効果的な活用法を検討する必要がある。	磨き上げる
5. キリスト教団体が入植した地 ～開拓の嚆矢・インヌエル教会～		目標
現状	地域住民によって建造物や信仰、歴史資料が守られている。	守る
	町の歴史文化に触れられる数少ない見学地の一つとして、町外から多くの来訪がある。	磨き上げる
	開拓期の資料・文書史料の収集・記録や、建造物の専門的な調査がなされていない。	調べる
課題	老朽化する教会の維持・管理が地域住民に大きな負担となっている。	守る
	人口減少や高齢化に直面し、当地域の開拓史を後世に伝える人が少なくなっている。	育てる
	6. 進南一の穀倉地帯を支えた馬の産地 ～各地に記られる多数の馬頭観音～	目標
現状	馬文化に関する把握調査、資料収集は一定程度進捗した。	調べる
	馬文化に関する資料（特に馬具）は文化財保管・活用庫に一元管理している。	守る
	馬頭観音供養祭等の祭礼に関する把握調査はできていない。	調べる
課題	人口減少や高齢化に直面し、碑を守る人や後世に伝える人が少なくなっている。	守る
	多数保管する馬具の一部にカビ等の生物被害が見られ、保存管理上の課題がある。	守る
	7. 清流・後志利別川に育まれた地 ～壮絶な治水史と日本一の美利河ダム～	目標
現状	地域の子どもたちを対象に稚魚放流や植樹会、水質検査等の体験機会が提供されている。	育てる
	川やダムとふれあうイベントや川下り事業が民間団体によって開催されている。	育てる
	奥美利河温泉や美利河・二股自然休養林は土砂災害警戒区域に含まれ、立入できない。	守る
課題	水質の良さを利用し、地酒や清涼飲料水等が開発・商品化されている。	磨き上げる
	NPO 後志利別川清流保護の会会員が高齢化し、イベント等の参加が低迷している。	育てる
	奥美利河温泉や美利河・二股自然休養は、幅広い観点で活用方策を検討する必要がある。	守る
8. 日本一「金今男しゃく」の地 ～特有の地形と大地の職人が生んだ特産品～		目標
現状	農協と生産者とが連携し、品質を守り一級品を生産するという誇りが醸成されている。	守る
	レシピブックが発行されるなど、食文化の記録と伝承を民間団体が実施している。	守る
	後継者育成を目的に、学校での生産者の講話や農作業体験、地場産品の給食提供などを実施している。	育てる
課題	基幹産業を象徴する農協倉庫群についての基本調査が不十分。	調べる
	農家の後継者不足により、農地が適切に引き継がれなくなるおそれがある。	育てる

表4-2 町全体としてみた場合の歴史文化の現状と課題(目標の内容別)

1. 守る	
現状	指定文化財については、相応の保存措置や管理体制をとり、施設整備がなされている。
	地区単位、自治会単位で歴史文化資源を守り、伝える活動が続けられている。
	松前神楽や狩場太鼓など、町に伝わる民俗芸能等は各団体で熱心な伝承活動がある。 (文化財の防災・防犯体制に関する現状は第6章第3節参照)
課題	各地域や団体では高齢化と人員の減少が進行し、歴史文化資源を守り伝える体制に不安がある。 すでに廃絶され、調査や確認ができなくなってしまったものについては、管理の対象外となっている。 文化財を守ることの意義や目的について、町民に理解してもらうための町の取組は十分ではない。 (文化財の防災・防犯体制に関する課題は第6章第3節参照)
2. 調べる	
現状	町史編纂事業や専門職員による把握調査で、主要な資料が収集され、一定の調査がなされている。 民間の有志団体が現地調査や収集活動を行い、特定の分野に関しては注目すべき成果がある。
	令和2年度以降の把握調査により、産業遺産の価値付けや重要遺跡の所在確認、歴史的建造物の全体的な把握など、これまで未着手の分野で一定の成果を得た。
	把握調査が不十分か未着手の分野（第2章第1節39頁）や、町が重要遺跡と位置付けるものについては、今後専門家等の協力をいただき、計画的に調査を進める必要がある。
課題	専門職員が文化財保護業務に専従できる体制になく、調査や価値付けが進んでいないものがある。 町民や団体の理解と協力のもと、悉皆的な振り起こし調査を継続する必要がある。
3. 磨き上げる	
現状	文化財マップや社会科副読本などを発行し、歴史文化の情報発信と普及には一定の成果がある。 バスツアーやスタンプラリーなどのソフト面で、所有者や大学等と連携し、一定の成果がある。
	デジタル文化財マップや北海道デジタルミュージアムでの所蔵品公開、SNSでの情報発信、学芸員コラムの新聞掲載等、電子媒体やメディアを活用した情報発信は、可能な範囲で実施している。
	把握調査や価値付けが不十分、未着手の歴史文化資源については、公開・活用の段階に至っていない。 解説案内板が古く、少ないため、訪れる人にわかりやすい形で文化財の魅力を伝えられていない。 民間観光事業者との連携が不足し、町ならではの歴史文化を体験できる事業展開ができるていない。 電子媒体やメディアを活用した情報発信については横の連携を強化し、効果的な運用が必要。
4. 育てる	
現状	学校教育や社会教育で体験学習の機会を設け、特徴的な歴史文化に触れる機会を提供している。 団体と共に運営するイベントを通じて、会員の養成や新規会員の拡大を図っている。
	研修会を開催する団体には、町教委がその運営を支援することで、会員の資質向上を図っている。
	学校教育の教育課程で、町の特徴的な歴史文化を体系的に学ぶしきみができるない。
課題	町民が町の歴史文化の価値や意義を学ぶ機会提供は単発的で、連続性が見られない。 大人数の見学利用に対応できる人員体制ができないおらず、学校教育や団体客の対応にも限界がある。

このように、これまでの取組状況には一定の成果がある一方で、多くの課題もあります。以下、大きな課題となっている事項を目標に記載の内容別に要約します。

「守る」については、地域住民との協働が重要な分野ですが、社会全体の人口減少と高齢化を背景に、中核となる担い手が年々減少し、各地区住民が大切にする文化財を守り、伝える体制に不安があります。すでに廃絶され、調査 자체が困難なものも発生しています。

「調べる」については、元来専門職員だけでできるものではなく、地域住民の協力や横の連携が不可欠な分野ですが、これまで専門職員の配置が脆弱なことから、把握調査や専門家

による価値付けが不十分、あるいは未着手の分野が多く残されています。

「磨き上げる」について、指定文化財に関しては調査が進み、観覧しやすいよう整備されたものもある一方で、重要性が認識されながらも整理や報告が未完了のため、より正確な価値付けに進展していないものがあります。設置から長期間が経過した解説案内板や、策定後30年近く経過した整備計画は、現状にそぐわないものとなっています。

「育てる」については、社会教育の分野では多くの事業を実施していますが、学校教育との連携は弱く、子どもたちが地域の歴史文化を体系的に学ぶしくみは確立できていません。町民が地域の歴史文化を学ぶ講演会等の機会提供は、これまで単発的な傾向が強く、郷土に誇りを持てる人の育成は決して十分ではありません。

いずれの分野でも、地区住民との協働や住民参加、団体との連携がなくてはならないものとなっており、課題解決のカギもこの点にあることがおのずと見えてきます。

第2節 歴史文化の保存・活用に関する基本理念

ここで改めて本地域計画の目的と目標を確認します。

本地域計画の目的は、「未指定の文化財も含め、有形・無形の文化財の把握調査を早めに進め、適切な保存管理体制を検討・構築し、今後の今金町のまちづくりに文化財を活用していく取組を町民とともに展開」(序章第1節1頁)することとし、その実現のため、「文化財を守り、調べ、磨き上げ、郷土に誇りを持てる人を育てる」(序章第1節3頁)という目標を設定しました。

前節で、現在地から目標を目指す上で障害となる課題を整理しました。課題を解消し、目標達成に重要なカギとなるのは、ほぼすべての分野で共通しており、それは地区住民との協働や住民参加、団体との連携です。このことを基本理念の中心に据え、各課題に対応した対処方針を定めて事業を実施することが、目標の達成に非常に有効です。

そこで、本地域計画の基本理念を「住民参加で 未来へつなごう 今金の歴史文化」と定めます。

《計画の基本理念》
住民参加で 未来へつなごう 今金の歴史文化

第3節 歴史文化の保存・活用に関する方針

基本理念「住民参加で 未来へつなごう 今金の歴史文化」を念頭に置き、今後取り組むべき解決策の方針について、目標に記載の内容別に検討します。

○守る

価値が明らかになった歴史文化資源については、行政が指定・登録を行い、保存・整備を進めることが求められます。しかし、把握や価値付けが不十分・未着手なだけで、潜在的にはそれ以外にも多数の歴史文化資源があります。特に地域住民によって大切に守られてきたものは次の世代へ継承する必要があります。行政が団体間の連携・協力体制を構築し、これ

に幅広い町民や関係機関、専門家の参加・協力を求め、情報や課題を共有することで、課題の解消につながることが期待されます。新規の指定・登録や講演会の開催等、事あるごとに行政が地域住民に文化財保護の意識啓発をすることも、文化財の保存と継承に有効です。

○調べる

当町では、文化財の専門的な把握調査が不十分なことが、その後の展開に大きな障害となっています。これを解消するには何より専門職員を安定的に配置し、人員体制を強化することが必要です（第6章第1節77頁）。それと同時に、連携課や専門家、研究機関、地域住民との横の連携を強めることも重要で、これにより組織的に調査に取り組むことが可能となり、新たな歴史文化資源の掘り起こしや価値付けにつなげることが可能となります。

○磨き上げる

今金町の魅力ある歴史文化を多くの町民や子どもたちが学び、後世に引き継がれるようになるためには、ハード・ソフト両面での整備が必要です。様々な事業が考えられますが、整備に当たっては、関連団体や専門家等の指導助言のもと、わかりやすい形で洗練化することで、初めて調査成果を還元することができます。横の連携を強化し、効果的に公開・活用することにより、文化財の理解者の増加につながることが期待されます。

○育てる

学校教育との連携を強め、教育課程の中で確実に今金町の歴史文化について体験を通して学ぶ機会を設定することが効果的です。併せてそれを実施できる体制整備も必要です。関係団体や専門家等との横の連携を強化し、講習会などで体制づくりを進める中で、関わる人の学びの機会となり、理解者の増加につながることが期待されます。

また、「守る」・「調べる」・「磨き上げる」・「育てる」のそれぞれの取組で、地元町民や子どもたちが関わる機会を可能な限り設けることも有効です。各場面の最前線に立つことにより、地域の歴史文化に直接触れられるまたとない機会となり、本地域計画が目標とする「文化財を守り、調べ、磨き上げ、郷土に誇りを持てる人を育てる」の達成に効果が期待されます。

以上、各課題の解消に有効と考えられる方針を整理したものが表4-2で、模式図化したものが図4-1です。

各方針に沿った具体的な取組（措置）については、次章で記載しています。

表4-2 歴史文化の保存・活用に関する方針

目標の記載	方針	
守る	指定文化財の保存管理の推進 文化財保護意識の啓発	
調べる	文化財の掘り起こしや価値付けの推進 人員体制の強化	【共通事項】 連携・協力体制の構築 地域住民の参加・協力 子どもの参加機会の提供
磨き上げる	ハード・ソフト両面での整備 わかりやすい形での洗練化	
育てる	学校教育との連携 実施できる体制整備	

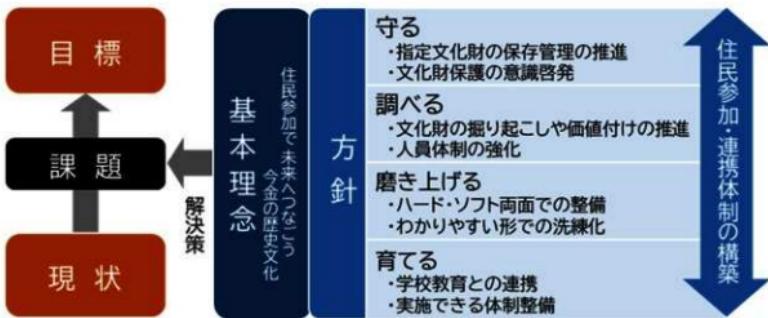


図 4-1 歴史文化の保存・活用に関する基本理念・方針の相関図

第4節 関連文化財群に関する事項

○関連文化財群の設定

関連文化財群は、指定・未指定を問わず、地域にある多種多様な文化財を歴史文化に基づく関連性、テーマ、ストーリーによって一定のまとまりとしてとらえたものです。グループとして扱うことで、未指定文化財についても構成要素として価値付けができ、相互に結びついた文化財の多面的な価値や魅力をわかりやすく伝えることができる効果があります。

当地域計画では、第3章で抽出した8つの歴史文化の特徴の中から、当面は次の4つを設定し、優先的に調査・保存・活用を進めることとします。次頁以下、それぞれの関連文化財群について説明します。

- 関連文化財群① 大型カイギュウがくらした地
- 関連文化財群② 旧石器時代の一大石器製作拠点・ビリカ遺跡
- 関連文化財群③ 豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化
(「砂金採掘でにぎわった地」+「マンガンとメノウの産地」)
- 関連文化財群④ キリスト教団体が入植した地

関連文化財群① 大型カイギュウがくらした地

ストーリー「ビリカカイギュウから見える世界史と生態系」

ビリカカイギュウが暮らしたおよそ120万年前の今町は、現在のオホーツク海並みの寒冷な海でした。ビリカカイギュウのような大型カイギュウはその巨体を維持するのに多くの海草を食べる必要があり、本地域一帯は海草が大量に繁茂する浅い海だったと考えられています。

ビリカカイギュウの子孫は、18世紀半ばまで生息したベーリング海付近のステラーカイギュウと言われています。18世紀前半、交易を目的としたロシアのシベリア東進がさかんとなり、ベーリング探検隊がカムチャッカ半島沖に到達した際、偶然にこの大型カイギュウが世界で初めて発見されました。以降、人間によってカイギュウが大量に捕獲され、最初の発見からわずか27年で二度と姿をみることができなくなりました。また、この時期にロシア人が毛皮用としてラッコを乱獲したことにより海の生態系が大きく崩れ、ステラーカイギュウが食料とする海草がほとんどなくなってしまったことも、大型カイギュウの絶滅に大きく影響したと言われています。人間活動の影響で生物が絶滅した典型的な例と言えるでしょう。熱帯域にすむ類縁種のジュゴンも絶滅の危機に瀕しており、保護策の必要性が叫ばれています。

ビリカカイギュウを学ぶことは、単に地域の自然・歴史だけでなく、世界史や生態系を学ぶまたとない機会ともなります。

ビリカカイギュウと同じ層から採取される貝化石も、同様に寒冷な海域に生息する貝です。化石採掘体験や道内から産出している他の大型カイギュウ化石の見学など、本物に触れる体験を通して、壮大な歴史に直接ふれることができます。



ビリカカイギュウ化石(頭骨)



発掘調査のようす(昭和58年)



ビリカカイギュウ発掘地点
に建つ碑

構成資源一覧

No.	名称	いまかね遺産類型	指定
1	ビリカカイギュウ化石標本（実物）	化石	町指定天然記念物 未指定
2	ビリカカイギュウ化石産出地点	化石	
3	ビリカカイギュウ化石実大標本模型（複製）	化石	
4	ビリカカイギュウ共伴化石（主に貝化石）	化石	
5	漸棚動物群化石標本	化石	
6	貝化石を産出する漸棚層露頭（中里地区、豊田地区）	地層	
7	八雲層・黒松内層露頭（住吉地区）	地層	
8	貝化石を産出する八雲層露頭（種川地区）	地層	
9	訓縫層露頭「熊すべりの磐」（美利河地区）	地層	



図 4-2 関連文化財群①「大型カイギュウがくらした地」の構成資源とその分布

関連文化財群② 旧石器時代的一大石器製作拠点・ビリカ遺跡

ストーリー「氷河期の面影を残す謎が多いビリカ遺跡」

ビリカ遺跡で行われたこれまでの発掘で、計 20 万点余りの石器が出土しました。発掘面積は遺跡全体の 1%に過ぎず、この丘にまだ大量の石器が眠っています。発掘調査時に層位的に異なる複数の生活面が確認されたことから、長い期間にわたり旧石器人が繰り返し利用した拠点だったことがわかっています。なお、このなだらかな丘陵地形は、氷河期特有のソリフラクション（周氷河地形の一つ）の影響を受けた可能性が指摘されています。当時生息していた針葉樹（グイマツ・アカエゾマツ）を遺跡に植栽し、旧石器時代の景観を再現しています。

また、この遺跡は巨大原石を用いた大型石器を特徴とすることでも知られています。長さ 33cm の槍先形尖頭器や長さ 45cm の両面調整石器、高さ 50cm の石刃石核などの存在は、この地が巨大な頁岩原石を容易に得られる環境にあったことを示唆しています。しかしこれまでの分布調査ではそうした露頭を発見できておらず、旧石器人がこれらの巨大頁岩をどこでどうやって得ていたのかは、いまだ大きな謎です。

メノウもさかんに採集・利用されており、極めて硬い石材ながらも見事に成形されたメノウ製石器を見ると、当時の人々が高い石器製作技術を有していたことがわかります。石器とともにマンガン鉱も出土しており、当時の人々は本地域に産する特徴的な岩石・鉱物を見逃すことなく、暮らしに有効利用していた様子がうかがわれます。

ストーリー「石をたずねて 300km」

この地で採集された頁岩やメノウの原石は巧みな技術で石器に加工され、道内各地の広い範囲に流通していたようですが、逆に遠方からビリカ遺跡に持ち込まれた黒曜石製の石器も少ないながらあります。これまでに行われた黒曜石の理化学的な産地分析では、道内 4 大産地（赤井川、十勝三股、置戸、白滝）の全産地から持ち込まれていることが判明しています。最も遠い白滝は、直線距離にして約 300km 離れており、当時の人々の広い行動領域をうかがわせます。しかし、どのような方法でモノが流通し、人々が移動していたのかについては、今後の重要な研究課題です。

構成資源一覧

No.	名称	いまかね遺産類型	指定
1	ビリカ遺跡（指定区域を含む約 20 万㎡）	遺跡	町指定史跡、未指定区域あり
2	ビリカ遺跡出土品（総計約 20 万点）	遺跡	国指定重要文化財 163 点 町指定有形文化財 約 11 万点
3	ビリカ旧石器文化館・石器製作跡	遺跡	石器製作跡は史跡指定区域内
4	旧石器時代の植生・景観を復元した針葉樹	遺跡	史跡指定区域内
5	ビリカ遺跡の地形（周氷河地形の可能性）	遺跡	未指定
6	町内各地で採集された旧石器時代の資料	遺跡	未指定
7	周辺で採集した岩石標本	遺跡・岩石	未指定



氷河期に形成された可能性が指摘される遺跡の丘陵地形



氷河期の景観を再現した
グイマツ



高さ 50cm の巨大な石刃核と
その石刃 写真撮影: 小川忠博



図 4-3 関連文化財群②「旧石器時代の大石器製作拠点・ヒリカ遺跡」の構成資源とその分布

関連文化財群③ 豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化

ストーリー「金に魅せられた人々の執念」

後志利別川上流域に随所に見られる石垣状遺構、さらに上流のカニカン岳金山跡は、いずれも江戸時代前期に起きた大規模なゴールドラッシュを物語ります。一攫千金を夢見て多くの人々が汗を流した果ての姿が、採掘跡という形でこの地域に残されています。これを見ると、金に魅せられた人々の執念を感じざるを得ません。シャクシャインの戦いが起きた時、松前藩がこの地でアイヌ側の進軍を食い止めようとしたのも、この地域の膨大な金資源を守ろうとしたのではないかと言われています。

ストーリー「旧石器時代から現在まで使われるマンガン鉱」

明治期に最盛期を迎えたマンガン鉱山ですが、これに目を付けたのは明治期の人たちだけではありませんでした。旧石器時代のビリカ遺跡の発掘で、石器とともにマンガン鉱も出土しており、近年の調査では千歳市の旧石器時代の遺跡からも美利河産マンガンが発見されました。顔料（絵の具）と考えられており、この地の良質なマンガン鉱が旧石器時代から注目され、各地に流通していました。一方、現在も道立今金高等養護学校窯業科の生徒が美利河地区採集のマンガン鉱を磁器の釉薬として利用し、地場産品として商品化しています。当地ならではの鉱物資源が時代を超えて利用されています。

ストーリー「地域に根差した鉱物・メノウ」

愛石家の間でメノウといえば「今金町花石」とされるほど、この地のメノウはその質の良さで知られています。明治期にはすでに国内最大の産出量となり、地元で加工されはじめた昭和期からは花石メノウとして流通しました。すでに加工・販売は廃止されて久しいですが、今でも旧家の庭先に見事なメノウが据えられ、記念碑の土台にメノウの原石がふんだんに用いられる等、メノウは地域に根差した代表的な鉱物資源と言えます。

この地のメノウも、旧石器人は石器石材として利用しました。加工が難しい石材ため失敗作も少なからず見受けられます。表面の一部がピンク色に変色した石器があり、これは原石に熱を加えて「焼き入れ」を行い、加工しやすいよう変質させたものだろうと花石のメノウ加工職人が指摘しました。旧石器人も昭和の職人も、その特質を理解し、対応していたことがうかがわれます。

構成資源一覧

No.	名称	いまかね遺産類型	指定
1	美利河砂金採掘跡	鉱物	町指定史跡
2	カニカン岳金山跡	鉱物	未指定
3	カニカン岳採集の鉱山臼	鉱物	町指定有形文化財
4	昭和期の砂金採掘用具一式	鉱物	未指定
5	美利河マンガン鉱山跡	産業遺産	未指定
6	動力機械・古写真・鉱山用具・鉱山文書一式	産業遺産	町指定有形文化財
7	ビリカ遺跡出土のマンガン鉱	鉱物	未指定
8	花石メノウ工芸品および原石	鉱物	未指定
9	旧特産品センターのメノウ加工機械類一式	産業遺産	未指定
10	記念碑や民家庭先のメノウ	鉱物	未指定
11	ゼオライト（沸石）採石場（美利河地区）	鉱物	未指定



ビリカ遺跡出土のマンガン鉱



記念碑の土台に使われる
メノウ



図 4-4 関連文化財群③「豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化」の構成資源とその分布

関連文化財群④ キリスト教団体が入植した地

ストーリー「純粹な信仰心による超教派的ユートピアを夢みた地」

今金町の開拓は明治24年（1891）、現在の神丘地区に入ったキリスト教徒による団体入植を嚆矢とします。彼らが名付けた「インマヌエル（神われらとともにいます）」という聖書由来の地名からもその信仰心がうかがわれます。この地は開拓移住の当初から、歴史的由来と性格を異にする二つの教派、組合教会（プロテスタント）と日本聖公会（カトリック教・プロテスタントの中道）の信徒らが協働して集落をつくったところとしても知られ、他にはない異色の風土が形成されました。

ストーリー「インマヌエル村憲法にみる精神」

志方之善が定めたと言われる「インマヌエル村憲法」は冒頭「一、基督教主義ヲ贊成シテ移住スル者ハ、何人ヲ問ハズ、定域内ニ於イテ原野一萬五千坪ヲ拓シ、成功ノ上十分ノーフ教会費トナスコト。」とあり、完全に教派を超えたキリスト教村にしようとする精神がみられます。しかしその後、教会建設を巡って教派は分裂、開拓不成功による未開地の返還処分、主導者の志方がこの地を去るなど、多くの苦悩と葛藤、挫折がありました。しかし、北海道の厳しい環境下では互いに連携協力しなければ生きていけないという寛容な精神風土も手伝い、理想郷建設という共通目標を精神的エネルギーとし、超教派的な共同体が保たれることとなりました。

ストーリー「キリスト教式と仏式が共存する神丘墓地」

高台にある神丘墓地に入ると、十字架の墓標群が多く立ち並ぶ中に、仏式のお墓も混在していることに気付きます。後に入植した仏教徒を受け入れたことをよく示し、このことは他のキリスト教墓地にはないことと言われています。この墓地に立つ無縁仏の慰靈碑には、十字架と辯が並列して刻まれており、この地の人々の温かい気質を表しています。

そして現在、見事に開拓された美しい田園風景の中、3代目となるインマヌエル教会が信徒らの信仰の場として受け継がれています。他に人々の信仰文化を表すものとして狩場山の十字架雪渓、十字架形の防風林があります。



神丘墓地の無縁仏

構成資源一覧

No.	名称	いまかね遺産類型	指定
1	今金インマヌエル教会	建造物	未指定
2	今金町開拓発祥之地碑	石造物	未指定
3	荻野吟子歌碑	信仰	未指定
4	神丘発祥之地碑	石造物	未指定
5	大越鉢吉入植記念碑	石造物	未指定
6	神丘墓地	信仰	未指定
7	無縁仏慰靈碑（キリスト教・仏教一体型）	信仰	未指定
8	地名としてのインマヌエル	地名	未指定
9	インマヌエル村憲法	書跡	未指定
10	狩場山の十字架雪渓（所在地はせたな町）	信仰	未指定
11	聖公会インマヌエル教会文書（礼拝日誌）	書跡	未指定
12	天沼家文書および丸山家文書	書跡	未指定
13	丸山要次郎作の彫刻	美術	未指定
14	後志国瀬棚郡利別原野区画図（明治28年発行）	書跡	未指定



図 4-5 関連文化財群④「キリスト教団体が入植した地」の構成資源とその分布

○関連文化財群の課題・方針

ここでは関連文化財群の視点から、特に多面的な価値や魅力をわかりやすく伝えるための方針を下記のとおり設定し、効果的な措置を行うこととします。

関連文化財群① 大型カイギュウがくらした地

ビリカカイギュウ化石は、新種か否かという点でいまだ不明の段階にありますが、復元された中では世界最大級の海牛類化石である点に変わりなく、町が世界に誇ることのできる貴重な化石資料です。発掘当時から「ビリカカイギュウ」の名で町民に親しまれてきたこの化石は、仮に新種でないとしても、この通称名で活用が可能とされています。専門的な研究は今後推進しながらも、発掘地点や実物大復元模型を軸とした展示環境の整備を進めるなど、様々な普及活動をより広く展開することが求められます。

発掘地点は美利河ダム公園内の遊歩道沿いに位置することから、徒歩での周遊コースの一つとして好適です。現在発掘地点に建つ解説板は内容が古いため、デジタル技術の活用も視野に本化石発掘の意義や化石の価値を伝えやすいものに更新することが必要です。

実物大復元模型や多数の貝化石標本資料は現在、文化財保管・活用庫に設置し、観覧に供しているところですが、元来展示施設ではないため大人数の収容は難しい状況です。今後の活用案として、100mほど離れた旧校舎（美利河小学校）体育館を改修し、特設展示場として整備する案を検討してきました。ただし、この案は施設の管理体制の面で課題があり、より隣接地に展示施設を新設する案も並行して検討しています。

本計画期間の中長期段階までには結論を出し、計画期間内で本化石にまつわるストーリーの効果的な情報発信、見学しやすい環境整備を図ります。

関連文化財群① 大型カイギュウがくらした地

方針1	効果的な情報発信
方針2	見学しやすい環境整備

関連文化財群② 旧石器時代の一大石器製作拠点・ビリカ遺跡

多くの調査成果が得られ、膨大な石器資料を有するビリカ遺跡ですが、その反面、基本的な整理や研究は停滞しています。大量にある未整理資料の中には、学術的に重要な資料の存在も指摘されているところです。現在進行形の丹念な再整理作業や個別の研究活動によって、当時の人々の暮らしをより豊かに復元できる資料と成果が蓄積されています。

今後計画的に調査を進めて研究成果を積み重ね、ビリカ遺跡を旧石器文化の発信拠点としていく必要があります。そのための調査研究を担う専門職員の安定的な確保と配置、定期刊行物等といった成果の発信媒体が必要です。

旧石器文化をテーマとした他地域とのストーリー展開は難しい状況ですが、近隣地域にも旧石器遺跡が複数あり、基礎的研究を進めながら近隣地域との情報交流を推進することが必要です。

令和2年（2021）7月、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されたことを受け、縄文文化や遺跡に興味関心をもつ人が増加しています。この機に、近隣地域に所在する縄文遺跡と連携し、「縄文以前」の世界、つまり旧石器文化への誘導を積極的に推進する必要があります。

縄文文化との違いを全面に打ち出し、史跡整備事業で再現した旧石器時代の植生景観や、縄文時代と比べてはるかに高度な石器製作技術など、ビリカ遺跡の魅力にふれる機会をつくることが重要です。

関連文化財群② 旧石器時代の一大石器製作拠点・ビリカ遺跡

方針1	旧石器文化の発信拠点へ
方針2	「縄文以前」の世界への誘導

関連文化財群③ 豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化

当町が有する鉱山文化に関わる構成資源は、他の地域にはない特有のものです。金に関しては、河床の「砂金」、台地の「柴金」、山中の「山金」の3種の採掘方法が同じ地域にあるという特徴があります。中でも江戸時代前期の稼働される美利河砂金採掘跡（柴金遺構）は遺存状態が良く、美利河ダム公園内の遊歩道沿いにあるため、徒步での周遊コースの一つとして、ビリカカイギュウ発掘地点との一体的な活用が望れます。ただし、高低差のある段差の解消や笹刈りなどの環境整備、解説板の整備など、見学利用を想定した相応の整備と案内ガイドの体制整備が必要です。

現在、本地域での砂金採掘体験は民間事業者が観光客を対象に行っていますが、地元の子どもたちほど体験していないのが実情です。今後、学校教育の教育課程に位置付けるなど、地域の子どもたちが町の歴史文化を体系的に学べる体制構築が必要です。

美利河マンガン鉱山から移設され、文化財保管・活用庫に収める一連の動力機械（エンジン・ポンプ類）は、当時の貴重な標本資料ですが、それらの詳細な調査は未着手のため、その価値付けを明確にする必要があります。またこうした機械類の中で、整備さえすれば動くものを整備するなど、生きた展示（動態展示）を実現できれば、稼働時の様子を臨場感もって再現できます。これは鉱山学習にとどまらない多面的な活用にもつながります。

近くの河川で今でも容易に採集できるマンガン鉱を活用した乾電池づくりの体験や、宝石の一種であるメノウを活用したアクセサリーづくりなど、地域住民や民間団体と連携し、本地域ならではの岩石・鉱物を活用した魅力ある体験メニューを開発し、ストーリーとしての歴史文化の魅力発信につなげることが必要です。

関連文化財群③ 豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化

方針1	子どもたちが学ぶしくみづくり
方針2	岩石・鉱物を活用した魅力の発信

関連文化財群④ キリスト教団体が入植した地

神丘地区に広がるキリスト教理想郷建設の精神や信仰文化を伝える構成資源は、全体として本地域ならではの独特の歴史文化を醸し出しています。

しかし、かつての町史編纂事業による把握調査は網羅的なものではなく、本地域の開拓史を具体的に知るには、少數の研究者によるわずかな調査研究成果を参照するほか手立てがありません。今後、地域住民の理解のもと、歴史文化資源を調査・収集し、それらの記録保存を

進めるとともに、その成果として、本地域の開拓史をわかりやすい媒体にして整備することが必要です。

本関連文化財群を象徴する歴史的建造物・今金インマヌエル教会には、町外から毎年安定した見学希望がある一方で、案内ガイドの体制としては非常に不安定な状況にあります。先述した媒体を基礎資料とし、講習会の開催等を通してボランティアガイドを養成することも今後の大切な取り組みとなります。

また、現教会は昭和43年（1968）の築造で所々に痛みが進行しており、管理を担う地元団体にとってその維持管理が重い負担となっています。本地域や町全体にとっての価値付けをより明確にするための建造物調査を早めに進め、適切な保存措置を講じることが必要です。

以上の方針に沿い、本関連文化財群をストーリーとして紐付けし、総合的な保存・活用を図ることとします。

関連文化財群④ キリスト教団体が入植した地

方針1	専門的調査と保存措置
方針2	ボランティアガイドの養成

第5章 歴史文化の保存・活用に関する措置

第1節 歴史文化の保存・活用に関する措置の概要

前章で掲げた基本理念と方針に沿い、課題解決に効果的と考える具体的な取組として、表5-1の通り17事業を設定し、目標の達成を目指すこととします。

また、8つ抽出した今金町の歴史文化のうち、優先的に調査・保存・活用を進めるとして設定した4つの関連文化財群については、それらの多面的な価値や魅力をわかりやすく伝える取組として7事業を実施することとします（表5-2の18～24）。

これら計24の事業は、導出の過程は異なりますが、関連性があり、部分的に重複しています。その関連性を明示化するため、表5-1では対応する関連文化財群の番号を記し、表5-2では関連する事業名を再掲しています。

表5-1 歴史文化の保存・活用に関する方針と措置

課題	方針	事業名(措置) ○数字は関連文化財群の番号
担い手の減少 高齢化 理解不足	守る	指定文化財の保存管理の推進 文化財保護意識の啓発 （ 文化財の防災・防犯事業 ）※第6章で記載
調査が不十分 職員体制 連携不足	調べる	文化財の掘り起こしと価値付けの推進 人員体制の強化 4 重要遺跡所在確認調査 5 ピリカ遺跡の専門的調査と報告書刊行 ② 6 マンガン鉱山の把握調査 ③ 7 カニカン岳金山跡の把握調査 ③ 8 ピリカカイギュウ化石の専門的調査 ① 9 歴史的建造物・民俗芸能の把握調査 ④
施設未整備 わかりづらい 受入体制	磨き上げる	ハード・ソフト両面での整備 わかりやすい形での洗練化 10 ピリカカイギュウ化石の特設展示場整備 ① 11 ピリカ遺跡に関する調査研究成果の活用 ② 12 フットバスコースの整備・周遊アプリの開発 13 マンガン鉱山・国鉄瀬棚線の再現展示 ③ 14 歴史文化を活かした観光活用 ③
学ぶ機会少ない 受入体制	育てる	学校教育との連携 実施できる体制整備 15 「ふるさと学習プログラム」の導入 16 定期的な講習会を通じたボランティア養成 17 子どもたちの参加機会の提供

表5-2 関連文化財群に関する方針と措置

関連文化財群名	方針	事業名(措置) * () 内は表5-1からの再掲
① 大型カイギュウが くらした地	1.効果的な情報発信	(12 フットバスコースの整備・周遊アプリの開発) (14 歴史文化を活かした観光活用)
	2.見学しやすい環境整備	18 産出地点案内板の整備 (10 ピリカカイギュウ化石の特設展示場整備)
② 旧石器時代の大 石器製作拠点・ビ リカ遺跡	1.旧石器文化の発信拠点へ	19 専門職員の安定的な配置と研究成果の発信 20 史跡ビリカ遺跡保存活用計画の更新 (5 ビリカ遺跡の専門的調査と報告書刊行) (11 ビリカ遺跡に関する調査研究成果の活用)
	2.「縄文以前」の世界への誘導	21 近隣の関連遺産等との交流・連携 (12 フットバスコースの整備・周遊アプリの開発)
	1.子どもたちが学ぶしくみづくり	(15 「ふるさと学習プログラム」の導入) (17 子どもたちの参加機会の提供)
③ 豊かな鉱物資源に より特徴付けられ る鉱山文化	2.岩石・鉱物を活用した魅力発信	22 北海道遺産として魅力を発信 (13 マンガン鉱山・国鉄瀬棚線の再現展示) (14 歴史文化を活かした観光活用)
	1.専門的調査と保存措置	23 文書史料や歴史的建造物の把握調査 24 建造物の保存措置
④ キリスト教団体が 入植した地	2.ボランティアガイドの養成	(16 定期的な講習会を通じたボランティア養成)

第2節 歴史文化の保存・活用に関する措置

前節表5-1で示した措置一覧について、以下の通り方針順に具体的な事業内容、計画期間内での実施時期、取組主体を明記し、計画的・組織的に取組を推進することとします。

なお、計画期間中に実施できない事項については、次期計画に繰り延べするなど、柔軟な対応を検討し進めます。

○方針「守る」に関わる措置

表5-3 方針「守る」に関わる措置の内容

事業名	事業概要																					
1 文化財の指定・登録	把握調査や専門家によって価値付けされた文化財は順次新規指定・登録を推進し、保存と活用を図る。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="3">計画期間</th> <th colspan="4">取組主体</th> </tr> <tr> <th>前期</th> <th>中期</th> <th>後期</th> <th>行政</th> <th>専門家</th> <th>団体</th> <th>町民</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">→</td> <td>◎</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	計画期間			取組主体				前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民	→			◎	○		
計画期間			取組主体																			
前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民																
→			◎	○																		
2 美利河砂金採掘跡の保存整備	安全に見学できるような環境整備、解説案内板を設置し、学校教育・社会教育両面での活用や観光活用を図る。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="3">計画期間</th> <th colspan="4">取組主体</th> </tr> <tr> <th>前期</th> <th>中期</th> <th>後期</th> <th>行政</th> <th>専門家</th> <th>団体</th> <th>町民</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">→</td> <td>◎</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> </tr> </tbody> </table>	計画期間			取組主体				前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民	→			◎	○	○	○
計画期間			取組主体																			
前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民																
→			◎	○	○	○																

3 「いまかね遺産」選定会議の開催	地域住民が選定過程に加わることで課題を共有し、地域の歴史文化を守る連携・協力体制を構築し、あわせて保護意識の啓発を図る。					
	計画期間			取組主体		
前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民
		→	○	○	○	○

※前期：令和4～6年度／中期：令和7～9年度／後期：令和10～12年度

※行政：町教委・連携課／専門家：大学・研究機関／団体：町内の支援団体・機関／町民：個人・町内会自治会

※○主体的に実施 ○協力して取り組む

〇方針「調べる」に関わる措置

表 5-4 方針「調べる」に関わる措置の内容

事業名	事業概要
4 重要遺跡所在確認調査	把握調査で確認された重要遺跡（チャシ跡、縄文遺跡等）の所在確認・試掘調査を実施し、今後の保存整備に向けた基礎資料とする。
	計画期間
	前期 中期 後期 行政 専門家 団体 町民
	→ ○ ○ ○ ○
5 ピリカ遺跡の専門的調査と報告書刊行	重要性が認識されながらも未解明の部分の調査を行い、遺跡の価値付けをより明確にする。未報告分の調査報告書を刊行して情報公開し、今後のさらなる研究や教育普及のための基礎資料とする。
	計画期間
	前期 中期 後期 行政 専門家 団体 町民
	→ ○ ○ ○ ○
6 マンガン鉱山の把握調査	専門家の指導助言のもと、鉱山現地での分布調査や文献調査、保管資料の調査を進め、鉱山の全容を把握し、教育普及・観光活用を図る。
	計画期間
	前期 中期 後期 行政 専門家 団体 町民
	→ ○ ○ ○ ○
7 カニカン岳金山跡の把握調査	採掘坑や露頭掘り跡、鉱山白散布域、挺点的作業場等、現地での所在確認調査や文献調査を実施して鉱山の全容を把握し、教育普及・教育利用の基礎とする。
	計画期間
	前期 中期 後期 行政 専門家 团体 町民
	→ ○ ○ ○ ○
8 ピリカカイギュウ化石の専門的調査	ピリカカイギュウ化石の専門的研究、価値付けを実現し、今後の普及啓発・教育利用の基礎とする。
	計画期間
	前期 中期 後期 行政 専門家 団体 町民
	→ ○ ○ ○ ○
9 歴史的建造物・民俗芸能の把握調査	寺社や民家等の歴史的建造物の調査で保存対象を把握し、併せて祭礼等の民俗芸能の悉皆調査をし、その由来や失われたものを把握する。
	計画期間
	前期 中期 後期 行政 専門家 団体 町民
	→ ○ ○ ○ ○

※前期：令和4～6年度／中期：令和7～9年度／後期：令和10～12年度

※行政：町教委・連携課／専門家：大学・研究機関／団体：町内の支援団体・機関／町民：個人・町内会自治会

※○主体的に実施 ○協力して取り組む

○方針「磨き上げる」に関わる措置

表 5-5 基本方針「磨き上げる」に関わる措置の内容

事業名		事業概要								
10	ピリカカイギュウ化石の特設展示場整備	産出地点の解説板を改修とともに、実大復元模型や町内産の貝化石等の展示場をわかりやすい形で整備し、教育普及・観光活用画面での活用を図る。施設整備の方向性については、中期段階までに協議、決定する。			計画期間			取組主体		
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民		
				→	○	○	○	○		
11	ピリカ遺跡に関する調査研究成果の活用	蓄積した調査研究の成果を公開セミナーの開催等を通して地域住民に還元するとともに、研究機関や専門家の行う研究活動の支援や連携協力を通して、遺跡の価値付けをさらに磨き上げる。						計画期間		
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民		
				→	○	○	○	○		
12	ピリカフットバスコースの整備・周遊アプリの開発	美利河地区にある多様な文化財を周遊できるコースを整備し、教育利用と観光活用を図る。ピリカプロジェクト委員会の取組を継承し、技術開発は大学等の研究機関や専門家と連携し、内容を洗練化する。						計画期間		
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民		
				→	○	○	○	○		
13	マンガン鉱山・国鉄瀬棚線の再現展示	マンガン鉱山全景のジオラマ制作や、貴重な動力機械を活用した再現展示等に取り組み、稼働時の様子を臨場感もって伝えられるよう整備する。瀬棚線開通の資料収集を推進し、展示会等を通して鉄道の果たした功績を後世に伝える。事業は地元爱好者団体と連携する。						計画期間		
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民		
				→	○	○	○	○		
14	歴史文化を活かした観光活用	砂金関連やマンガン鉱山等の産業遺産を北海道遺産に申請し、選定を目指す（令和4年10月発表）。関係課・関係機関と連携して、町外の関連遺産等とつながる周遊ルートを設定し、観光活用を図る。						計画期間		
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民		
				→	○	○	○	○		

※前期：令和4～6年度／中期：令和7～9年度／後期：令和10～12年度

※行政：町教委・連携課／専門家：大学・研究機関／団体：町内の支援団体・機関／町民：個人・町内会自治会

※○主体的に実施 ○協力して取り組む

○方針「育てる」に関わる措置

表5-6 基本方針「育てる」に関わる措置の内容

事業名		事業概要						
15	「ふるさと学習プログラム」の導入	学校教育の課程の中に体験プログラムを学年に応じて組み込み、町の歴史文化を学べるしきみを導入する。義務教育を修了したときにはすべての子どもたちが今金町の歴史文化を知ることができるよう、関係機関と連携をとり、受入態勢を整備する。						
		計画期間			取組主体			
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民
16	定期的な講習会を通じたボランティア養成	講習会を通じてボランティアガイドを要請し、歴史文化の保存と継承を図る。既存の団体や興味関心ある人を積極的に呼び込むとともに、行政が活動支援を行い、運営の円滑化を図る。						
		計画期間			取組主体			
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民
17	子どもたちの参加機会の提供	史跡整備や重要遺跡の把握調査、専門家による現地調査等、可能な範囲で調整し、地元の子どもたちが現地を肌で感じられる見学・参加機会を設け、郷土の歴史や文化に興味関心をもつきっかけとする。						
		計画期間			取組主体			
		前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民

第3節 関連文化財群の保存・活用に関する措置

第1節表5-2で示した措置一覧について、以下の通り具体的な事業内容、計画期間内での実施時期、取組主体、費用負担について記載します。前節と重複する措置については、記載を省略します。費用負担については、町費・道費・国費、その他の民間資金等を活用し、国費については、文化財補助金・地方創生推進交付金等を活用することとします（表5-6）。

表5-6 関連文化財群の保存・活用の措置

関連文化財群① 大型カイギュウがくらした地に関する措置内容		
18 産出地点案内板の整備	化石産出状況の復元展示や、デジタル技術を活用した再現等を通して、当時この地でビリカカイギュウが暮らしていた様子をよりわかりやすい形で伝え、教育普及・観光活用に役立てる。	実施期間：前期 取組主体：町 費用負担：国
関連文化財群② 旧石器時代の大石器製作拠点・ビリカ遺跡に関する措置		
19 専門職員の安定的な配置と研究成果の発信	調査研究を担う専門職員の安定的な確保と配置、成果の発信媒体（館報等の定期刊行物）の定期発行、シンポジウムやセミナーの開催等を通して、ビリカ遺跡を旧石器文化の発信拠点とする。	実施期間：全期間 取組主体：町 費用負担：町
関連文化財群③ 史跡ビリカ遺跡保存活用計画の更新		
20 史跡ビリカ遺跡保存活用計画の更新	これまでの史跡整備の評価と今後の在り方について幅広い視野から審議し、これから時代の望ましい保存活用計画を作成する。	実施期間：中期 取組主体：町 費用負担：国
関連文化財群④ 近隣の関連遺産等との交流・連携		
21 近隣の関連遺産等との交流・連携	近隣地域との情報交流（見学交流や研修会の開催等）、観光業者とタイアップしたツアーを企画するなど、ビリカ遺跡の魅力にふれる機会をつくる。	実施期間：全期間 取組主体：町・団体 費用負担：町
関連文化財群⑤ 豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化に関する措置		
22 北海道遺産として魅力を発信	本関連文化財群にまつわるストーリーをNPO法人北海道遺産協議会が運営する北海道遺産に申請して選定を目指し（申請中）、遺産の魅力を広く発信する。他の関連資産と連携を図り、観光活用を図る。	実施期間：全期間 取組主体：町・団体 費用負担：民間
関連文化財群⑥ キリスト教団体が入植した地に関する措置		
23 文書史料や歴史的建造物の把握調査	資料を調査・収集し、記録保存を進め、本地域の開拓史をわかりやすい媒体として整備する。また、今金インマヌエル教会の基礎的な建造物調査を実施し、価値付けを明確にする。	実施期間：前期 取組主体：町・町民 費用負担：町
24 建造物の保存措置	建造物の管理を担う地域団体と協議し、早期に補修が必要な箇所がある場合には、適切な保存措置を講じる。	実施期間：前期 取組主体：町・町民 費用負担：国

※前期：令和4～6年度／中期：令和7～9年度／後期：令和10～12年度

※町：町教委・連携課／団体：町内の支援団体・機関／市民：個人・町内会自治会

第6章 歴史文化の保存・活用の推進体制

第1節 町の推進体制

令和3年10月現在の今金町の文化財保護に関する体制は表6-1の通りです。文化財保護に関する業務は今金町教育委員会事務局社会教育グループが所管し、事務所は役場庁舎に所在しています。専門職員は学芸員1名で、役場庁舎に常駐しながら所管施設の史跡ガイダンス施設および文化財収蔵庫の管理運営を担当しています。

社会教育グループの各分野にはそれぞれ社会教育主事や図書館司書、外国人英語指導者等の専門職が在籍し、すでに学芸員と連携し、各年代層に応じた幅の広い教育・普及事業を実施しています。所管施設の詳細については、第1章第2節(23頁)に記載の通りです。

文化財保護業務と関係の深い町史編纂等の業務については、今金町まちづくり推進課企画政策グループが所管し、事務所は役場庁舎および文書管理センターに所在しています。町史編纂業務は再任用職員、会計年度任用職員各1名の体制で担当しています。

表6-1 今金町の文化財保護の体制（令和3年10月現在）

所管課
今金町教育委員会事務局社会教育グループ 業務内容：社会教育、文化振興、図書振興、国際交流、文化財保護、スポーツ振興 等 職員体制：職員8名（正規5名、会計年度任用職員3名）うち文化財保護担当（正規・学芸員）1名
所管施設
ビリカ旧石器文化館（史跡ビリカ遺跡ガイダンス施設） 主な機能：国史跡、国指定重要文化財の保存・管理、公開・活用、教育普及、体験学習 職員体制：1名（会計年度任用職員） 文化財保管・活用庫（文化財収蔵庫） 主な機能：町指定文化財、埋蔵文化財、その他の文化財の保存・管理 職員体制：なし（ビリカ旧石器文化館の職員が兼ねる） 今金町民センター図書室 主な機能：図書貸出、リファレンス、地域資料の保管管理 職員体制：2名（会計年度任用職員2名）
地方文化財保護審議会
今金町文化財保護委員会 審議事項：文化財の保存・活用に関する主要事項 委員構成：6名（遺跡ボランティアの会、郷土史研究団体、警備会社、文化団体、観光施設等）
庁内の連携課・関係課
教育委員会事務局学校教育グループ まちづくり推進課企画政策グループ まちづくり推進課まちひと交流グループ 公営施設課管理グループ くらし安心課防災・住民生活グループ 農林振興課耕地林務グループ 今金消防署 主な業務内容 学校教育、就学援助、子育て支援、特別支援教育 等 総合戦略、町史編纂、公文書管理、国勢調査 等 観光振興、移住・定住促進、ふるさと納税 等 都市計画、施設整備、景観形成 等 防犯、防災、空き家対策 等 耕地開発、鳥獣保護 等 危機管理、防災、救急対応

町内の関係団体・機関等	関係する取組
ビリカ遺跡ボランティアの会	環境美化、催事運営、体験指導、展示解説、記念品販売等
今金町歴史をたどる会	郷土史研究、史料の収集、普及啓発、ご当地検定
NPO 後志利別川清流保護の会	河川清掃活動等を通じた後志利別川の環境保全
大型紙芝居 じゃがいもの花	郷土史、昔話等の大型紙芝居の制作、公演活動による普及啓発
ビリカプロジェクト委員会	美利河地区の歴史文化の多面的活用、地域活性化
今村公園再生プロジェクト	開拓創始家・今村邸および今村公園の整備・活用
今金町内会自治会連合会	歴史文化の情報提供、住民周知、協働体制、防火・防犯体制
今金町観光協会	歴史文化を活用した観光イベントの企画・運営
今金町農業協同組合	特産品を活用した食文化の啓発 等
今金町校長会	町立学校での「ふるさと学習プログラム」の導入推進 等
今金町立各学校	郷土資料の展示、赤川版画作品の保存・管理・展示 等
北海道今金高等養護学校	生徒による地場産品・歎物を活用した商品開発・販売 等
今金町安全で住みよい町づくり協議会	生活安全、防犯・防災情報の共有、青少年健全育成 等
都道府県・大学・調査組織・連携組織 等	関係する取組
北海道教育委員会文化財・博物館課	北海道文化財保存活用大綱
北海道教育大学岩見沢校	調査研究 等
北海道教育大学函館校	調査研究 等
札幌国際大学	観光活用 等
財団法人 北海道埋蔵文化財センター	調査研究 等
北海道産業遺産学会	調査研究 等
北海道博物館協会	文化財施設間・専門職員間の連携 等
北海道博物館協会学芸職員部会	専門職員の資質向上研修
道南プロック博物館施設等連絡協議会	デジタル文化財マップ「南北海道の文化財」の運用
北海道縄文のまち連絡会	観光活用 等

本地域計画を円滑に推進するためには、第一に文化財保護を担当する専門職員を安定的に配置し、人員体制を強化することが必要です。特に当町は国指定史跡ビリカ遺跡を有し、その保存・活用は最重要課題の一つです。関連文化財群の措置として掲げた旧石器文化の発信拠点とするための取組や史跡ビリカ遺跡保存管理計画の更新等を推進するためには、専門性を有する学芸員の配置が必須です。それとともに、社会教育グループ内での連携をより密にし、様々な社会教育事業とタイアップすることで、事業効果を高める必要があります。また、学校教育グループとも情報共有し、所管課全体で共通認識を図る必要があります。

また、歴史文化の観光活用の分野では、連携課・関係課との情報共有および連携の円滑化が欠かせません。町内の民間団体や専門家、大学等の研究機関、連絡協議会組織、地域住民等の理解と協力を得るなど、これまで以上に横の連携を強め、幅広く効果的に事業を実施することが求められます（図 6-1）。



図 6-1 今金町の推進体制

第 2 節 町民・住民団体との連携体制

○連携体制の構築

当町には文化財保護や自然保護に関わる住民団体として、前節に記載の各団体があり、それぞれの設立趣旨に沿い熱心な活動がなされ、歴史文化の保存・活用、普及、地域振興に貢献しています。

本地域計画の実現のためには、現在活動中の各団体との連携が必要不可欠です。各団体がそれぞれの得意分野で個別に事業を推進するだけでなく、場合によっては連携することで、より大きな力になることが期待できます。

本地域計画では、今金町の歴史文化の一つとして位置付けた「いまかね遺産」の網羅的な把握、情報収集と選定を地域住民の手で行うこととしています（序章参照）。

今後、団体間の横断的な連携体制「いまかね遺産選定会議」を設置し、情報の共有化を図るとともに、これに幅広い町民や関係機関の参加を求め、地域ぐるみで地域計画の目標達成を目指すこととします（図 6-2）。



図 6-2 いまかね遺産選定会議の構成図

○「いまかね遺産」選定の進め方

今金町では令和3年度（2021）から、地域の中で大切にされている「もの」や「こと」、今金町に根差し、今金町の特徴を表すものを「いまかね遺産」とし、その候補を広く町民から募集しています。また、「いまかねお宝鑑定会」と題し、資料や情報の掘り起こしと専門家によるそれらの価値付けを行っています。

町民から寄せられたこれらの「今金町の歴史文化」の中には、第3章で示した各関連文化財群に関わるものその他、新しい「今金町の歴史文化」の発見につながっています。

「いまかね遺産選定会議」は、こうした掘り起こしと価値付けを町民自らの手で行い、それらの中から町民にとって大切なものを「いまかね遺産」として選定する組織です。

この選定過程にあたっては、必要に応じて、有識者等からなる組織「今金町文化財保存活用地域計画協議会（仮称）」（第4節参照）に照会し、価値付けやその後の活用方策の参考意見をいただくこととします。

第3節 文化財の防災・防犯体制

○防災体制

令和元年度改訂の「今金町地域防災計画」では、文化財を所管する教育委員会が防災対策に努め、文化財の所有者に対しては、平常時における災害予防と災害時における文化財の保全方法について定期的に連絡をとり、確認することとしています。

近年、全国各地で文化財の火災被害や地震被害が頻発している状況から、その対策の重要性が高まっています。文化庁が定めた「国宝・重要文化財（建造物）の防火対策ガイドライン」および「国宝・重要文化財（有形文化財）を保管する博物館等の防火対策ガイドライン」に準拠し、チェックリストを活用して、町民の防火・防災意識の啓発に努めます。

特に当町は、開拓期より後志利別川の洪水災害が頻繁に繰り返されてきた歴史があり、治水施設が整備されているとはいえ、平常時から水防区域（ハザードマップ）を把握し、予防対策に努める必要があります。また、町内には地すべり・崖崩れ危険区域が23か所、急傾斜地崩壊危険区域が6か所、土石流危険渓流が6か所あり、これらに対する警戒意識を高める必要があります。これらのことから、文化財に特化した「文化財ハザードマップ」を作成し、状況把握と意識啓発に努めることとします。

洪水・火災・地震等の総合的な防災体制としては、「文化財危機管理マニュアル」を新たに作成することとし、今金消防署、せたな警察署、防災担当課（くらし安心課）、文化財所有者との連携体制を強化し、平常時から情報共有を図り、緊急連絡網の整備や避難訓練の定期実施に努め、災害時の文化財レスキューの体制を構築します。

外部との連携については、「北海道文化財保存活用大綱」に基づき、防災の取組や災害発生時の対応、復旧方針について、北海道と連携して取り組むこととします。

また、展示施設や収蔵庫等で保存する文化財に対する獣害や生物被害（虫害・カビ被害等）を防ぐため、「文化財の生物被害防止ガイドブック」（東京文化財研究所）に基づき、文

化財IPM（総合的有害生物管理）の考え方を取り入れ、日常的に文化財に対する管理の目を行き届かせ、適切な保存環境の維持に努めることとします。

○防犯体制

当町で唯一の国指定重要文化財・ビリカ遺跡出土品については、その収蔵施設の開設時から係員による日常的な目視点検をはじめ、夜間や休館期間といった無人時の防犯体制として機械警備を導入し、万が一の事態に備えています。しかし、それ以外の町指定文化財や未指定文化財等については、そこまでの体制をとることは実質的に難しい状況です。国および町指定史跡区域内の保全に関し、町有地については学芸員が定期的に見回りを行い、私有地については所有者に年1回連絡をとり、禁止行為の確認等を行っているところです。

今後も文化財を盗難や毀損等から守るため、文化庁が平成27年（2015）4月に通知した「文化財の防犯対策について」に基づき、定期的な見回りやパトロールの実施、連携体制の強化に努めることとします。この運用には、今金町が設置し、定期開催する防犯連絡協議会「今金町安全で住みよい町づくり協議会」の場で警察署等が提供する最新情報を共有し、地域住民とともに協力して取り組むこととします。

また、町が管理する文化財施設内では、施錠管理の徹底はもとより、防犯カメラの設置を進め、犯罪抑止に努めることとします。防犯カメラの運用は「今金町防犯カメラの設置及び運用に関するガイドライン」（平成31年4月制定）に準ずることとします。

なお、当町では無住人化した家屋や管理されない倉庫が急速に増加しており、そうした建物内には今金町の歴史文化に関わるものがないとは限りません。住宅の無住人化や建物の解体等について、関係課（くらし安心課）や住民団体と連携して情報把握に努めるとともに、個人では管理できなくなった文化財に対する保存体制づくりに努めます。

以上の取組を整理したものが表6-2で、いずれも計画期間の令和7年度（2025）の中間評価時までに作成・体制構築に努めることとします。

表6-2 文化財の防災・防犯事業

事業名	事業概要		
1 文化財ハザードマップの作成	防災所管課や地域住民と連携し、各地域に所在する文化財をとりまく危険箇所の状況把握と防災の意識啓発を図る。		
	時期：令和7年度まで	取組主体：町・団体	費用負担：町
2 文化財危機管理マニュアルの作成	大規模災害に備え、平常時の防災活動を明示化し、災害時の連絡体制と文化財レスキューの体制を構築する。		
	時期：令和7年度まで	取組主体：町・団体	費用負担：町
3 文化財の適切な保存環境の維持	文化財IPMの考え方を取り入れ、日常的に文化財に対する管理の目を行き届かせ、適切な保存環境の維持に努める。		
	時期：全期間	取組主体：町	費用負担：町
4 指定文化財の防犯体制の強化	これまでの防犯体制の取組をより強化するとともに、防犯カメラの設置を促進し、犯罪抑止を図る。		
	時期：全期間	取組主体：町・団体	費用負担：町

※町：教育委員会・連携課／団体：町内会自治会の防犯・防災組織等

第4節 計画の進行管理

当地域計画の推進および進行管理にあたっては、計画作成の際に設置した今金町文化財保存活用地域計画策定委員会に必要な団体・機関等を加え、文化財保護法第183条の9に定める協議会として、「今金町文化財保存活用地域計画協議会（仮称）」（以下、協議会）を設置し、その推進組織として位置付けます。

協議会は年1回程度開催し、当計画の掲げる取組の進捗状況を年度ごとに報告、点検評価等を行い、進行管理を行うこととします。

なお、当地域計画は総合計画の策定期間と歩調を合わせていていることから、前期4年と後期5年の2期に区分し、前期4年目の令和7年度（2025）に中間評価、後期5年目の令和12年度（2030）に総合評価を行い、それぞれ当協議会において必要な見直し・修正を加えるものとします。また、最終年度の令和12年度（2030）に、当協議会において総合評価を踏まえた次期計画を作成し、文化庁長官の認定を受けるものとします（図6-3）。



図6-3 今金町文化財保存活用地域計画の進行管理

資料編

資料1 令和3年度把握調査の内容一覧

○把握調査協力者一覧（町内の団体・個人協力者を除く）

※所属・役職等は令和3年度現在

氏名	所属	調査分野
紀藤 典夫	北海道教育大学函館校国際地域学科教授	地質
小林 孝二	NPO 法人歴史的地域資産研究機構技術専門員	建造物
千葉 里美	札幌国際大学観光学部教授	観光
山田 大隆	北海道産業遺産学会会長	産業遺産
長沼 孝	北海道埋蔵文化財センター理事長	考古
能條 歩	北海道教育大学岩見沢校教授	地質
宮塚 義人	宮塚文化財研究所所長	考古
古澤 仁	札幌市博物館活動センター学芸員	地質
小松 美鈴	甲斐黄金村・湯之奥金山博物館学芸員	考古

○把握調査の概要一覧

項目	現地調査の主な内容
重要遺跡	ビリカ遺跡 景観復元の現況を確認し、今後の整備や研究上の課題への方針を検討した。
	美利河砂金採掘跡 一連の遺構の価値付けを明確にし、今後の整備方針を検討した。
	カニカン岳金山跡 現地踏査し、各遺構の今後の調査方針を検討した。鉱山臼の評価を確認した。
	チャシ跡可能性地 可能性地を流域沿いに複数か所確認し、今後の調査方針を検討した。
	神丘5遺跡 現況地形や遺物散布状況を確認し、今後の調査方針を検討した。
産業遺産	美利河マンガン鉱山 鉱山跡の現地踏査を実施し、構築物の残存状況を確認した。関連資料の価値付けと今後の保存活用方策を検討した。
	旧メノウ加工施設 施設内の現況を確認し、残された加工工具類や原石の今後の活用方策を検討した。
	農業用水路 初代頭首工水門（住吉地区）を現地踏査し、保存活用方策を検討した。個人事業による隧道の現況を確認し、価値付けを行った。
	農協倉庫群 倉庫群を巡見して全体的な把握に努めた。
	国鉄漁棚線 線路跡や駅跡地等の今後の活用方針、資料収集方針を検討した。
建造物	公共建築・民家系 民家、畜舎、倉庫、地区会館等の全体把握に努め、一部価値付けを行った。
	宗教建築系 教会、寺、神社、祠についての全体把握に努め、一部価値付けを行った。
地質・化石	ビリカカイギュウ化石 価値付けを確認し、今後の保存・活用方策を検討した。化石産出地点の現況を確認し、今後の活用方策を検討した。
	標式露頭 町内の代表的な標式露頭を確認し、価値付けを明確にした。
	化石産出地 代表的な貝化石産出地を確認し、今後の活用方策について検討した。
	岩石・鉱物 岩石標本作り教室の開催と合わせて、安全に採取しやすい地点を確認した。
町民委嘱調査	聞き取り調査 「いまかね遺産」の募集、町民文化祭での「いまかねお宝鑑定会」の開催により資料の掘り起こしを行った。結果、情報提供 13 件、資料 20 点の寄贈を受けた。
	歴史的建造物調査 計画策定委員からの情報収集、町内回覧での協力依頼、自治会単位での聞き取り調査等を行い、歴史的建造物の位置情報を把握し、現地調査の基礎資料とした。
	資料収集活動 今金町文化財保護委員会として、情報・資料収集活動に協力いただいた。

資料2 今金町の歴史文化資源一覧

※指定等文化財を除く。令和4年3月現在

○有形文化財

建造物(寺院・神社・教会)

※民家・畜舎・倉庫・公共建築系については把握調査中のため掲載していません

No.	名称	所在地	創建(現存建造物建築年)	備考
1	美利河八幡神社	美利河	明治40年以前(昭和57)	北海道形神明造
2	黄金神社	花石	明治44年(不詳)	切妻平入、向拝付
3	鷦鷯寺	花石	明治41年(昭和9)	
4	中里神社	中里	明治37年(不詳)	覆堂は流造風
5	真宗大谷派中里教会	中里	大正7年(不詳)	
6	男山八幡宮	住吉	明治37年(昭和16)	社殿を入母屋造とし、平面の大屋根を向拝として平入の前面に流す形式で上質
7	種川氷川神社	種川	明治30年(昭和35)	北海道形神明造
8	天理教種川分教会	種川	昭和21年頃(昭和51)	
9	種川神社	奥種川	明治37年(不詳)	覆堂は流造風
10	南山大神宮	田代	明治34年(不詳)	
11	相川神靈教会今金教会	田代	(未調査)	
12	尊教寺	田代	明治44年(昭和51)	
13	今金八幡神社	今金	明治29年(昭和27)	北海道形神明造
14	豊藏神社	今金	大正後期(昭和32)	流造形式。内部に小祠が祀られ、上質な造作で貴重
15	鳥獸神社	今金	昭和47年(昭和47)	一間社流造の小祠で、伝統的な形式
16	法林寺	今金	明治30年(昭和5)	
17	普濟寺	今金	明治28年(昭和54)	
18	隆惣寺	今金	昭和8年(不詳)	
19	教願寺	今金	明治36年(昭和24)	
20	日本キリスト教团利別教会	今金	(未調査)	
21	天理教利別分教会	今金	明治36年(不詳)	
22	天理教今金分教会	今金	大正10年(昭和14)	
23	光台神社	光台	明治37年(不詳)	一間社流造の上質な小祠。背後の御神木と相まって豊かな景観を形成する
24	神丘神社	神丘	明治32(不詳)	北海道形神明造
25	日本聖公会今金イマヌエル教会	神丘	明治29年(昭和43年)	浜島国四郎設計(函館ヨハネ教員)
26	弁財天	神丘	大正初期(不詳)	
27	秋葉神社	鈴岡	明治32年(不詳)	北海道形神明造
28	八束八幡神社	八束	明治29年(昭和5)	北海道形神明造
29	鹽竈神社	鈴金	明治36年以前(不詳)	一間社流造の小祠
30	金原神社	金原	明治31年(大正14)	北海道形神明造
31	豊田神社	豊田	明治34年(昭和40)	北海道形神明造
32	日進神社	日進	明治44年(大正6)	北海道形神明造

建造物(近代化遺産)

No.	名称	所在地	現存建造物建築年	備考
1	旧住吉頭首工水門および用水路	住吉	大正11年	用水路の大半は現在使用中
2	パン坂隧道	住吉	昭和3年	個人敷設による約160mの農業用隧道
3	美利河ダムおよび魚道	美利河	平成3年	ダムは日本土木学会技術賞受賞
4	農協倉庫群	今金	昭和20~50年代	現在使用中
5	土蔵	今金	昭和14年	現在使用中

彫刻

No.	種別	名称	所在地	所有者・管理者
1	石造物	瀬棚線鉄道工事殉難者慰靈碑	美利河 トンネル付近	
2	石造物	水没記念碑	美利河 ダム敷地内	国
3	石造物	馬頭観音	美利河 墓地敷地内	自治会
4	石造物	馬頭観世音	花石	自治会

5	石造物	忠魂碑	花石 黄金神社境内	自治会
6	石造物	地崎組鉄道工事殉職者之碑	花石 瑞福寺敷地	
7	石造物	馬頭観世音菩薩	中里 中里神社境内	自治会
8	石造物	子守地蔵尊	住吉 男山八幡宮参道	自治会
9	石造物	住吉開基百七年 男山八幡宮御鎮座百年記念碑	住吉 男山八幡宮境内	自治会
10	石造物	馬頭観世音菩薩	住吉 男山八幡宮境内	自治会
11	石造物	牛魂碑	住吉 男山八幡宮境内	自治会
12	石造物	安産地蔵尊	稲穂	自治会
13	石造物	種川開基百年記念碑	種川 構造改善センター前	自治会
14	石造物	種川地区農業構造改善事業竣工 20年記念碑	種川	自治会
15	石造物	記念碑	種川 松川神社鳥居付近	自治会
16	石造物	藤倉翁頌徳碑	種川 松川神社鳥居付近	自治会
17	石造物	南山大神宮御鎮座・金又地区発祥百年記念碑	田代	自治会
18	石造物	馬頭観世音菩薩	田代 南山大神宮鳥居付近	個人
19	石造物	馬頭観世音菩薩	田代 青木の高台	自治会
20	石造物	馬頭観世音菩薩	田代 相川神聖教院敷地	自治会
21	石造物	服部綱太郎頌徳碑	金原 金原神社境内	自治会
22	石造物	鈴木幾太郎翁記念碑	金原 金原神社境内	自治会
23	石造物	相馬神社	金原 金原神社境内	自治会
24	石造物	馬頭観音	金原 金原神社境内	自治会
25	石造物	後藤寅之助頌徳碑	金原 旧金原小学校庭脇	自治会
26	石造物	金原開基百年記念碑	金原 構造改善センター前	自治会
27	石造物	金原明善翁・鈴木幾太郎翁之頌徳碑	金原 構造改善センター前	自治会
28	石造物	馬頭観音	金原 個人	
29	石造物	今金町 100年記念碑	今金 町	
30	石造物	延命地蔵尊	今金 今金橋北岸	
31	石造物	本間訓導之碑	今金 総合公園内	町
32	石造物	相馬神社	今金 今金八幡宮境内	市民有志
33	石造物	水田開発記念碑	今金 今金八幡宮境内	土地改良区
34	石造物	木瀬謝恩塔	今金 今金八幡宮境内	
35	石造物	忠魂碑	今金 今金八幡宮境内	町・団体
36	石造物	今村藤次郎頌徳碑	今金 今金八幡宮境内	町
37	石造物	浅田村長治表彰記念碑	今金 今金町民センター前	町
38	石造物	登満酒農事組合創立 50周年記念碑	神丘 登満酒会館脇	自治会
39	石造物	相馬神社	神丘 神丘神社境内	自治会
40	石造物	荻野吟子歌碑	神丘 インマスエル教会前	
41	石造物	今金町開拓発祥之地 インマスエル之丘	神丘 インマスエル教会前	教会
42	石造物	大越鉢吉入植記念碑	神丘 旧神丘小学校前	教会
43	石造物	神丘開基百年記念碑	神丘 旧神丘小学校前	自治会
44	石造物	神丘発祥之地	神丘	自治会
45	石造物	地蔵尊	神丘 墓地南側	自治会
46	石造物	地蔵尊	神丘 墓地北側	自治会
47	石造物	慰靈碑	神丘 墓地敷地内	個人
48	石造物	鈴岡開基百年記念碑	鈴岡 鈴岡会館前	自治会
49	石造物	金原明善翁・鈴木幾太郎翁之頌徳碑	鈴岡 鈴岡会館前	自治会
50	石造物	瀬鍋津比賣神	鈴岡	自治会
51	石造物	目名川左岸水利組合 70周年記念碑	鈴岡	水利組合
52	石造物	道営園場整備事業・道営灌漑排水事業完工記念碑	八東 八東八幡神社境内	期成会
53	石造物	八東開基百年記念碑	八東 八東八幡神社境内	自治会
54	石造物	八東開基八十年記念碑	八東 旧八東小学校	自治会
55	石造物	利別村鈴木農場記	八東 西の台	自治会
56	石造物	白石開基百年記念碑	白石 白石寿の家前	自治会
57	石造物	白石開拓記念碑	白石 白石寿の家前	自治会

58	石造物	馬頭観音	白石	個人
59	石造物	馬頭観音	鈴金 塩竈神社	自治会
60	石造物	馬頭観音	豊田 豊田神社境内	自治会
61	石造物	豊田開基百年記念碑	豊田 豊田神社境内	自治会
62	石造物	開拓記念 西田元吉翁	豊田 豊田神社境内	自治会
63	石造物	馬頭観世音	日進 日進寺の家前	個人
64	石造物	日進開基七十周年記念碑	日進 日進神社境内	自治会
65	石造物	日進開基百年記念碑	日進 日進神社境内	自治会
66	石造物	日進開基五十周年記念碑	日進 日進神社境内	自治会
67	銅像	安部義雄氏之像	今金 今金町民センター前	町
68	木碑	牛頭大明神	中里 中里神社境内	自治会
69	木碑	第四利別簡易教育所跡碑	八束 西の台	自治会
70	石像	オシコの石仏	美利河 保管・活用庫内	町
71	木彫	丸山要次郎作の彫像	神丘	個人

絵画(赤川勲版画作品)

※所有者はすべて今金町　※写真付き収蔵品目録は町教委 HP で公開中

No.	版画種	作品名	原作者名	額の規格		所在地
				縦	×	
1	銅版画	スペインの少女	相笠昌義	52	×	51 cm 今金中学校
2	銅版画	マドリッドの子ども達・冬	相笠昌義	51	×	66 cm 今金中学校
3	銅版画	マドリッドの子ども達・夏	相笠昌義	50	×	60 cm 今金中学校
4	銅版画	姉妹団	相笠昌義	48	×	40 cm 今金中学校
5	石版画	たけくらべ	相笠昌義	66	×	51 cm 今金中学校
6	石版画	朝	A. ミュシャ	55	×	70 cm 今金中学校
7	石版画	風蕭る	池田透郭	58	×	80 cm 今金中学校
8	石版画	夕映え	池田透郭	80	×	60 cm 今金中学校
9	石版画	牛	石川忠一	56	×	45 cm 今金中学校
10	石版画	明けゆく里	岩澤重夫	57	×	76 cm 今金中学校
11	石版画	滙(夏)	岩澤重夫	45	×	57 cm 今金中学校
12	石版画	滙(秋)	岩澤重夫	57	×	76 cm 今金中学校
13	石版画	牡丹と塔	岩澤重夫	63	×	71 cm 今金中学校
14	石版画	耶馬溪(毎月)B.A.T	岩澤重夫	63	×	80 cm 今金中学校
15	石版画	耶馬溪(毎月)E.A	岩澤重夫	69	×	80 cm 今金中学校
16	石版画	緑萼	岩澤重夫	63	×	80 cm 今金中学校
17	石版画	金太郎	岩田正巳	64	×	56 cm 今金中学校
18	石版画	鳥と花	岩田正巳	71	×	64 cm 今金中学校
19	石版画	花と鳥	岩田正巳	75	×	63 cm 今金中学校
20	石版画	ばら	岩田正巳	63	×	52 cm 今金中学校
21	石版画	鶴	岩橋英遠	67	×	73 cm 今金中学校
22	石版画	桜	上村淳之	64	×	71 cm 今金中学校
23	石版画	すみれ	上村淳之	64	×	71 cm 今金中学校
24	石版画	那智(夏)	上村淳之	69	×	61 cm 今金中学校
25	石版画	花鳥	上村松葦	61	×	75 cm 今金中学校
26	石版画	胡琴鳥	上村松葦	64	×	71 cm 今金中学校
27	石版画	春野	上村松葦	60	×	73 cm 今金中学校
28	石版画	富士	大島祥丘	63	×	71 cm 今金中学校
29	石版画	牡丹	大島祥丘	64	×	71 cm 今金中学校
30	石版画	舞い	大島祥丘	71	×	64 cm 今金中学校
31	石版画	海辺の少女	大津英敏	73	×	66 cm 今金中学校
32	石版画	花影	大森運夫	64	×	71 cm 今金中学校

33	石版画	鯉と紅葉	大山忠作	56	×	64	cm	今金中学校
34	石版画	彩鯉	大山忠作	67	×	78	cm	今金中学校
35	石版画	双鶴	大山忠作	54	×	62	cm	今金中学校
36	石版画	三色すみれとナナカマド	岡 麟之助	71	×	64	cm	今金中学校
37	石版画	実花図	岡 信孝	62	×	74	cm	今金中学校
38	石版画	神護寺の秋	岡 信孝	64	×	71	cm	今金中学校
39	石版画	鯉	奥村土牛	63	×	80	cm	今金中学校
40	石版画	富士	奥村土牛	64	×	71	cm	今金中学校
41	銅版画	猫	落合洋子	56	×	45	cm	今金中学校
42	石版画	安達ヶ原	小山 硬	37	×	45	cm	今金中学校
43	石版画	海鶴	小山 硬	37	×	45	cm	今金中学校
44	石版画	孔雀	小山 硬	57	×	76	cm	今金中学校
45	石版画	富士 1	小山 硬	67	×	78	cm	今金中学校
46	石版画	富士 2	小山 硬	37	×	45	cm	今金中学校
47	石版画	うるわしき佳き日	加倉井和夫	71	×	86	cm	今金中学校
48	石版画	奏鳥	加倉井和夫	56	×	66	cm	今金中学校
49	石版画	麗日	加倉井和夫	56	×	66	cm	今金中学校
50	石版画	ウニと積木	笠井誠一	48	×	60	cm	今金中学校
51	石版画	コマとザボン	笠井誠一	48	×	64	cm	今金中学校
52	銅版画	てつせん	笠井誠一	62	×	52	cm	今金中学校
53	石版画	花と水差し	笠井誠一	91	×	71	cm	今金中学校
54	石版画	富士と梅	堅山南風	57	×	46	cm	今金中学校
55	石版画	蘇州	加藤東一	45	×	58	cm	今金中学校
56	石版画	静晝	下保 昭	71	×	64	cm	今金中学校
57	石版画	池畔	下保 昭	63	×	77	cm	今金中学校
58	石版画	寒牡丹 I	川島睦郎	88	×	69	cm	今金中学校
59	石版画	寒牡丹 II	川島睦郎	79	×	64	cm	今金中学校
60	石版画	花と鳥(夏) 1	川島睦郎	63	×	76	cm	今金中学校
61	石版画	花と鳥(夏) 2	川島睦郎	68	×	80	cm	今金中学校
62	石版画	花と鳥(秋)	川島睦郎	65	×	77	cm	今金中学校
63	石版画	藤 I	川島睦郎	79	×	64	cm	今金中学校
64	石版画	藤 II	川島睦郎	80	×	68	cm	今金中学校
65	石版画	頬	絹谷幸二	66	×	58	cm	今金中学校
66	石版画	太陽	絹谷幸二	58	×	66	cm	今金中学校
67	石版画	かがり火	木村圭吾	78	×	67	cm	今金中学校
68	石版画	風景(水と森)	久保嶺爾	63	×	81	cm	今金中学校
69	石版画	水に映る樹林	久保嶺爾	63	×	81	cm	今金中学校
70	石版画	動物	古賀春江	51	×	61	cm	今金中学校
71	石版画	船のある風景	古賀春江	51	×	66	cm	今金中学校
72	石版画	バレリーナ	小島俊男	78	×	60	cm	今金中学校
73	石版画	果物	小杉小二郎	45	×	56	cm	今金中学校
74	石版画	花	小杉小二郎	56	×	45	cm	今金中学校
75	石版画	延暦寺根本中堂	後藤純男	56	×	64	cm	今金中学校
76	石版画	金閣寺	後藤純男	45	×	75	cm	今金中学校
77	石版画	早春富士	後藤純男	67	×	82	cm	今金中学校
78	石版画	塔映四季(春)	後藤純男	53	×	62	cm	今金中学校
79	石版画	塔映四季(夏)	後藤純男	53	×	62	cm	今金中学校
80	石版画	塔映四季(秋)	後藤純男	54	×	62	cm	今金中学校
81	石版画	塔映四季(冬)	後藤純男	64	×	71	cm	今金中学校
82	石版画	富士	小林和作	68	×	88	cm	今金中学校

83	石版画	紅浅間	小山敬三	77	×	71	cm	今金中学校
84	銅版画	簪女日記	齊藤真一	71	×	64	cm	今金中学校
85	銅版画	簪女	齊藤真一	56	×	66	cm	今金中学校
86	銅版画	遊女	齊藤真一	56	×	66	cm	今金中学校
87	石版画	柄の浦	塩出英雄	56	×	66	cm	今金中学校
88	石版画	婦人像	芝田米三	74	×	66	cm	今金中学校
89	石版画	蒼空	下田義寛	68	×	58	cm	今金中学校
90	石版画	鹿Ⅰ	下田義寛	68	×	59	cm	今金中学校
91	石版画	鹿Ⅱ	下田義寛	68	×	58	cm	今金中学校
92	石版画	涙	下田義寛	71	×	63	cm	今金中学校
93	石版画	桜島Ⅰ	進藤 蒲	60	×	48	cm	今金中学校
94	石版画	桜島Ⅱ	進藤 蒲	60	×	48	cm	今金中学校
95	石版画	仏像	杉本健吉	48	×	45	cm	今金中学校
96	石版画	春霞	鈴木吉柏	55	×	67	cm	今金中学校
97	石版画	音声苦薩	開口正男	72	×	62	cm	今金中学校
98	石版画	菊	開口正男	74	×	65	cm	今金中学校
99	石版画	秋の川	開口雄揮	76	×	57	cm	今金中学校
100	石版画	霧の道	開口雄揮	50	×	65	cm	今金中学校
101	石版画	雪景	開口雄揮	64	×	71	cm	今金中学校
102	石版画	風景	千住 博	63	×	80	cm	今金中学校
103	銅版画	花	鷺山宇一	60	×	48	cm	今金中学校
104	石版画	オベリスクⅠ	滝沢具幸	67	×	78	cm	今金中学校
105	石版画	オベリスクⅡ	滝沢具幸	67	×	78	cm	今金中学校
106	石版画	月	滝沢具幸	56	×	64	cm	今金中学校
107	石版画	花	滝沢具幸	56	×	63	cm	今金中学校
108	石版画	雪	滝沢具幸	66	×	74	cm	今金中学校
109	石版画	南仏の風景	武田範芳	66	×	51	cm	今金中学校
110	石版画	ビエロたち	武田範芳	41	×	52	cm	今金中学校
111	銅版画	I	田辺和郎	71	×	64	cm	今金中学校
112	銅版画	II	田辺和郎	52	×	41	cm	今金中学校
113	銅版画	III	田辺和郎	52	×	41	cm	今金中学校
114	石版画	フランス人形	田村孝之助	66	×	51	cm	今金中学校
115	石版画	駒ヶ岳	土屋礼一	67	×	78	cm	今金中学校
116	石版画	室内	R. デュフィ	74	×	66	cm	今金中学校
117	石版画	女性像Ⅰ	東郷青児	64	×	56	cm	今金中学校
118	石版画	女性像Ⅱ	東郷青児	64	×	56	cm	今金中学校
119	石版画	女性像Ⅲ	東郷青児	64	×	56	cm	今金中学校
120	石版画	バラ	堂本元次	65	×	77	cm	今金中学校
121	石版画	柳	徳岡神泉	57	×	76	cm	今金中学校
122	石版画	グラデーション	永井一正	63	×	61	cm	今金中学校
123	石版画	馬上の火	中川一政	70	×	56	cm	今金中学校
124	石版画	夜桜	中島千波	76	×	57	cm	今金中学校
125	石版画	春光	中畠伸人	67	×	63	cm	今金中学校
126	石版画	紅白梅	中村岳陵	58	×	76	cm	今金中学校
127	石版画	赤い衣装の婦人	中村清治	66	×	58	cm	今金中学校
128	石版画	運河の風景	中村清治	58	×	78	cm	今金中学校
129	銅版画	白い衣装の婦人	中村清治	66	×	51	cm	今金中学校
130	石版画	大運河の風景	中村清治	60	×	78	cm	今金中学校
131	石版画	ドゥオーモの見える風景	中村清治	60	×	78	cm	今金中学校
132	石版画	読書する婦人	中村清治	48	×	40	cm	今金中学校

133	石版画	花飾りの帽子の女性	中村清治	60	×	48	cm	今金中学校
134	石版画	バンジーの静物	中村清治	51	×	66	cm	今金中学校
135	石版画	ブルーボーイの風景	中村清治	48	×	60	cm	今金中学校
136	石版画	婦人像 1	中村清治	66	×	73	cm	今金中学校
137	石版画	婦人像 2	中村清治	78	×	60	cm	今金中学校
138	石版画	フランス人形	中村清治	66	×	58	cm	今金中学校
139	石版画	ペニス風景	中村清治	59	×	66	cm	今金中学校
140	石版画	帽子をかぶった婦人 1	中村清治	74	×	66	cm	今金中学校
141	石版画	帽子をかぶった婦人 2	中村清治	78	×	60	cm	今金中学校
142	石版画	ほおづえの女性	中村清治	61	×	52	cm	今金中学校
143	石版画	緑の布の静物	中村清治	60	×	78	cm	今金中学校
144	石版画	洋梨等のある静物	中村清治	78	×	60	cm	今金中学校
145	石版画	城	西村龍介	55	×	64	cm	今金中学校
146	石版画	静日	西村龍介	72	×	90	cm	今金中学校
147	石版画	城と花	西村龍介	73	×	66	cm	今金中学校
148	石版画	おしどり	野々内良樹	50	×	59	cm	今金中学校
149	石版画	インコ(胸面)	橋本明治	52	×	69	cm	今金中学校
150	石版画	夏座敷	橋本明治	71	×	54	cm	今金中学校
151	石版画	舞妓 1	橋本明治	67	×	52	cm	今金中学校
152	石版画	舞妓 2	橋本明治	71	×	64	cm	今金中学校
153	石版画	家路	長谷部日出男	88	×	69	cm	今金中学校
154	石版画	インド女性座像	長谷部日出男	82	×	64	cm	今金中学校
155	石版画	タール沙漠の女	長谷部日出男	78	×	67	cm	今金中学校
156	石版画	風景(山)	服部正一郎	73	×	82	cm	今金中学校
157	石版画	水郷	服部正一郎	72	×	82	cm	今金中学校
158	石版画	樹林	濱田昇児	63	×	74	cm	今金中学校
159	石版画	風景	濱田昇児	64	×	71	cm	今金中学校
160	石版画	室生寺の塔	平山郁夫	70	×	63	cm	今金中学校
161	石版画	少女(横向き)	深沢邦朗	66	×	58	cm	今金中学校
162	石版画	少女(正面)	深沢邦朗	74	×	66	cm	今金中学校
163	石版画	田植え	深沢紅子	66	×	59	cm	今金中学校
164	石版画	花	深沢紅子	66	×	58	cm	今金中学校
165	石版画	楽土	福岡通男	60	×	48	cm	今金中学校
166	石版画	時の鏡(前髪)	藤井 勉	90	×	71	cm	今金中学校
167	石版画	時の鏡(湖)	藤井 勉	66	×	51	cm	今金中学校
168	石版画	時の鏡(ひなげし)	藤井 勉	61	×	51	cm	今金中学校
169	石版画	時の鏡(誕生日)	藤井 勉	66	×	51	cm	今金中学校
170	石版画	バンセ I	舟越保武	91	×	71	cm	今金中学校
171	石版画	バンセ II	舟越保武	91	×	71	cm	今金中学校
172	石版画	海辺の人々	星 守雄	60	×	48	cm	今金中学校
173	石版画	寒牡丹	松尾敏男	56	×	64	cm	今金中学校
174	石版画	桜	松尾敏男	56	×	64	cm	今金中学校
175	石版画	墨牡丹	松尾敏男	62	×	75	cm	今金中学校
176	石版画	牡丹と鳥	松尾敏男	64	×	71	cm	今金中学校
177	石版画	紅白梅	松本高明	58	×	45	cm	今金中学校
178	石版画	牡丹	三谷十糸子	50	×	60	cm	今金中学校
179	石版画	佳日(舞妓)	室井東志生	86	×	59	cm	今金中学校
180	石版画	桜花女人 A	森田暎平	75	×	62	cm	今金中学校
181	石版画	桜花女人 B	森田暎平	75	×	62	cm	今金中学校
182	石版画	大原女	森田暎平	82	×	66	cm	今金中学校

183	石版画	大原女（洛北おとめ）	森田暎平	114	×	72	cm	今金中学校
184	石版画	大原女（秋晴れ）	森田暎平	60	×	48	cm	今金中学校
185	石版画	大原女（山ぶどう）	森田暎平	56	×	64	cm	今金中学校
186	石版画	オリオン（冬）	森田暎平	64	×	56	cm	今金中学校
187	石版画	桔梗	森田暎平	55	×	62	cm	今金中学校
188	石版画	喜久 I	森田暎平	99	×	64	cm	今金中学校
189	石版画	喜久 II	森田暎平	99	×	64	cm	今金中学校
190	石版画	菊持ちおとめ	森田暎平	82	×	59	cm	今金中学校
191	石版画	清姫	森田暎平	70	×	61	cm	今金中学校
192	石版画	りんどう女人	森田暎平	77	×	57	cm	今金中学校
193	石版画	献血（紅白梅）	森田暎平	55	×	62	cm	今金中学校
194	石版画	立美人（枝垂桜文様）	森田暎平	100	×	65	cm	今金中学校
195	石版画	桜吹雪 I	森田暎平	63	×	53	cm	今金中学校
196	石版画	桜吹雪 II	森田暎平	64	×	56	cm	今金中学校
197	石版画	桜文桃山おとめ I	森田暎平	99	×	64	cm	今金中学校
198	石版画	春装 A	森田暎平	62	×	53	cm	今金中学校
199	石版画	聖観音像	森田暎平	90	×	51	cm	今金中学校
200	石版画	桜文桃山おとめ II	森田暎平	99	×	64	cm	今金中学校
201	石版画	立美人 II	森田暎平	96	×	58	cm	今金中学校
202	石版画	立美人 III	森田暎平	96	×	58	cm	今金中学校
203	石版画	立美人（八橋紋様）	森田暎平	100	×	65	cm	今金中学校
204	石版画	龍田川（秋）	森田暎平	75	×	62	cm	今金中学校
205	石版画	龍田川（立像）	森田暎平	70	×	61	cm	今金中学校
206	石版画	夏	森田暎平	45	×	57	cm	今金中学校
207	石版画	如意輪觀音像	森田暎平	76	×	58	cm	今金中学校
208	石版画	野分 A	森田暎平	69	×	81	cm	今金中学校
209	石版画	花	森田暎平	54	×	62	cm	今金中学校
210	石版画	般若心経	森田暎平	58	×	76	cm	今金中学校
211	石版画	舞い子（弥生） I	森田暎平	63	×	53	cm	今金中学校
212	石版画	舞い子（弥生） II	森田暎平	63	×	53	cm	今金中学校
213	銅版画	舞い子（黒）	森田暎平	76	×	57	cm	今金中学校
214	銅版画	舞い子（橋）	森田暎平	76	×	62	cm	今金中学校
215	銅版画	舞い子（弥生） III	森田暎平	64	×	56	cm	今金中学校
216	石版画	遊楽団 I	森田暎平	76	×	58	cm	今金中学校
217	石版画	遊楽団 II	森田暎平	69	×	56	cm	今金中学校
218	石版画	遊楽団 A	森田暎平	64	×	56	cm	今金中学校
219	石版画	遊楽団 B	森田暎平	64	×	56	cm	今金中学校
220	石版画	雪国より	森田暎平	55	×	62	cm	今金中学校
221	銅版画	洛北おとめ（車文様）	森田暎平	72	×	61	cm	今金中学校
222	石版画	洛北少女（A・波）	森田暎平	44	×	51	cm	今金中学校
223	石版画	洛北少女（椿）	森田暎平	76	×	57	cm	今金中学校
224	石版画	慶長おとめ	森田暎平	66	×	53	cm	今金中学校
225	石版画	洛北少女（C・桜）	森田暎平	44	×	51	cm	今金中学校
226	石版画	洛北少女（D・桔梗）	森田暎平	44	×	51	cm	今金中学校
227	銅版画	洛北少女（黒）	森田暎平	76	×	57	cm	今金中学校
228	石版画	洛北少女（そよ風）	森田暎平	64	×	56	cm	今金中学校
229	石版画	大原女・梅（B）	森田暎平	62	×	53	cm	今金中学校
230	銅版画	裸婦（正面）	森田暎平	46	×	38	cm	今金中学校
231	銅版画	裸婦（背面）	森田暎平	46	×	38	cm	今金中学校
232	石版画	ばら	安井曾太郎	79	×	67	cm	今金中学校

233	石版画	菊	山口蓬春	58 × 76 cm	今金中学校
234	石版画	冬	山羽斌士	48 × 60 cm	今金中学校
235	石版画	鮎	末陀 寛	55 × 66 cm	今金中学校
236	石版画	牛	末陀 寛	55 × 60 cm	今金中学校
237	石版画	水牛	B.ワイルドスミス	76 × 58 cm	今金中学校
238	銅版画	花	渡辺達正	60 × 49 cm	今金中学校

典籍

No.	種別	名称	所在地	所有者・管理者	備考
1	歴史資料	今村家史料	今金	町	
2	歴史資料	天沼家史料	神丘	個人	
3	歴史資料	丸山家史料	神丘	個人	
4	歴史資料	イシマヌエル村憲法	神丘	個人	
5	歴史資料	聖公会イシマヌエル教会文書	神丘	教会	
6	歴史資料	後志国瀬棚郡利別原野区画図	今金	北海道	十字架形防風林を記録

考古資料

No.	名称	時代	点数	所在地	所有者・管理者	備考
1	ビリカ遺跡出土遺物 (C,D,E,K 地点)	旧石器	約9万点	美利河	町 Kは國學院大學	A,Bは国指定 もしくは町指定
2	美利河2遺跡出土遺物	旧石器	一式	美利河	町	
3	美利河3遺跡出土遺物	旧石器	一式	美利河	町	
4	神丘7遺跡出土遺物	旧石器	一式	美利河	町	
5	金原1遺跡採集の蘭越型細石刃核	旧石器	1点	美利河	町	
6	神丘2遺跡出土遺物	旧石器・縄文	一式	美利河	町	
7	神丘5遺跡採集の大形石製品	縄文	4点	美利河	町	
8	神丘15遺跡採集の大形石製品	縄文	1点	美利河	町	
9	神丘11遺跡採集の鐸形土製品	縄文	1点	美利河	町	
10	種川2遺跡採集の小型土器	縄文	1点	美利河	町	
11	町内分布調査採集資料	旧石器・縄文	一式	美利河	町	

○民俗文化財

No.	種別	名称(内容)	所在地	所有者・管理者	備考
1	有形民俗	砂金採取用具一式	美利河	町	4種14点
2	有形民俗	馬具一式(鞍、馬樋、つり皮等)	美利河	町	21種約50点
3	有形民俗	林業用具一式(羽広、各種鋸、バチ櫛等)	美利河	町	16種約30点
4	有形民俗	水田作作用具一式(代かき馬蹠、除草機等)	美利河	町	15種約30点
5	有形民俗	畑作用具一式(ブラウ、唐竿、播種器等)	美利河	町	12種約20点
6	有形民俗	酪農用具一式(牛乳缶、呼び鈴、鈴金バター箱)	美利河	町	3種3点
7	有形民俗	漁具一式(アユの友釣り、ヤツメ漁関係)	美利河	町	4種6点
8	有形民俗	冬の暮らし用具一式(かんじき、ストーブ等)	美利河	町	7種12点
9	有形民俗	べチカ	神丘	個人	現在使用中
10	有形民俗	今金八幡宮例大祭祭具一式	今金	今金八幡宮	
11	無形民俗	今金八幡宮例大祭	今金	今金八幡宮	
12	無形民俗	今金音頭	今金	町	
13	無形民俗	今金甚句	今金	町	
14	無形民俗	今金しぐれ	今金	町	
15	無形民俗	今金狩場太鼓	今金	保存会	
16	無形民俗	神丘黎明太鼓	神丘	保存会	
17	無形民俗	馬頭観音供養祭	町内		

○記念物

No.	種別	名称	所在地	所有者・管理者	備考
1	天然記念物	ビリカカイギュウ化石産出地点	美利河	国	
2	天然記念物	ビリカカイギュウ化石実大標本模型	美利河	町	
3	天然記念物	ビリカカイギュウ共伴化石	美利河	町	
4	天然記念物	美利河温泉鍾乳洞「底なしの湯壺」	美利河	国	立入不可
5	天然記念物	オオシュブンナイの滝	中里	国	立入不可
6	天然記念物	瀬棚動物群化石標本	美利河	町	
7	天然記念物	貝化石を産出する瀬棚層露頭	中里	国	
8	天然記念物	貝化石を産出する八雲層露頭	豊田		
9	天然記念物	貝化石を産出する八雲層露頭	種川	個人	貝殻橋付近
10	天然記念物	八雲層・黒松内層標式露頭	住吉	国	住吉橋付近
11	天然記念物	訓縫層露頭「熊すべりの跡」	美利河	国	立入不可
12	天然記念物	美利河・二股自然休養林	美利河	国	その他選定(自然休養林)
13	天然記念物	今金八幡神社裏山のブナ林	今金	町	北海道指定鳥獣保護区
14	天然記念物	常代の松	種川	国	その他選定(道150選)
15	天然記念物	今村・金森再会記念植樹	今金	町	
16	天然記念物	旧渡船場の大ボプラ	神丘	国	

○文化的景観

No.	種別	名称	所在地	所有者・管理者	備考
1	文化的景観	青木の高台	八東	個人	
2	文化的景観	今金男しゃく烟	神丘	個人	
3	文化的景観	日進牧場	日進	個人	
4	文化的景観	光台牧場	光台	個人	

○文化財類型には該当しないが町にとって重要なもの

No.	いまかね遺産類型	名称	所在地	所有者・管理者	備考
1	記憶遺産	山崎喜三郎内声音源	今金	個人	
2	記憶遺産	今金回想シリーズ「人」59件	今金	町	
3	記憶遺産	瀬棚線田植え列車			
4	地名	アイヌ語地名	今金		
5	地名	イシマスエル	神丘		
6	信仰	狩場山十字架雪渓	せたな町	国	
7	信仰	十字架形防風林	神丘	個人	
8	食文化	今金男しゃくの郷土料理(イモ餅、塩煮等)			
9	食文化	今金男しゃくの商品(ラムネ、チップス等)		事業者	
10	農産物	今金男しゃく			
11	農産物	今金男しゃくの生産体制			
12	観物	後志利別川砂金			
13	観物	花石メノウ			
14	観物	美利河マンガン			
15	自然	奥美利河温泉	美利河	町	立入不可
16	自然	後志利別川		国	

○埋蔵文化財包蔵地（登載番号順）

登載番号	種別	名称	所在地	主な時代	調査年
1	洞窟遺跡	鈴岡 1号洞窟遺跡	鈴岡	縄文～続縄文時代	
2	遺物包含地	神丘 1遺跡	神丘	縄文時代	
3	遺物包含地	神丘 2遺跡	神丘	旧石器～縄文時代	昭和 63 年
4	遺物包含地	神丘 3遺跡	神丘	縄文時代	
5	遺物包含地	八束 1遺跡	八束	縄文時代	
6	遺物包含地	田代 1遺跡	田代	縄文時代	
7	遺物包含地	花石 1遺跡	花石	旧石器時代	
8	遺物包含地	花石 2遺跡	花石	不明	
9	洞窟遺跡	鈴岡 2号洞窟遺跡	鈴岡	不明	
10	遺物包含地	中里 1遺跡	中里	不明	
11	遺物包含地	種川 1遺跡	種川	縄文時代	
12	鉱物採掘跡	カニカシ岳金山跡	国有林	江戸時代	
13	遺物包含地	美利河 1遺跡	美利河	旧石器時代	昭和 58-59 年、平成 12-14 年
14	鉱物採掘跡	美利河 1 砂金採掘跡	美利河	江戸時代	昭和 63 年
15	鉱物採掘跡	美利河 2 砂金採掘跡	美利河	江戸時代	昭和 56 年
16	遺物包含地	美利河 2遺跡	美利河	旧石器～縄文時代	昭和 58 年
17	遺物包含地	神丘 4遺跡	神丘	縄文時代	
18	遺物包含地	神丘 5遺跡	神丘	縄文時代	
19	遺物包含地	神丘 6遺跡	神丘	縄文時代	
20	遺物包含地	神丘 7遺跡	神丘	旧石器時代	
21	遺物包含地	神丘 8遺跡	神丘	旧石器～縄文時代	
22	遺物包含地	神丘 9遺跡	神丘	旧石器～縄文時代	
23	遺物包含地	神丘 10遺跡	神丘	縄文時代	
24	遺物包含地	神丘 11遺跡	神丘	縄文時代	
25	遺物包含地	神丘 12遺跡	神丘	縄文時代	
26	遺物包含地	神丘 13遺跡	神丘	縄文時代	
27	遺物包含地	神丘 14遺跡	神丘	縄文時代	
28	遺物包含地	神丘 15遺跡	神丘	縄文時代	
29	遺物包含地	神丘 16遺跡	神丘	縄文時代	
30	遺物包含地	神丘 17遺跡	神丘	縄文時代	
31	遺物包含地	神丘 18遺跡	神丘	縄文時代	
32	遺物包含地	神丘 19遺跡	神丘	旧石器時代	
33	遺物包含地	神丘 20遺跡	神丘	旧石器時代	
34	遺物包含地	鈴岡 1遺跡	鈴岡	旧石器時代	
35	遺物包含地	田代 2遺跡	田代	縄文時代	
36	遺物包含地	田代 3遺跡	田代	縄文時代	
37	遺物包含地	田代 4遺跡	田代	縄文時代	
38	遺物包含地	八束 2遺跡	八束	縄文時代	
39	遺物包含地	八束 3遺跡	八束	縄文時代	
40	遺物包含地	八束 4遺跡	八束	縄文時代	
41	遺物包含地	種川 2遺跡	種川	縄文時代	
42	遺物包含地	種川 3遺跡	種川	縄文時代	
43	遺物包含地	種川 4遺跡	種川	縄文時代	
44	遺物包含地	種川 5遺跡	種川	縄文時代	
45	遺物包含地	種川 6遺跡	種川	縄文時代	
46	遺物包含地	種川 7遺跡	種川	縄文時代	
47	遺物包含地	種川 8遺跡	種川	縄文時代	

48	遺物包含地	種川 9 遺跡	種川	縄文時代	
49	遺物包含地	住吉 1 遺跡	住吉	縄文時代	
50	遺物包含地	住吉 2 遺跡	住吉	縄文時代	
51	遺物包含地	住吉 3 遺跡	住吉	縄文時代	
52	遺物包含地	中里 2 遺跡	中里	旧石器時代	
53	遺物包含地	花石 3 遺跡	花石	旧石器時代	
54	遺物包含地	白石 1 遺跡	白石	縄文時代	
55	鉱物採掘跡	美利河 3 砂金採掘跡	美利河	江戸時代	平成 2 年
56	遺物包含地	美利河 3 遺跡	美利河	旧石器時代	平成 16 年
57	遺物包含地	美利河 4 遺跡	美利河	旧石器時代	
58	鉱物採掘跡	花石 1 砂金採掘跡	花石	江戸時代	
59	鉱物採掘跡	宮島 1 砂金採掘跡	宮島	江戸時代	平成 21 年

資料3 今金町文化財保存活用地域計画策定委員会設置要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、今金町文化財保存活用地域計画策定委員会（以下、「委員会」という）の設置及び運営に関する事項を定めるものとする。

(設置)

第2条 町長の諮問に応じ、今金町文化財保存活用地域計画の作成および変更に関する協議並びに連絡調整を行うため、今金町文化財保存活用地域計画策定委員会を設置する。

(組織)

第3条 委員会は、委員20名以内で組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから町長が委嘱する。

(1) 学識経験者

(2) 今金町文化財保護委員会代表者

(3) 今金町内会・自治会代表者

(4) 今金町学校教育関係団体代表者

(5) 今金町産業関係団体代表者

(6) 今金町観光関係団体代表者

(7) 北海道教育庁文化財・博物館課担当者

(8) その他町長が必要と認める者

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会に委員長及び副委員長各1名を置き、委員の互選によつてこれを決める。

2 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長事故あるときは、その職務を代理する。

(委員)

第5条 委員は、当該諮問にかかる審議が終了したときは、解任されるものとする。

(会議)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(答申)

第7条 委員会の委員長は、審議の結果を町長に答申する場合は、審議の経過をあわせて報告しなければならない。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、今金町教育委員会事務局において処理する。

(雑則)

第9条 この要綱に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、町長が定める。

附 則

この要綱は、令和3年4月1日から施行する。

資料4「課題－方針－措置」対照表(関連文化財群以外の事業)

保存・活用に関する課題	方針	保存・活用に関する措置 (事業名)	事業内容	実施年						計画期間(R4~12)				取組主体				財源
				前期			中期			後期			行政	専門家	団体	市民		
				4	5	6	7	8	9	10	11	12						
担い手の減少 高齢化 理解不足	守る	1 文化財の指定・登録の推進	把握調査や専門家によって価値付けされた文化財は順次新規指定・登録を推進し、保存と活用を図る。										◎	○				町
		2 美利河砂金採掘跡の保存整備	安全に見学できるような環境整備、解説案内板を設置し、学校教育・社会教育両面での活用や観光活用を図る。										◎	○	○	○	国補助	
		3 「いまかね遺産」選定会議の開催	地域住民が選定過程に加わることで課題を共有し、地域の歴史文化を守る連携・協力体制を構築し、あわせて保護意識の啓発を図る。										◎	○	○	○	町	
		文化財の防災・防犯事業	文化財ハザードマップ・文化財危機管理マニュアルを作成し、危険個所の把握と災害時の連絡体制を構築する。保存環境の維持や防犯体制の強化に取り組む。										◎		○	○	町	
調査が不十分 職員体制 連携不足	調べる	4 重要遺跡所在確認調査	把握調査で確認された重要遺跡(チャシ跡、純文道跡等)の所在確認・試掘調査を実施し、今後の保存整備に向けた基礎資料とする。										◎	○	○	○	国補助	
		5 ピリカ遺跡の専門的調査と報告書刊行	重要なが認識されながらも未解明の部分の調査を行い、遺跡の価値付けをより明確にする。未報告分の調査報告書を刊行して情報公開し、今後のさらなる研究や教育普及のための基礎資料とする。										◎	○	○	○	国補助	
		6 マンガン鉱山の把握調査	専門家の指導訪問のもと、鉱山現地での分布調査や文献調査、保管資料の調査を進め、鉱山の全容を把握し、教育普及・観光活用を図る。										◎	○	○	○	国補助	
		7 カニカニ岳金山跡の把握調査	採掘坑や露頭掘り跡、鉱山臼敷布域、拠点的作業場等、現地での所在確認調査や文献調査を実施して鉱山の全貌を把握し、教育普及・教育利用の基礎とする。										◎	○	○	○	町	
		8 ピリカカイギュウ化石の専門的調査	ピリカカイギュウ化石の専門的研究、価値付けを実現し、今後の普及啓発・教育利用の基礎とする。										◎	○	○	○	町	
		9 歴史的建造物・民俗芸能の把握調査	寺社や民家等の歴史的建造物の調査で保存対象を把握し、併せて祭礼等の民俗芸能の悉皆調査をし、その由来や失われたものを把握する。										◎	○	○	○	町	
		10 ピリカカイギュウ化石の特設展示場整備	露出断面の解説板を改修するとともに、実大復元模型や町内産の貝化石等の展示場をわかりやすい形で整備し、教育普及・観光活用両面での活用を図る。施設整備の方向性については、中期段階までに協議・決定する。										◎	○	○	○	国補助	
		11 ピリカ遺跡に関する調査研究成果の活用	蓄積した調査研究の成果を公開セミナーの開催等を通して地域住民に還元するとともに、研究機関や専門家の合う研究活動の支援と連携協力を通じて、遺跡の価値付けをさらに磨き上げる。										◎	○	○	○	町	
		12 フットバスコースの整備・周遊アプリの開発	美利河地区にある多様な文化財を周遊できるコースを整備し、教育利用と観光活用を図る。ピリカプロジェクト委員会の取組を継承し、技術開発は大学等の研究機関や専門家と連携し、内容を洗練化する。										◎	○	○	○	国補助	
施設未整備 わかりづらい 受入体制	磨き上げる	13 マンガン鉱山・国鉄棚線の再現展示	鉱山全景のジオラマ制作や、動力機械を活用した再現展示等で、稼働時の様子を臨場感もって伝えられるよう整備する。棚線開闢時の資料収集を推進し、展示会等を通して鉄道の果たした功績を後世に伝える。事業は地元愛好者団体と連携する。										◎	○	○	○	国補助	
		14 歴史文化を活かした観光活用	砂金選鉱やマンガン鉱山などの商業遺産を北海道遺産に申請し、選定を目指す(令和4年10月発表)。関係課・関係機関と連携して、町外の関連遺産等とつながる周遊ルートを設定し、観光活用を図る。										◎	○	○	○	町・民間補助	
		15 「ふるさと学習プログラム」の導入	学校教育の課程の中に体験プログラムを学校に応じて組み込み、町の歴史文化を学ぶべく導入する。義務教育を修了したときはすべての子どもたちが今金町の歴史文化を知ることができるよう、関係機関と連携を図り、入塾態勢を整備する。										◎	○	○	○	町	
		16 定期的な講習会を通じたボランティア養成	講習会を通じてボランティアガイドを要請し、歴史文化の保存と継承を図る。既存の団体や興味関心ある人を積極的に呼び込むとともに、行政が活動支援を行い、運営の円滑化を図る。										◎	○	○	○	町	
		17 子どもたちの参加機会の提供	史跡整備や重要遺跡の把握調査、専門家による現地調査など、可能な範囲で調整し、地元の子どもたちが現地で肌で感じられる見学・参加機会を設け、郷土の歴史や文化に興味関心をもつづかせること。										◎	○	○	○		
学ぶ機会少ない 受入体制	育てる	18 「ふるさと学習プログラム」の導入	学校教育の課程の中に体験プログラムを学校に応じて組み込み、町の歴史文化を学ぶべく導入する。義務教育を修了したときはすべての子どもたちが今金町の歴史文化を知ることができるよう、関係機関と連携を図り、入塾態勢を整備する。										◎	○	○	○	町	
		19 定期的な講習会を通じたボランティア養成	講習会を通じてボランティアガイドを要請し、歴史文化の保存と継承を図る。既存の団体や興味関心ある人を積極的に呼び込むとともに、行政が活動支援を行い、運営の円滑化を図る。										◎	○	○	○	町	
		20 子どもたちの参加機会の提供	史跡整備や重要遺跡の把握調査、専門家による現地調査など、可能な範囲で調整し、地元の子どもたちが現地で肌で感じられる見学・参加機会を設け、郷土の歴史や文化に興味関心をもつづかせること。										◎	○	○	○		

※行政:町教委・連携課／専門家:大学・研究機関／団体:町内の支援団体・機関／市民:個人・町内会自治会

◎は主として取り組む主体
○は協力して取り組む主体

資料4 関連文化財群ごとの「方針－措置」対照表

※関連文化財群としての事業はNo.18～24

方針	保存・活用に関する措置 (事業名)	事業内容	実施年															
			計画期間(R4~12)						取組主体				財源					
			前期	中期	後期	行政	専門家	団体	町民									
4 5 6 7 8 9 10 11 12																		
①大型カイギュウが暮らした地																		
効果的な情報発信	12 フットバスコースの整備・周遊アプリの開発	美利河地区にある多様な文化財を周遊できるコースを整備し、教育利用と観光活用を図る。ビリカプロジェクト委員会の取組を継承し、技術開発は大学等の研究機関や専門家と連携し、内容を洗練化する。					◎	○	○	○	国補助							
	14 歴史文化を活かした観光活用	砂金開採やマンガン鉱山などの産業遺産を北海道遺産に申請し、選定を目指す(令和4年10月発表)。関係課・関係機関と連携して、町外の関連遺産等とつながる周遊ルートを設定し、観光活用を図る。					◎	○	○	○	町・民間補助							
見学しやすい環境整備	18 産出地点案内板の整備	化石露出状況の復元展示や、デジタル技術を活用した再現などを通じて、当時の地でビリカカイギュウが暮らしていた様子をよりわかりやすい形で伝え、教育普及・観光活用に役立てる。									国補助							
	10 ビリカカイギュウ化石の特設展示場整備	産出地点の解説板を改修することともに、実大復元模型や町内産の貝化石等の展示場をわかりやすい形で整備し、教育普及・観光活用両面での活用を図る。施設整備の方向性については、中期目標までに協議、決定する。					◎	○	○	○	国補助							
②旧石器時代の大石器製作拠点・ビリカ遺跡																		
旧石器文化の発信拠点へ	19 延門職員の安定的な配置と研究成果の発信	調査研究を担う延門職員の安定的確保と配属、成果の発信媒体(報報などの定期刊行物)の定期発行、シンポジウムやセミナーの開催等を通して、ビリカ遺跡を旧石器文化の発信拠点とする。					◎	○	○	○	町							
	20 史跡ビリカ遺跡保存活用計画の更新	これまでの史跡整備の評価と今後の在り方にについて幅広い視野から審議し、これから時代の望ましい保存活用計画を作成する。					◎	○	○	○	国補助							
	5 ビリカ遺跡の専門的調査と報告書刊行	重要性が認識されながらも未解明の部分の調査を行い、遺跡の価値付けをより明確にする。未報告分の調査報告書を刊行して情報公開し、今後のさらなる研究や教育普及そのための基礎資料とする。					◎	○	○	○	国補助							
	11 ビリカ遺跡に関する調査研究成果の活用	蓄積した調査研究の成果を公開セミナーの開催等を通じて地域住民に元々するとともに、研究機関や専門家の行う研究活動の支援や連携協力を通じて、遺跡の価値付けをさらに磨き上げる。					◎	○	○	○	町							
	21 近隣の関連遺産等との交流・連携	近隣地域との情報交流(見学交流や研修会の開催等)、観光業者とタッグしたツアーを企画するなど、ビリカ遺跡の魅力にかかる機会をつくる。					◎	○	○	○	国補助							
「縄文以前」の世界への誘導	12 フットバスコースの整備・周遊アプリの開発	美利河地区にある多様な文化財を周遊できるコースを整備し、教育利用と観光活用を図る。ビリカプロジェクト委員会の取組を継承し、技術開発は大学等の研究機関や専門家と連携し、内容を洗練化する。					◎	○	○	○	国補助							
③豊かな鉱物資源により特徴付けられる鉱山文化																		
子どもたちが学ぶしくみづくり	15 「ふるさと学習プログラム」の導入	学校教育の課程の中に実験プログラムを全年に応じて組み込み、町の歴史文化を学ぶ楽しみを導入する。義務教育を修了したときにはすべての子どもたちが今町の歴史文化を知ることができるよう、関係機関と連携をとり、受入態勢を整備する。					◎	○	○	○	町							
	17 子どもたちの参加機会の提供	史跡整備や重要遺跡の実地調査、専門家による現地調査など、可能な範囲で調整し、地元の子どもたちが現地を肌で感じられる見学・参加機会を設け、郷土の歴史や文化に興味関心をもつきっかけとする。					◎	○	○	○	町							
岩石・鉱物を活用した魅力発信	22 北海道遺産として魅力を発信	本開拓文化財群にまつわるストーリーをNPO法人北海道遺産協議会が運営する北海道遺産に申請して選定を目指し申請中)、遺産の魅力を広く発信する。他の開拓遺産と連携を図り、観光活用を図る。					◎	○	○	○	民間補助							
	13 マンガン鉱山・国鉄湧棚線の再現展示	鉱山全景のジオラマ制作や、動力機械を活用した再現展示等で、稼働時の様子を臨場感もって伝えられるよう整備する。湧棚線開通の資料収集を推進し、展示会等を通じて鉄道の果たした功績を後世に伝える。事業は地元愛好者団体と連携する。					◎	○	○	○	国補助							
	14 歴史文化を活かした観光活用	砂金開採やマンガン鉱山などの産業遺産を北海道遺産に申請し、選定を目指す(令和4年10月発表)。関係課・関係機関と連携して、町外の関連遺産等とつながる周遊ルートを設定し、観光活用を図る。					◎	○	○	○	町・民間補助							
④キリスト教団体が入植した地																		
基本調査と保存措置	23 文書史料や歴史的建造物の把握調査	資料類調査・収集し、記録保存を進め、本地域の歴史をわかりやすい媒體として整備する。また、今金インマヌエル教会の基礎的な建造物調査を実施し、価値付けを明確にする。					◎	○	○	○	町							
	24 建造物の保存措置	建造物の管理を担う地元団体と協議し、早期に補修が必要な個所がある場合には、適切な保存措置を講じる。					◎	○	○	○	国補助							
ボランティアガイドの養成	16 定期的な講習会を通じたボランティア養成	講習会を通じてボランティアガイドを要請し、歴史文化の保存と継承を図る。既存の団体や興味関心ある人を積極的に呼び込むとともに、行政が活動支援を行い、運営の円滑化を図る。					◎	○	○	○	町							

※行政:町教委・連携課／専門家:大学・研究機関／団体:町内の支援団体・機関／町民:個人・町内会自治会・所有者



今金町文化財保存活用地域計画

(文化庁長官認定: 令和4年7月22日)

印刷: 令和4年9月30日

発行: 今金町教育委員会

編集: 今金町教育委員会社会教育グループ

〒049-4308

北海道漸棚郡今金町字今金48番地1

電話 0137-82-3488



令和3年度文化庁地域文化財総合活用推進事業補助金
(文化財保存活用地域計画等作成事業)